

岡遺跡

県道大久保伊尾木線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

2016.3

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

岡遺跡

県道大久保伊尾木線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

2016.3

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

安芸市は山間部から太平洋まで様々な地形がみられ、それぞれの地形を生かした文化を育んできました。安芸平野は県東部域の最大規模を誇り、周知の文化財から古来より重要な地域であったことは明白です。発掘調査の事例は少なく、有史以前の状況は不明瞭であり、今後の発掘調査に期待が持たれます。

今回、報告します岡遺跡は表採遺物より弥生時代から近世にかけての遺跡として周知されてきました。発掘調査では古代から近世にかけての遺構・遺物がみつきり、特に近世では屋敷地の一部を検出しました。『長宗我部地検帳』に記載されている内容と重ね合わせることで立体的に歴史を復元することができましたことも大きな成果の一つです。

最後になりましたが、今回の調査では高知県安芸土木事務所、安芸市教育委員会をはじめ地元の皆様には多大なご理解とご協力を得ることができました。また、発掘作業・整理作業に従事していただきました作業員の皆様に対しましても厚く御礼を申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長 松田直則

例言

1. 本書は県道大久保伊尾木線道路改良工事に伴い発掘調査を実施した岡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県安芸土木事務所から受託し、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間・整理期間・調査面積
調査期間：現地調査 平成27年4月23日～5月27日
整理作業 平成27年11月1日～平成28年3月10日
調査面積：460 m²
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。
総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 松田直則
総務：同次長兼総務課長 東 勝彦, 同総務係長 吉森和子, 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼第一班長 吉成承三
調査担当：同主任調査員 久家隆芳, 調査補助員 坂本憲彦
整理担当：同主任調査員 久家隆芳, 調査補助員 坂本憲彦
事務補助員：谷 幸絵
5. 本書の執筆は第Ⅰ章～第Ⅲ章を久家、第Ⅳ章はパリノ・サーヴェイ株式会社(辻 康男氏・松元美由紀氏)、第Ⅴ章1は坂本、第Ⅴ章2は久家が行った。編集は久家が行った。現場写真・遺物写真は主に久家が撮影した。
なお、写真図版11の包含層青磁碗出土状況の写真は、職場体験生の吉本一稀君(南国市立北陵中学校)が撮影した。
6. 遺構については、SK(土坑)、P(柱穴)、SX(性格不明遺構)等で表記した。遺構埋土で、「C」は炭化物粒、「Fe」は鉄分、「Mn」はマンガン粒、「地づ」は地山ブロック、「極少」は極少量、「少」は少量、「多」は多量を略記した。また、掲載している遺構平面図・断面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは世界測地系のGNである。
7. 現地調査及び報告書作成にあたっては、安芸市歴史民俗資料館、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏のご指導及びご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
8. 発掘作業・整理作業について、多くの方々に労を厭わず作業に従事して頂いた。記して厚く感謝の意を表したい。(敬称略, 五十音順)
発掘作業：上屋福美・公文美和・小松朝子・小松世喜子・坂井千寿・西岡輝義
整理作業：加来安由美・松田美香
9. 遺物については、原則S=1/3とし、各挿図にはスケールバーを掲載している。
10. 調査の実施にあたっては、高知県安芸土木事務所のご協力を頂いた。また、地元住民の方々には遺跡に対するご理解とご協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物の注記は、遺跡略号を「15-1AO」とし、図面、写真資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査方法.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査方法.....	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境.....	3
1. 地理的環境.....	3
2. 歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 調査成果.....	7
1. 調査の概要.....	7
(1)Ⅰ区の調査概要.....	7
(2)Ⅱ区の調査概要.....	7
2. 基本層序.....	7
(1)Ⅰ区の基本層序.....	7
(2)Ⅱ区の基本層序.....	7
3. 検出遺構と出土遺物.....	11
(1)Ⅰ区.....	11
(2)Ⅱ区.....	21
第Ⅳ章 岡遺跡の自然科学分析.....	37
1. はじめに.....	37
2. 微細物分析.....	37
(1)試料.....	37
(2)分析方法.....	37
(3)結果.....	37
(4)考察.....	39
3. 放射性炭素年代測定.....	40
(1)試料.....	40
(2)分析方法.....	40
(3)結果.....	41
4. 金属遺物の分析.....	41
(1)試料.....	41
(2)分析方法.....	41
(3)結果.....	42
(4)考察.....	44
第Ⅴ章 まとめ.....	45
1. 『長宗我部地検帳』からみた伊尾木村.....	45
2. まとめ.....	50

挿図目次

第 1 図 安芸市位置図	1
第 2 図 調査区位置図	2
第 3 図 安芸市の遺跡地図	4
第 4 図 遺跡変遷図	6
第 5 図 基本層序	8
第 6 図 I 区上面遺構平面図	9
第 7 図 I 区下面遺構平面図	10
第 8 図 I 区SK1平面図・断面図・出土遺物実測図	11
第 9 図 I 区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図1	12
第10図 I 区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図2	13
第11図 I 区ピット・SX1平面図・断面図・出土遺物実測図	14
第12図 I 区SX2出土遺物実測図	15
第13図 I 区遺構外出土遺物実測図1	16
第14図 I 区遺構外出土遺物実測図2	17
第15図 II 区上面遺構平面図	19
第16図 II 区下面遺構平面図	20
第17図 II 区SK2平面図・エレベーション図・出土遺物実測図	21
第18図 II 区SK平面図・断面図・出土遺物実測図1	22
第19図 II 区SK平面図・断面図・出土遺物実測図2	23
第20図 II 区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図1	24
第21図 II 区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図2	25
第22図 II 区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図3	26
第23図 II 区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図4	27
第24図 II 区ピット平面図・エレベーション図・出土遺物実測図	28
第25図 II 区SX3平面図・断面図・出土遺物実測図	31
第26図 II 区遺構外出土遺物実測図1	32
第27図 II 区遺構外出土遺物実測図2	34
第28図 種実遺体	38
第29図 顕微鏡組織・EPMA 調査結果	43
第30図 検地実施日復元図・地検帳地目内訳図	47

表目次

表1 岡遺跡周辺の遺跡一覧	5
表2 微細物分析(土壌洗い出し)・種実同定結果	38
表3 樹種同定結果	39
表4 放射性炭素年代測定結果	40
表5 供試材の履歴と調査項目	41
表6 供試材の化学組成	44
ピット計測表	51
遺物観察表	59

写真目次

図版 1	安芸平野遠景	P8 断面
	I 区調査前風景	P9 断面
図版 2	II 区調査前風景	P13 断面
	I 区南半部完掘状況	図版 10 P15 断面
図版 3	II 区北半部上面完掘状況	P16 断面
	II 区南半部上面完掘状況	P20 断面
図版 4	II 区南半部西半下面完掘状況	P38 完掘状況
	I 区北半部西壁断面	P42 完掘状況
図版 5	II 区北半部東壁断面	P42 断面
	SK2 断面	P54 石出土状況
図版 6	SK7 ~ 11 完掘状況	P54 断面
	SX3 礫検出状況 1	図版 11 P71 断面
図版 7	SX3 礫検出状況 2	P72 断面
	SX3 断面	P73 断面
図版 8	SK2 掘削状況	P74 断面
	SK2 壁面状況	P106 瓦質土器羽釜出土状況
	SK3 完掘状況	包含層青磁碗出土状況
	SK7 断面	SX3_P1 完掘状況
	SK9 完掘状況	SX3_P2 完掘状況
	SK10 完掘状況	図版 12 手づくね皿 (1・66・72・74・75)
	SK11 完掘状況	瓦質土器 (101・146・205 ~ 207)
	SK11 断面	図版 13 青磁内面 (5・17・83 ~ 89・176 ~ 181)
図版 9	P1 断面	同上外面
	P2 断面	図版 14 瓦器内面 (8・13・76 ~ 81)
	P4 断面	同上外面
	P5 断面	図版 15 土師質土器羽釜内面 (95 ~ 99)
	P6 砥石出土状況	同上外面

図版 16 須恵器片口鉢 (14)

陶器搗鉢 (9・108)

陶器碗 (106)

図版 17 陶器碗 (122)

陶器皿 (192・195)

図版 18 砥石 (3)

土師器皿 (67・68)

土錘 (102・103・210)

陶器搗鉢 (199)

土師質土器茶釜 (208)

図版 19 土師質土器杯 (10)

土師質土器皿 (19)

磁器碗 (91・107)

磁器皿 (104・123)

陶器皿 (112)

陶器碗 (188)

図版 20 磁器碗 (121)

陶器鉢 (124)

土師質土器皿 (129・147・158)

スラグ (134・209)

土師質土器羽釜 (204)

第 I 章 調査に至る経過と調査方法

1. 調査に至る経過

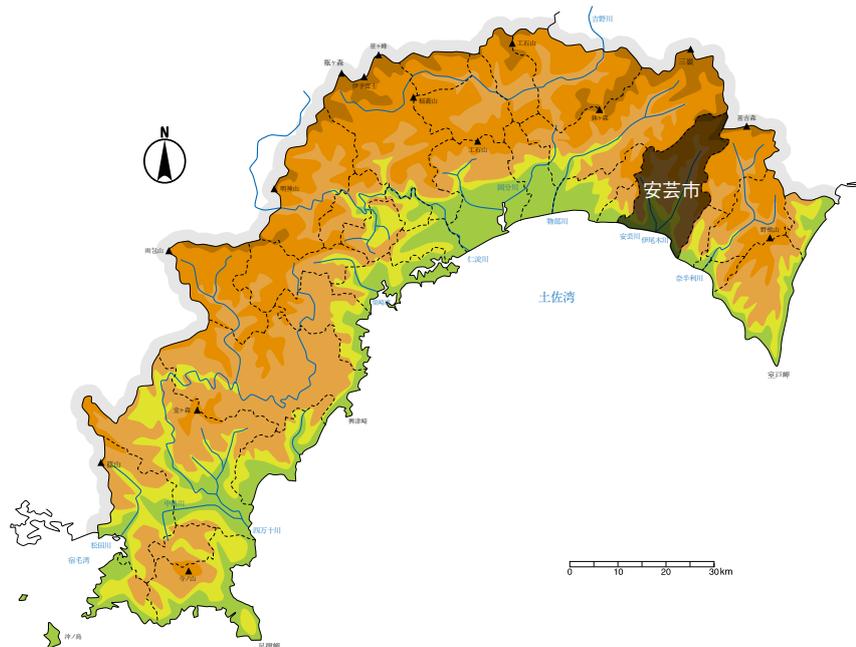
四国縦貫自動車道, 四国横断自動車道, 高知東部自動車道, 阿南安芸自動車道で構成される道路網は「四国8の字ネットワーク」と呼ばれ, 地域振興・活性化のみならず緊急時の「命の道」としても, その役割が期待されている。安芸市域は高知東部自動車道, 阿南安芸自動車道のルート上にある。県道大久保伊尾木線は, この「四国8の字ネットワーク」へのアクセス道路として整備されることとなった。この整備により国道55号との接続がより一層スムーズなものとなり, 既存の道路網との相乗効果が期待できる。

工事対象地は周知の岡遺跡に隣接していたため, 高知県教育委員会文化財課が試掘確認調査を実施し, 遺構・遺物の有無の確認を行った。その結果, 遺構・遺物の確認された箇所については工事によって影響を受けることから, 高知県教育委員会文化財課は高知県安芸土木事務所と協議を行い, 記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。平成27年4月1日, 高知県と公益財団法人高知県文化財団との間で契約が締結された。

現地調査は平成27年4月23日～5月27日に実施した。出土遺物の洗浄・注記等の基礎的な整理作業は発掘調査と並行して行い, 本格的な整理作業は平成27年11月から実施した。

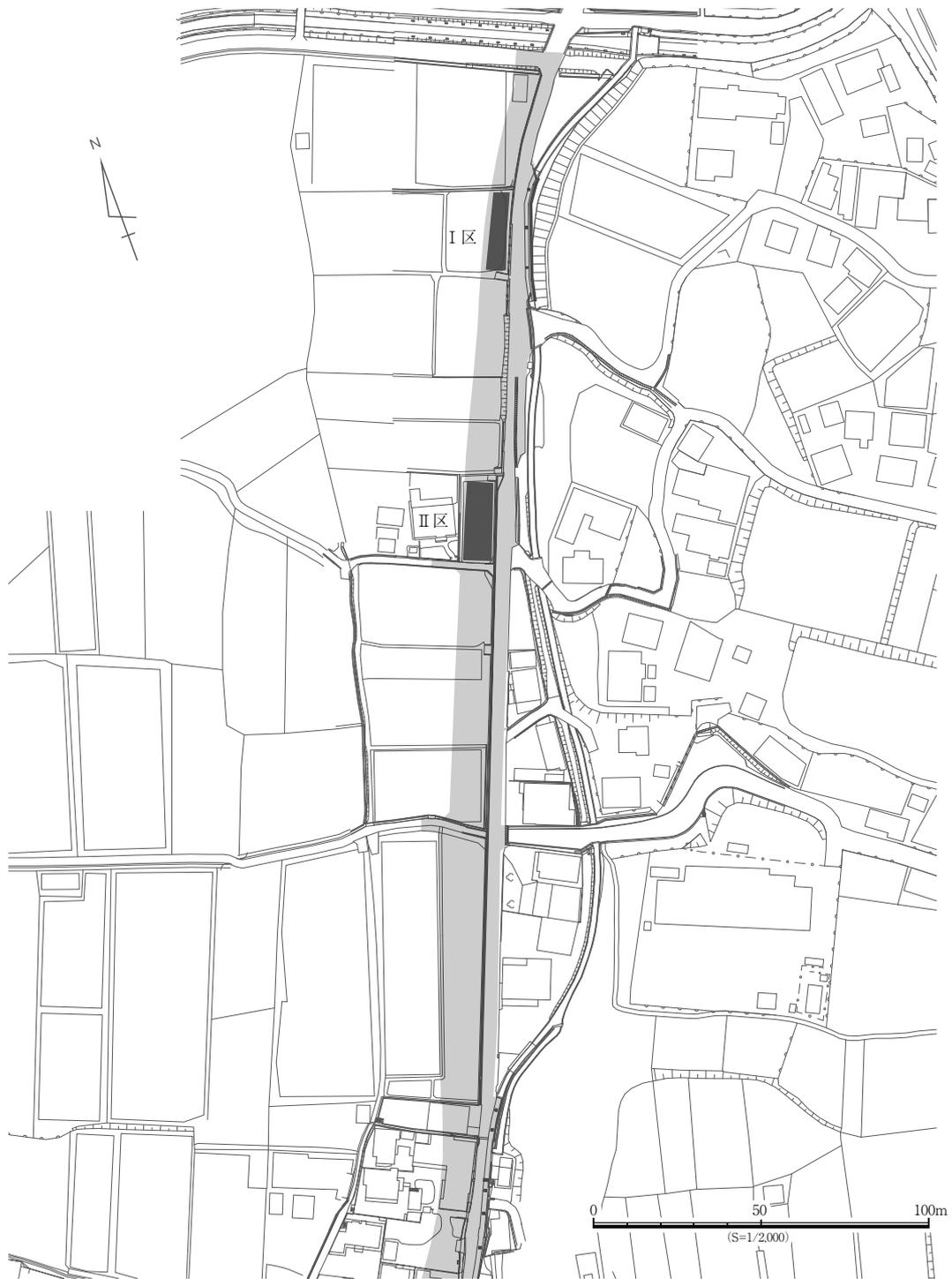
2. 調査方法(第2図)

調査区は約60m離れて2ヶ所であり, 北側をI区とし, 南側をII区とした。両調査区とも現況は水田であった。試掘確認調査の結果をもとに表土及び無遺物層は重機で掘削した。遺物包含層の掘削, 遺構検出, 遺構の掘削は人力により行った。遺構平面図・断面図は20分の1で実測し, 遺物出土状況図は10分の1で実測した。写真は必要に応じ, 撮影した。グリッドの設定は世界測地系(第4座標系)に基づく公共座標により測量等を行った。遺構番号は調査順に連番を付した。基本的には調査時に使用した遺構名で報告を行っているため, 欠番等が発生している。土坑をSK, ピット・柱穴をP, 性格不明遺構をSXの略号としてそれぞれ使用した。



第1図 安芸市位置図

2. 調査方法



第2図 調査区位置図

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境(第1図)

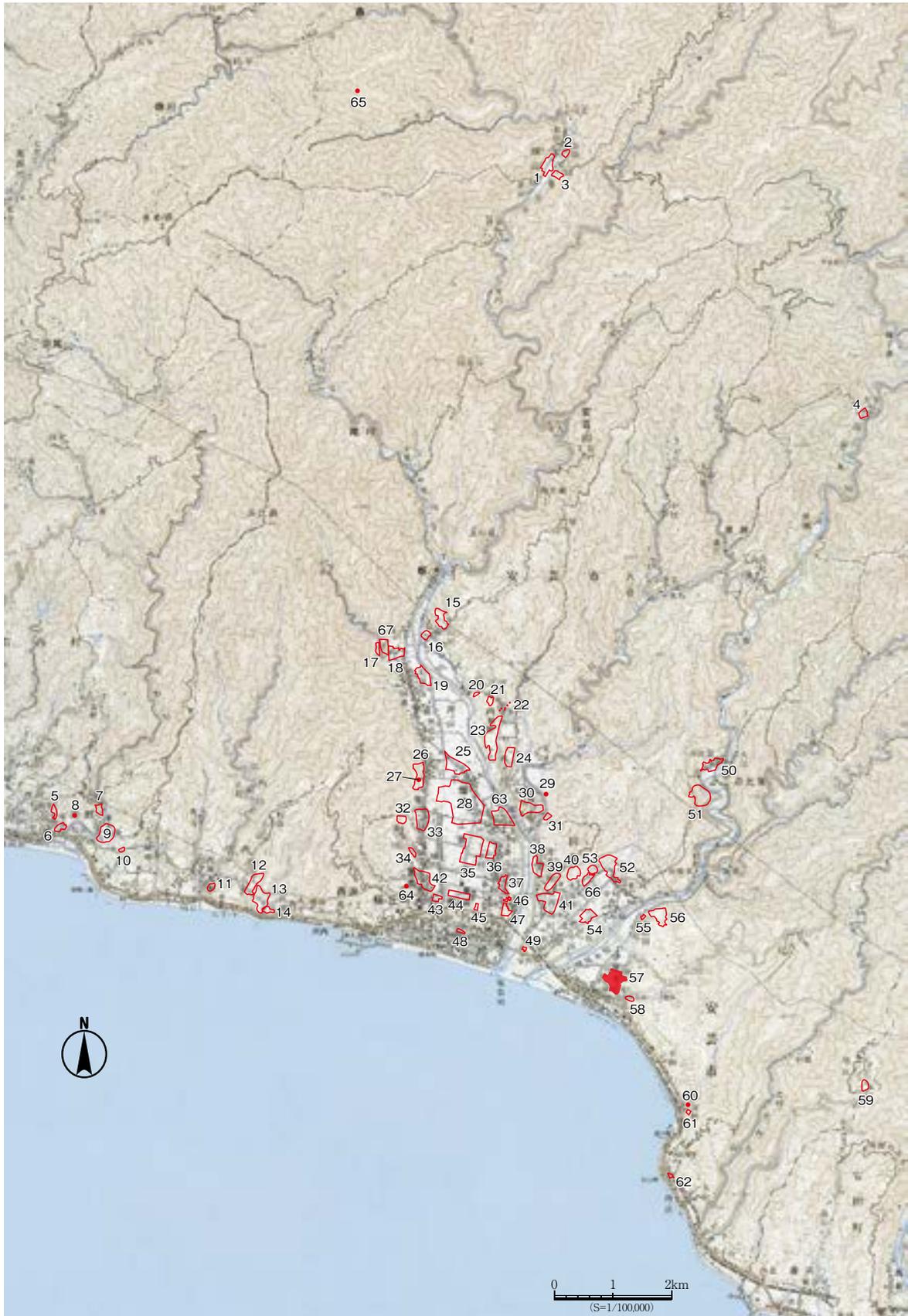
岡遺跡が所在する安芸市は高知県の東部に位置する。高知市から東に約40km、面積は約317km²、人口は約18,000人である。南北に細長く、北は四国山地であり、南は太平洋に面している。市域の9割近くを森林が占めている。市域の南部は安芸川と伊尾木川により安芸平野が形成され、県東部では最大規模の平野である。海岸沿いには浜堤が形成され、浜堤上には旧街道と旧市街地が当時の名残を留めている。近世以降の瓦生産や内原野焼は地場産業として現在も行われている。安芸市ではハウス園芸が盛んであり、なす・ゆずの生産量は特に多く県内では上位を占める。市域の南部は海岸線に沿って、国道55号および土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線が走る。2002年に開業した土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線は南国市から安芸市を経て奈半利町を結んでいる。

2. 歴史的環境(第3・4図, 表1)

安芸市では明確な旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代は道北遺跡・普当ノ畝遺跡・中野遺跡・境谷遺跡・源七遺跡がある。中野遺跡以外は海岸縁に遺跡が立地している。弥生時代になると遺跡数は増加する。清水寺岡遺跡、勇前遺跡では中期末から後期前葉の竪穴建物跡が検出され、丘陵端部に居住域が立地することを示している。河原田遺跡では弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴建物跡が3軒検出されている。後期末になり平野部へも居住域が作られるようになった。桜木遺跡では護岸、堰状遺構が検出されている。低湿地の環境を段階的に生産域として整備していく状況を把握することができる。出土遺物は少なく時期比定は困難であるが、弥生時代後期後半～古墳時代の間に行われたものと推測される。神谷遺跡からは広形銅矛1本、切畑遺跡からは突線紐4式の銅鐸2口がみついている。弥生時代後期になり、持ち込まれたものである。広形銅矛の分布域では最も東に位置する。また、山田山遺跡からは有樋式石剣が出土している。古墳時代では西ノ島遺跡から初期須恵器が出土し、ジョウマン遺跡では5世紀の溝跡が検出されている。安芸平野西端の井ノ口には古墳時代後期に一ノ宮古墳が築かれている。副葬品として馬具類・銀環・須恵器等が出土している。断続的ながら古墳時代を通して遺跡が認められ、古墳を築造する集団が形成されている。古代になると平野部の開発がさらに行われたと推測され、『和名抄』には布師郷・丹生郷・玉造郷・黒鳥郷の4郷が安芸市内に存在したことが記されている。安芸川西岸地域は条理地割が想定されている地域である。瓜尻遺跡では掘立柱建物跡、溝跡が検出され、緑釉陶器や古瓦が出土している。安芸市内には安芸庄と有井庄の2つの荘園がある。ともに山林資源に重きがおかれた荘園と考えられる。古代以降、山間部の山林資源はきわめて重要である。中世になると山城が多く築かれ、これまで遺跡が未発見である山間部の畑山にも山城が築かれる。戦国時代には「土佐の七守護」の一人、安芸国虎が安芸城を拠点に当地域を支配していたが、永禄12年(1569)、長宗我部元親によって滅ぼされ、香宗我部親泰が安芸城主となっている。関ヶ原の戦い以後、西軍として戦った長宗我部氏に代わって山内氏が土佐国の領主となった。安芸市は家老の五藤氏が領主となり、安芸城に居館を構える。五藤家屋敷跡の発掘調査では中世～近代にかけての遺構・遺物が検出されている。

時期別の遺跡変遷図からは古墳時代に平野部への本格的な進出が認められる。また、中世段階には北部の山間域にも遺跡がみられる。

2. 歴史的環境



第3図 安芸市の遺跡地図

表1 岡遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	畑山遺跡	中世	24	中野遺跡	縄文・中世	47	金政遺跡	弥生
2	畑山氏居館跡	中世	25	マテダ遺跡	弥生・古墳・中世	48	江ノ川畔遺跡	弥生
3	畑山城跡	中世	26	清近岡遺跡	弥生他	49	安芸橋畔遺跡	弥生
4	大井遺跡	中世	27	一ノ宮古墳	古墳	50	奈比賀遺跡	中世
5	原ヤシキ遺跡	弥生・古墳・中世	28	瓜尻遺跡	古墳～中世	51	奈比賀城跡	中世
6	サセブ原遺跡	中世	29	日林坊遺跡	弥生	52	山田山遺跡	弥生
7	仙頭城跡	中世	30	鶴ヶ岡遺跡	弥生	53	高土山遺跡	弥生
8	赤野窯跡	近世	31	神谷遺跡	弥生	54	上島遺跡	弥生
9	ハンノス遺跡	中世	32	妙見山遺跡	古代末～中世	55	猫ヶ内遺跡	中世
10	磯道遺跡	中世	33	高台寺遺跡	弥生	56	切畑遺跡	弥生
11	穴内城跡	中世	34	植野城跡	中世	57	岡遺跡	弥生～近世
12	道北遺跡	縄文・中世	35	ジョウマン遺跡	弥生～古代	58	有井城跡	中世
13	普当ノ畝遺跡	縄文	36	シガ屋敷遺跡	弥生～近世	59	旭ヶ丘遺跡	弥生・古代
14	新城城跡	中世	37	春日遺跡	中世	60	土佐街道跡	近世
15	山田遺跡	弥生	38	清水寺岡遺跡	旧石器～弥生	61	境谷遺跡	縄文
16	西妙見谷遺跡	弥生	39	安芸次郎城跡	中世	62	源七遺跡	縄文
17	小谷遺跡	弥生	40	安芸太郎城跡	中世	63	安芸城跡	中世・近世
18	宮ノ上遺跡	弥生	41	西ノ島遺跡	古墳	63	五藤家屋敷跡	中世～近代
19	笹原遺跡	中世	42	黒鳥遺跡	弥生・古墳・中世・近世	64	安芸国虎墓	中世
20	野神遺跡	古墳	43	上エヒイ遺跡	中世	65	畑山家ノ谷遺跡	中世・近世
21	善次屋敷遺跡	中世	44	ヤナギダ遺跡	中世	66	桜木遺跡	弥生～古代
22	内原野窯跡群	近世	45	河原田遺跡	弥生	67	寺山城跡	中世
23	勇前遺跡	弥生～古代	46	玉造遺跡	古墳			

参考文献

1960年『安芸市史』

岡本健児・宅間一之 1979『高知県安芸市清近岡遺跡発掘調査報告書』高知県安芸市教育委員会

宅間一之・前田和男・出原恵三・松田直則 1987『五藤家屋敷跡発掘調査報告書』高知県安芸市教育委員会

山本哲也 1990『清水寺岡遺跡』安芸市教育委員会

荻慎一郎・森 公章・市村高男・下村公彦・田村安興 2001年『高知県の歴史』山川出版社

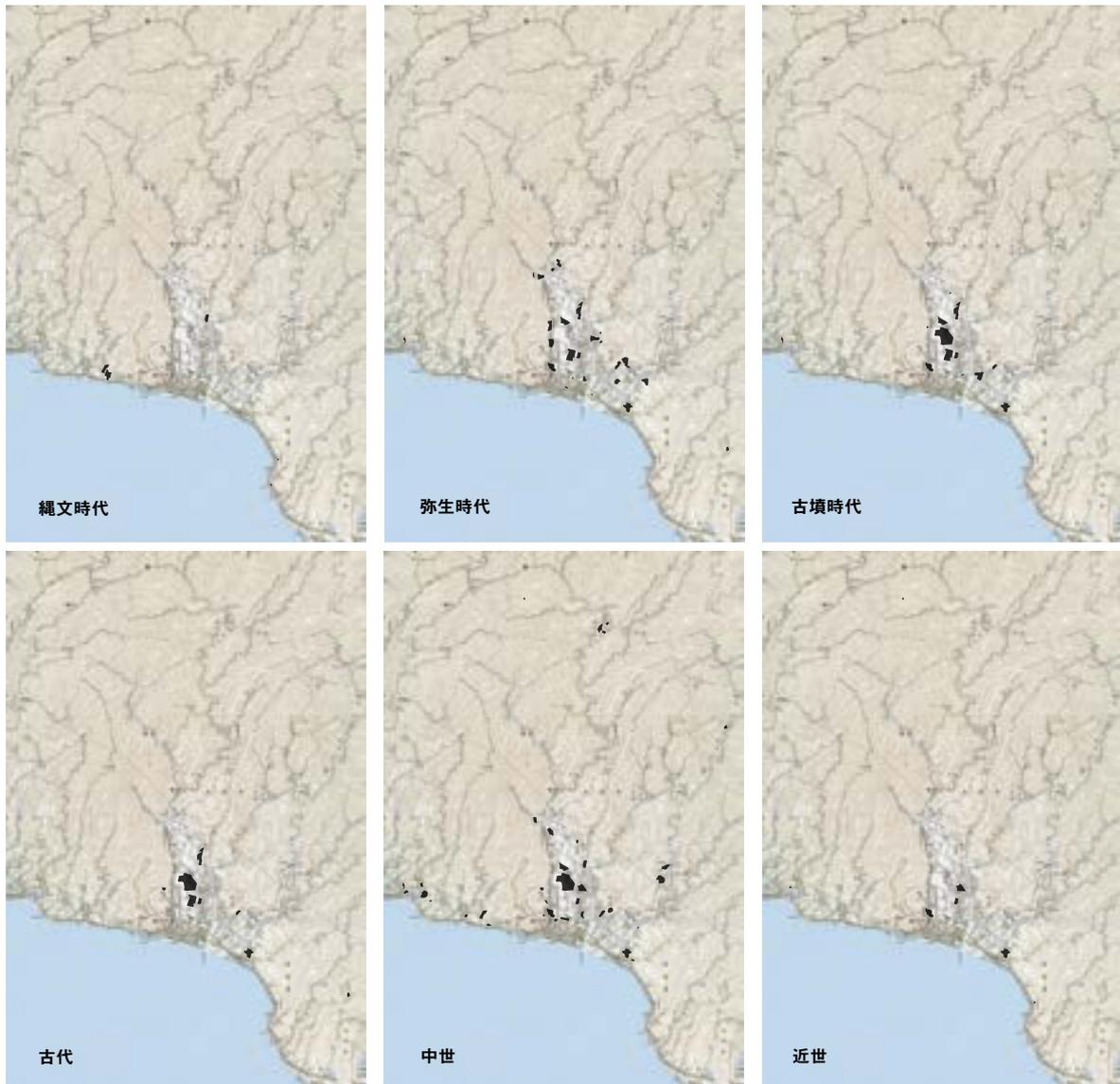
森田尚宏・久家隆芳 2002『勇前遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

門田由紀・坂本裕一 2005『瓜尻遺跡』安芸市教育委員会

池澤俊幸・藤方正治 2005『桜木遺跡』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

門田由紀 2011『河原田遺跡』安芸市教育委員会

2. 歷史的環境



第4図 遺跡変遷図

第三章 調査成果

1. 調査の概要

(1) I 区の調査概要(第6・7図)

北方向に向かって緩やかに下がっており、北半部の出土遺物は相対的に多かったが遺構は検出していない。南半部では土坑1基、ピット37基、性格不明遺構2基を検出した。ピットを多数、検出したが掘立柱建物には復元できなかった。遺構面は2面の可能性がある。

(2) II 区の調査概要(第15・16図)

井戸跡1基、土坑11基、ピット94基、性格不明遺構1基を検出した。遺構密度は調査区南半部が相対的に高い。ピットを多数、検出したが掘立柱建物には復元できなかった。遺構面は2面の可能性がある。

2. 基本層序

(1) I 区の基本層序(第5図)

西壁で基本層序を確認した。

- 第I層 耕作土
- 第II層 灰黄色細砂混じりシルト層
- 第III層 暗灰黄色細砂混じりシルト層
- 第IV層 黄灰色細砂混じりシルト層
- 第V層 灰黄褐色中粒砂混じりシルト層
- 第VI層 明黄褐色シルト層

第III層～第V層が遺物包含層である。第III層と第IV層の境目は明確に分層できる部分もあれば不明瞭な部分もある。第V層は調査区の北端部付近に分布する。北側へいくにつれ層厚は増す。第IV層上面と第VI層上面で遺構を検出した。

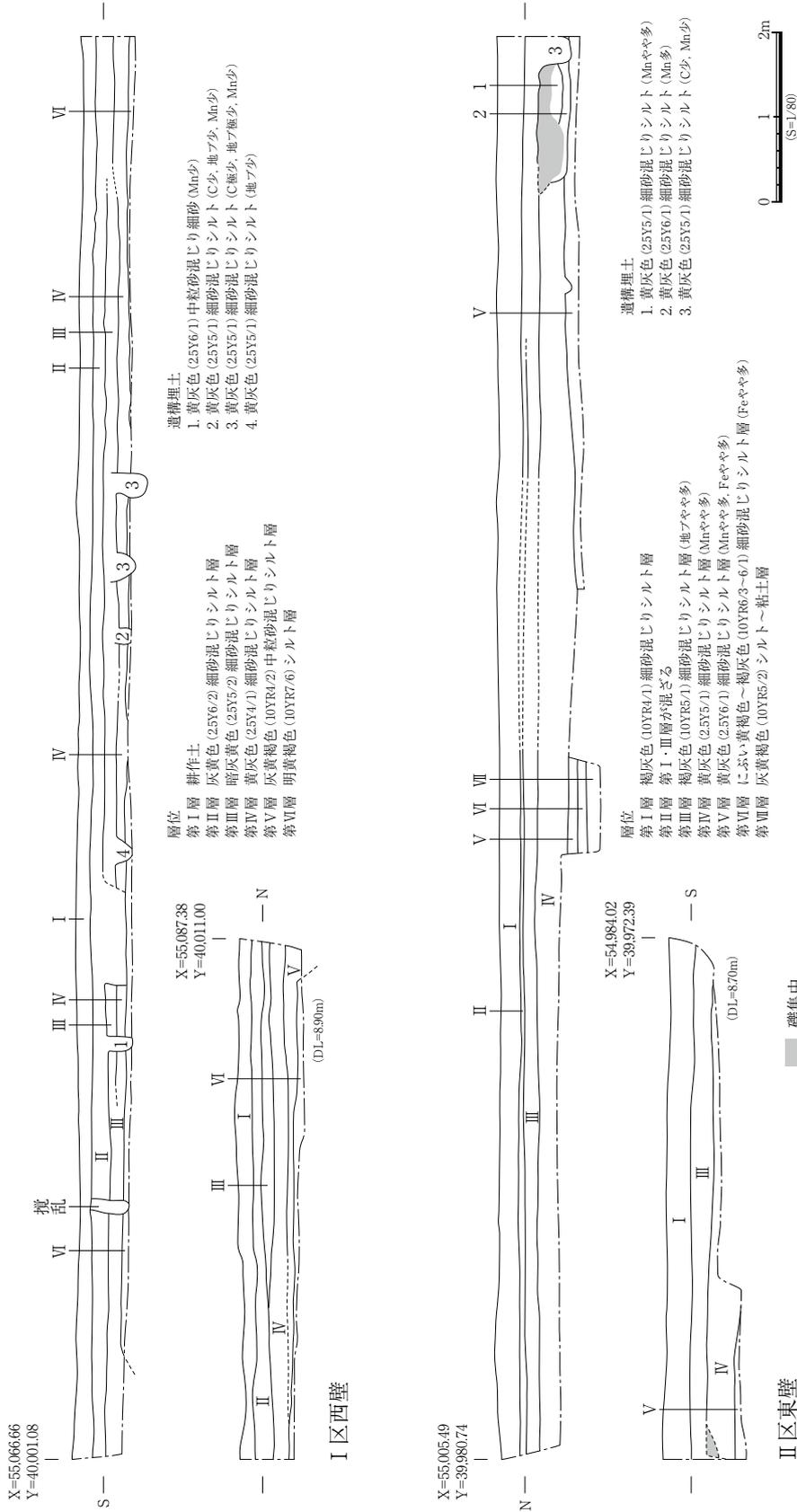
(2) II 区の基本層序(第5図)

東壁で基本層序を確認した。

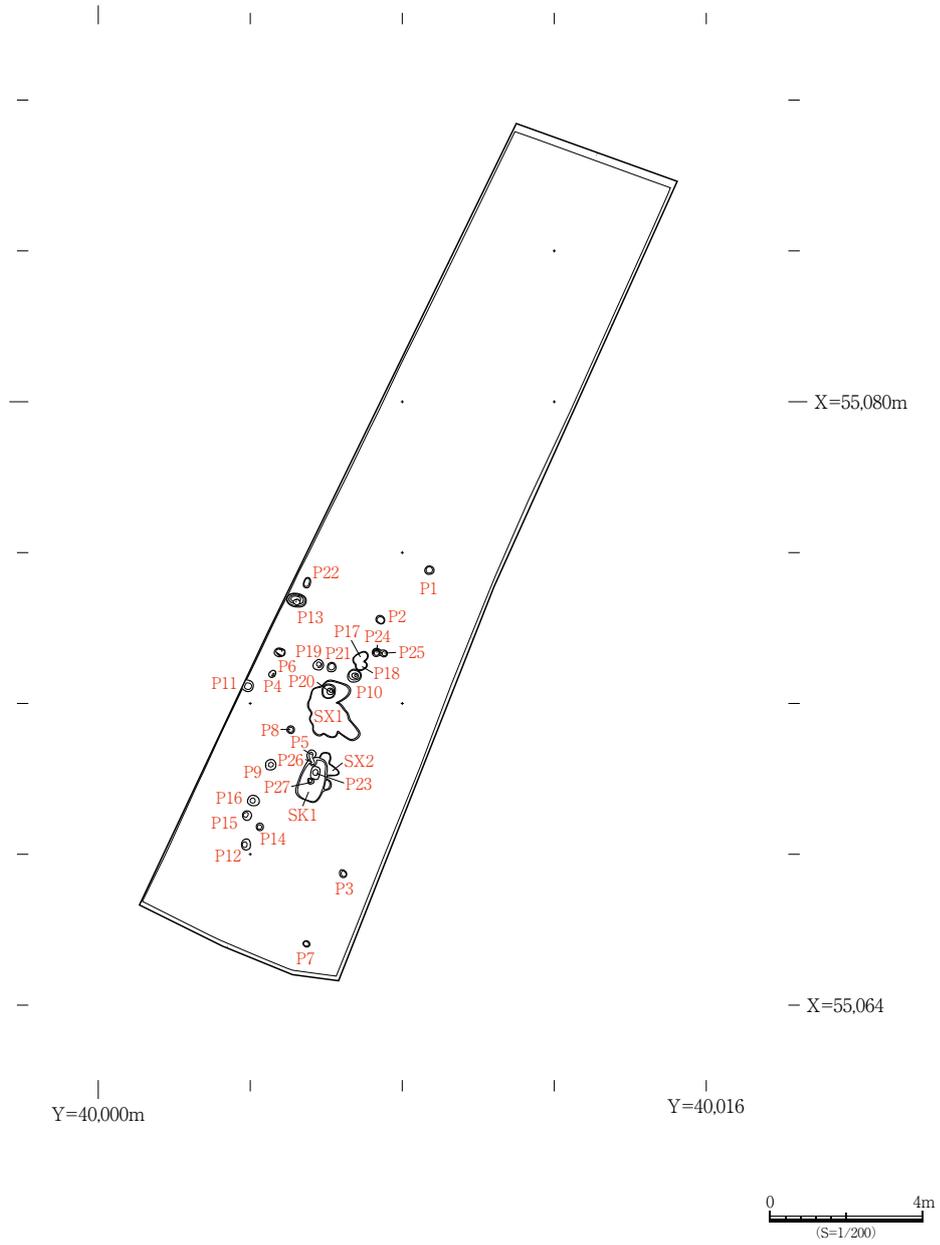
- 第I層 褐灰色細砂混じりシルト層
- 第II層 第I層と第III層が混ざる
- 第III層 褐灰色細砂混じりシルト層
- 第IV層 黄灰色細砂混じりシルト層
- 第V層 黄灰色細砂混じりシルト層
- 第VI層 におい黄褐色～褐灰色細砂混じりシルト層
- 第VII層 灰黄褐色シルト～粘土層

第III層・第IV層は遺物包含層である。第III層・第IV層とも調査区全域に分布する。第IV層の層厚は約40cmである。第IV層上面と第V層上面で遺構を検出した。

2. 基本層序

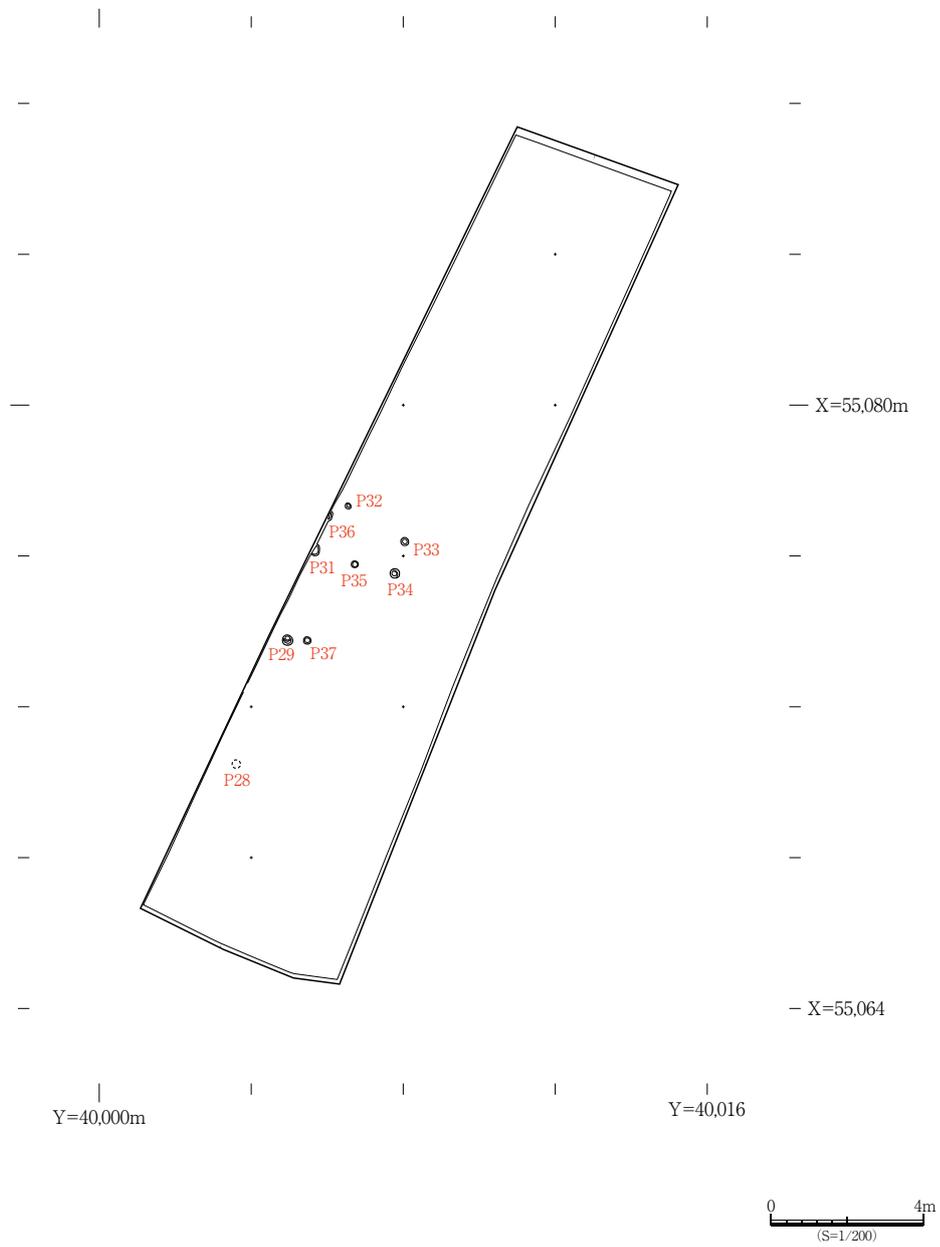


第5図 基本層序



第6図 I区上面遺構平面図

2. 基本層序



第7図 I区下面遺構平面図

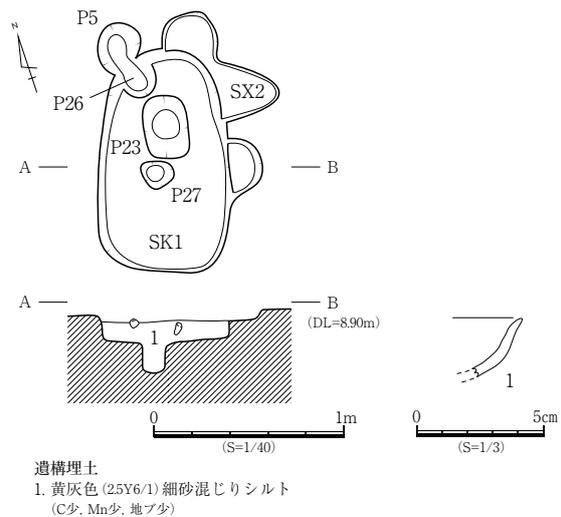
3. 検出遺構と出土遺物

(1) I 区

① SK

SK1 (第8図)

SK1 は隅丸長方形の土坑である。長軸約 1.1m, 短軸約 0.6m, 検出面からの深さは 14 cm である。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師器の手づくね皿(1)である。口縁部にヨコナデ調整を施す。外面には指頭圧痕がみられる。他に図示していないが, 土師質土器片が 19 点出土している。



第8図 I 区SK1平面図・断面図・出土遺物実測図

② P (ピット)

P2 (第9図)

P2 は楕円形のピットである。長軸 27cm, 短軸 21cm, 検出面からの深さは 20cm である。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の椀(2)である。外面にはロクロ目が顕著に残る。他に図示していないが, 土師質土器片が 2 点出土している。

P6 (第9図)

P6 は楕円形のピットである。長軸 33cm, 短軸 26cm, 検出面からの深さは 30cm である。埋土は灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は, 根石に用いられていた砂岩製の砥石(3)である。残存する使用面はわずかに凹む。また, 側面にも使用痕跡が認められる。根石として形と大きさを整えるため打ち割り, 一部は被熱により変色している。この根石の上面を平らに安定させるため, 割り石をかましていた。さらにその下には被熱した石が置かれていた。この石の平面形は頂点を欠いた三角形状を呈し, 上面及び下面とも平らになるように加工されていた。底辺 20cm, 高さ 20cm, 厚さ 9cm の砂岩であり, 被熱している。他に図示していないが, 土師質土器片が 4 点・煮沸具片が 1 点出土している。

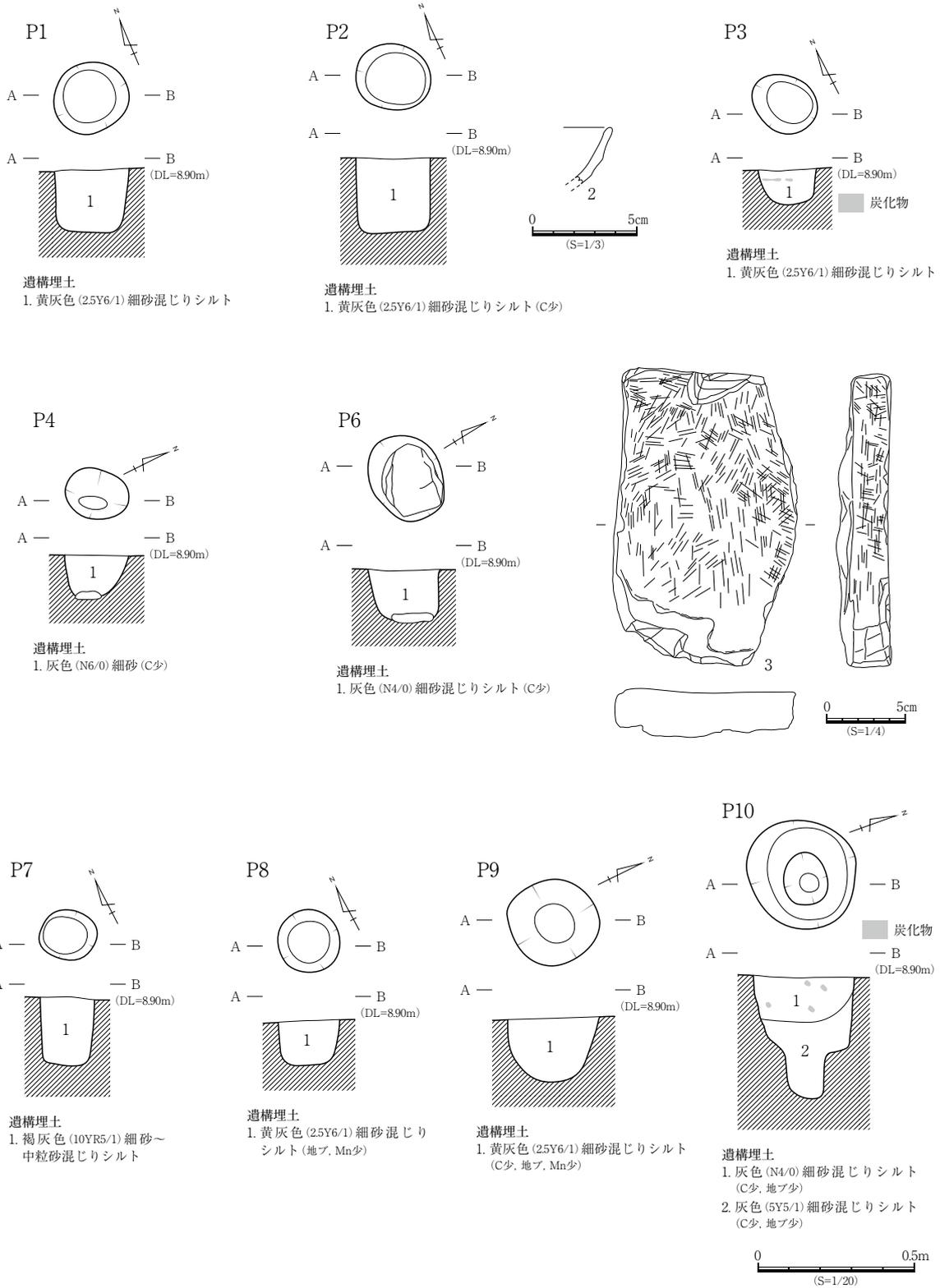
P13 (第10図)

P13 は楕円形のピットである。長軸 51cm, 短軸 35cm, 検出面からの深さは 30cm である。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。テラスを有し, 底部付近には直径 20cm の礫がみられる。図示した出土遺物は土師質土器の口縁部片(4), 青磁の稜花皿(5)である。5 は指頭により稜が作られ, 口縁部との境が強調される。オリーブ灰色の釉薬を施す。外面に釉薬の濃い部分があり, 文様の可能性がある。他に図示していないが, 土師質土器片が 13 点出土している。このうちの 1 点は断面逆三角形の高台が付されている。

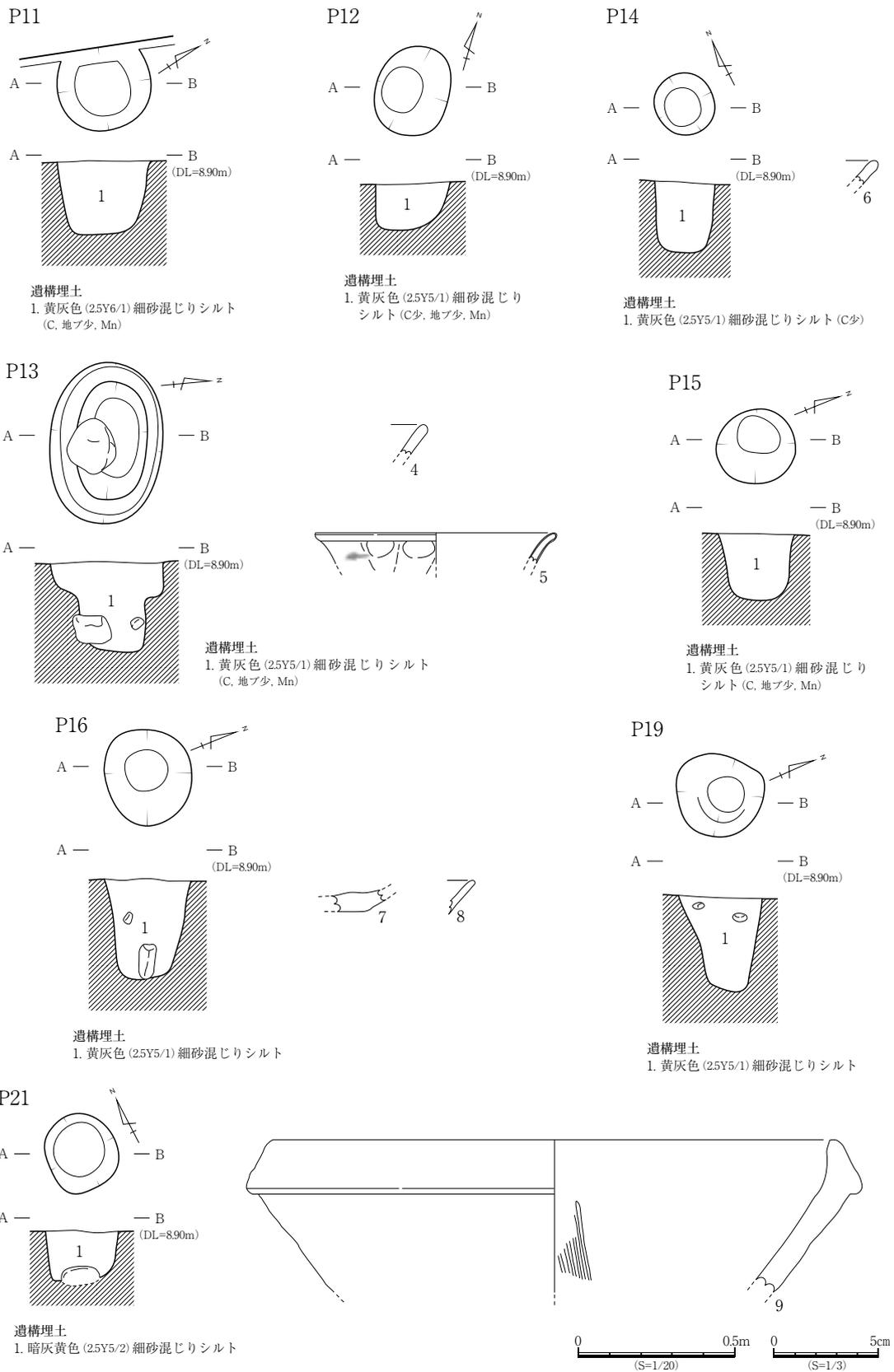
P14 (第10図)

P14 は円形のピットである。直径 20cm, 検出面からの深さは 23cm である。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の口縁部片(6)である。他に図示していないが, 水晶片が 1 点出土している。

3. 検出遺構と出土遺物

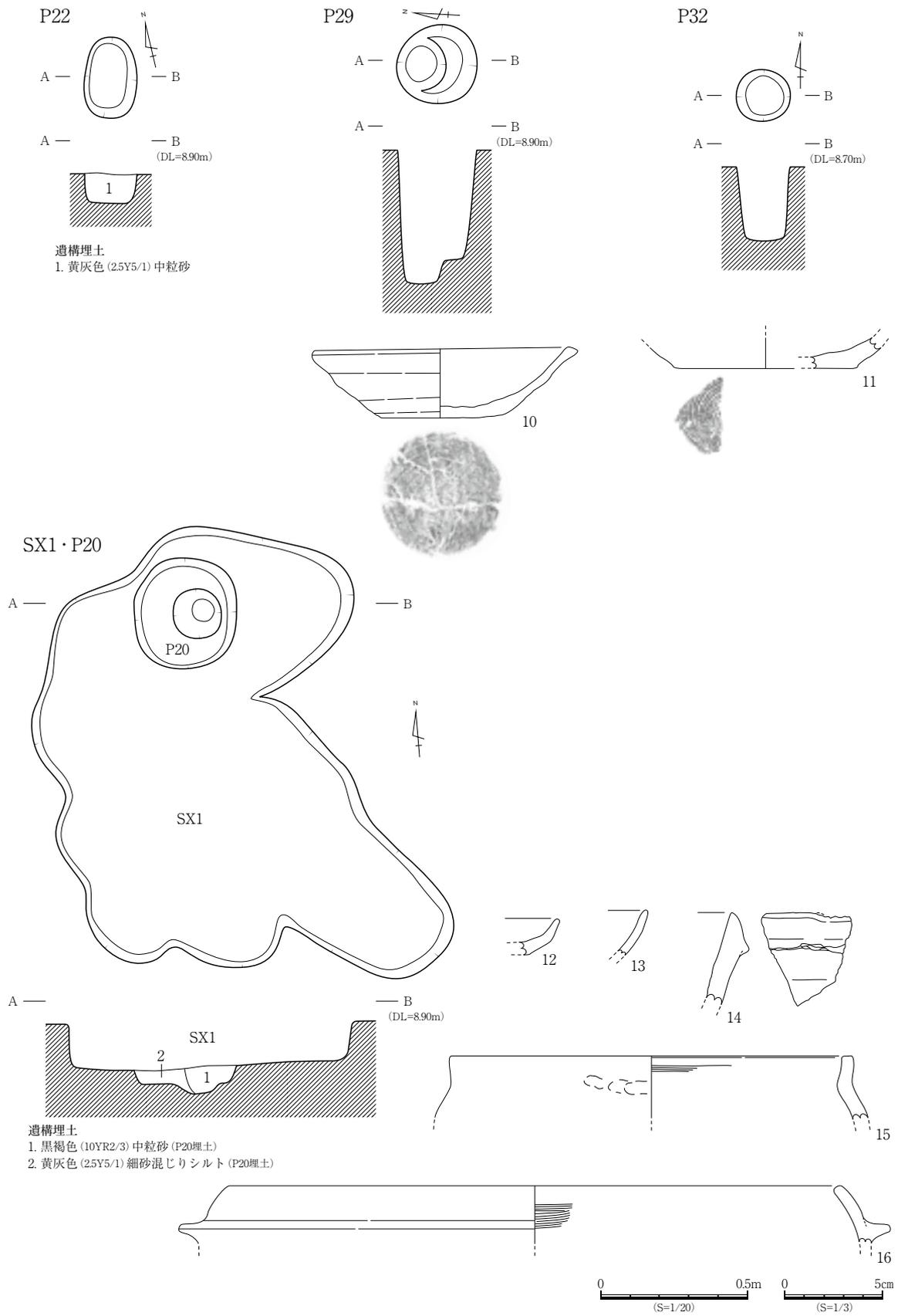


第9図 I区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図1



第10図 I区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図2

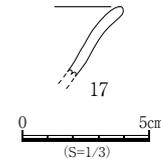
3. 検出遺構と出土遺物



第11図 I区ピット・SX1平面図・断面図・出土遺物実測図

P16 (第10図)

P16は楕円形のピットである。長軸31cm, 短軸27cm, 検出面からの深さは38cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。底部付近に長径15cmの礫がみられる。図示した出土遺物は土師質土器の杯(7), 瓦器の椀(8)である。7は底部の破片である。内面にはロクロ目がみられる。やや磨耗し不明瞭ではあるが底部の切り離しは回転糸切りと考えられる。8は口縁部の細片である。口縁部にはヨコナデ調整を施し, 口唇部は丸くおさめる。他に図示していないが, 土師質土器片が3点出土している。



第12図 I区SX2出土遺物実測図

P21 (第10図)

P21は円形のピットである。直径25cm, 検出面からの深さは27cmである。埋土は暗灰黄色細砂混じりシルトである。底面には根石が認められる。図示した出土遺物は備前焼の播鉢(9)である。内外面とも回転ナデ調整である。口縁部は上方へ拡張し, 下方へはわずかに突出させる程度である。内面に5条以上1単位のスリメを入れる。直径4mm大以下の砂粒を少量含む。他に図示していないが, 土師質土器片が2点出土している。

P29 (第11図)

P29は円形のピットである。直径26cm, 検出面からの深さは46cmである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(10)である。口縁部は外上方へのび, 端部は尖らせ気味に終わる。回転ナデ調整で仕上げられ, 内底面及び外面にはロクロ目が認められる。また, 内底面には工具ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。他に図示していないが, 土師質土器片が2点出土している。

P32 (第11図)

P32は円形のピットである。直径15cm, 検出面からの深さは23cmである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(11)である。回転ナデ調整であり, 内底面にはロクロ目がみられる。底部の切り離しは回転糸切りである。

③ SX**SX1・P20 (第11図)**

SX1は不整形の遺構である。複数の遺構が重複していると考えられるが, 各遺構の平面形・新旧関係等については精査したが明確に把握することはできなかった。このSX1を掘削後, 底面でP20を検出した。P20は楕円形のピットである。長軸37cm, 短軸35cm, SX1の底面からの深さは8cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルト, 黒褐色中粒砂である。

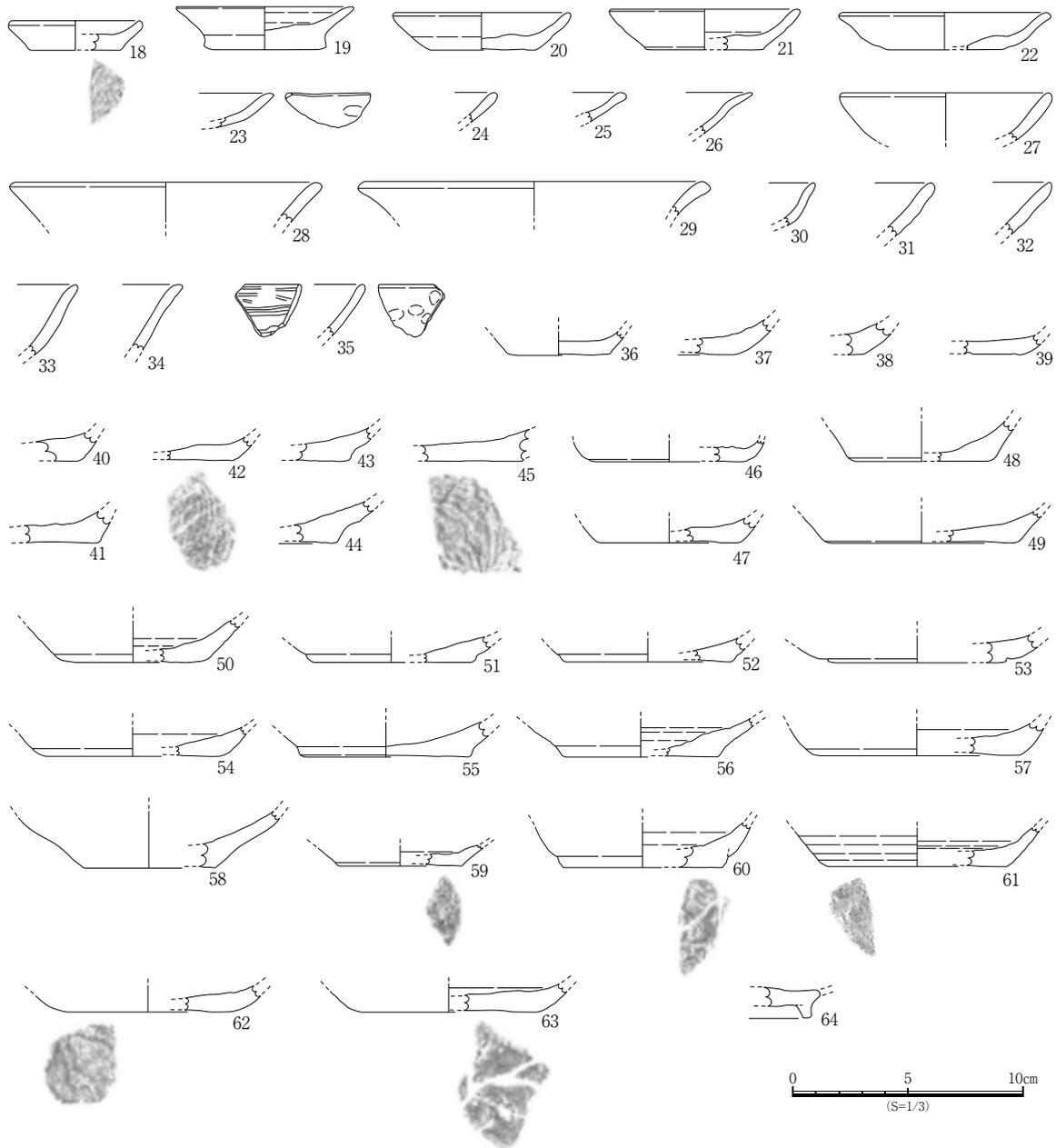
SX1の遺物として取上げたもののうち, 土師質土器の皿(12), 瓦器の椀(13), 陶器の片口鉢(14), 土師質土器の鍋(15)・羽釜(16)を図示した。12は口縁部の中位付近で折り曲げる。回転ナデ調整で仕上げる。13は口縁部にヨコナデ調整を施し, 口唇部は丸くおさめる。外面には弱い指頭圧痕がみられる。内面はミガキ調整である。14は口唇部を尖らせる。口縁部下端は突帯状を呈する。口縁部を外側へ押し出すことで注口とする。15の口縁部は弱い「く」の字状を呈し, 口唇部には面取りを施す。外面には煤が付着する。16の口縁部は内湾し, 口唇部は丸くおさめる。断面長方形の鏝を付す。内面は横方向のハケメ調整である。他に図示していないが, SX1から土師質土器片が31点出土しており, P20か

3. 検出遺構と出土遺物

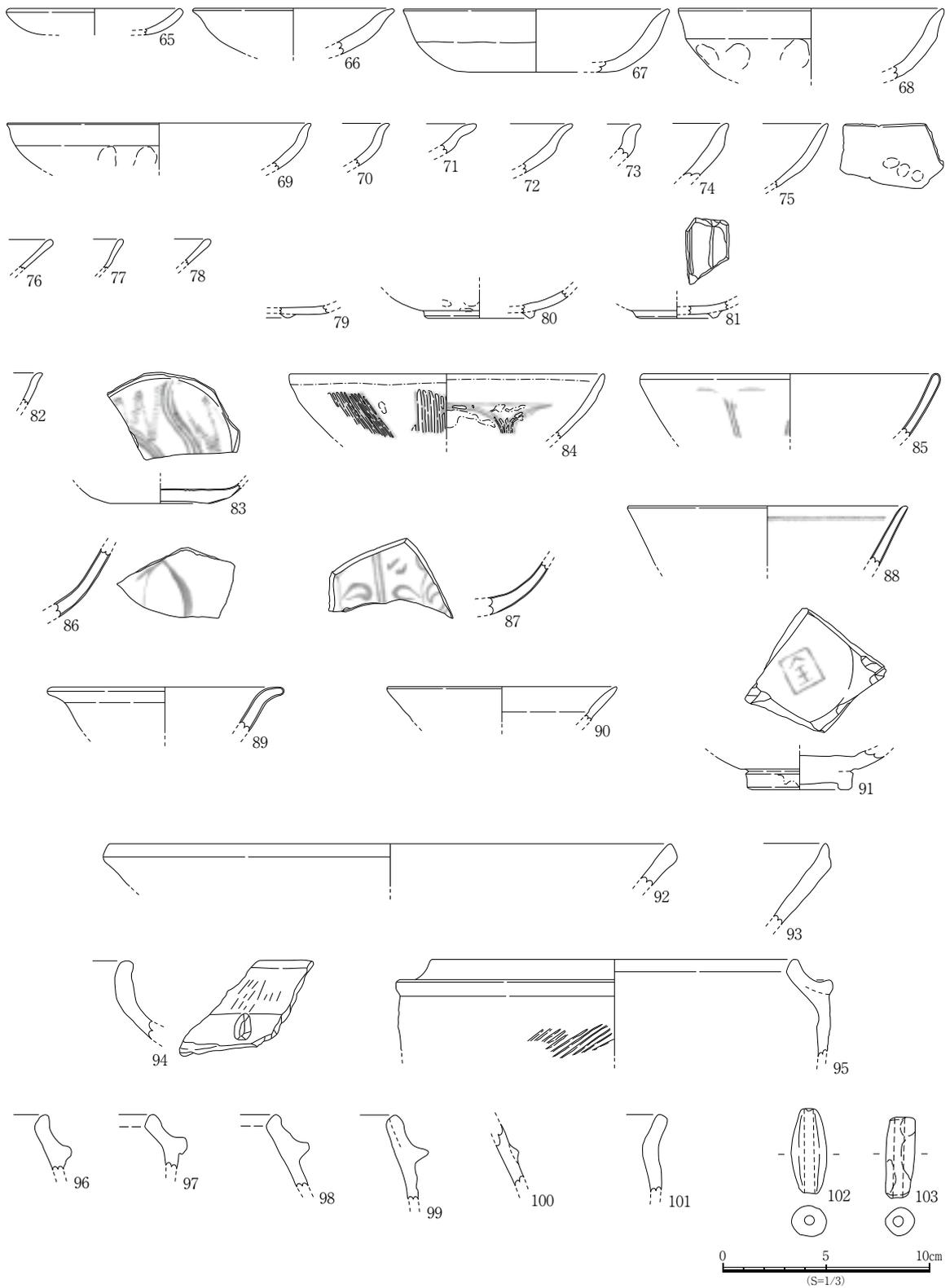
らは土師質土器片が3点・煮沸具片が1点出土している。

SX2 (第12図)

SX2は調査区南部で複数の遺構が重複した状況で検出した。各遺構の平面形、それらの新旧関係を検出面において確定できなかったため、約5cm掘削し精査した結果、SK1、P5・23・26・27を検出した。図示したものは青磁の碗(17)でSX2として取上げた遺物である。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸くおさめる。オリーブ灰色の釉薬を施す。残存部位に文様はみられない。他に図示していないが、土師質土器片が7点出土している。



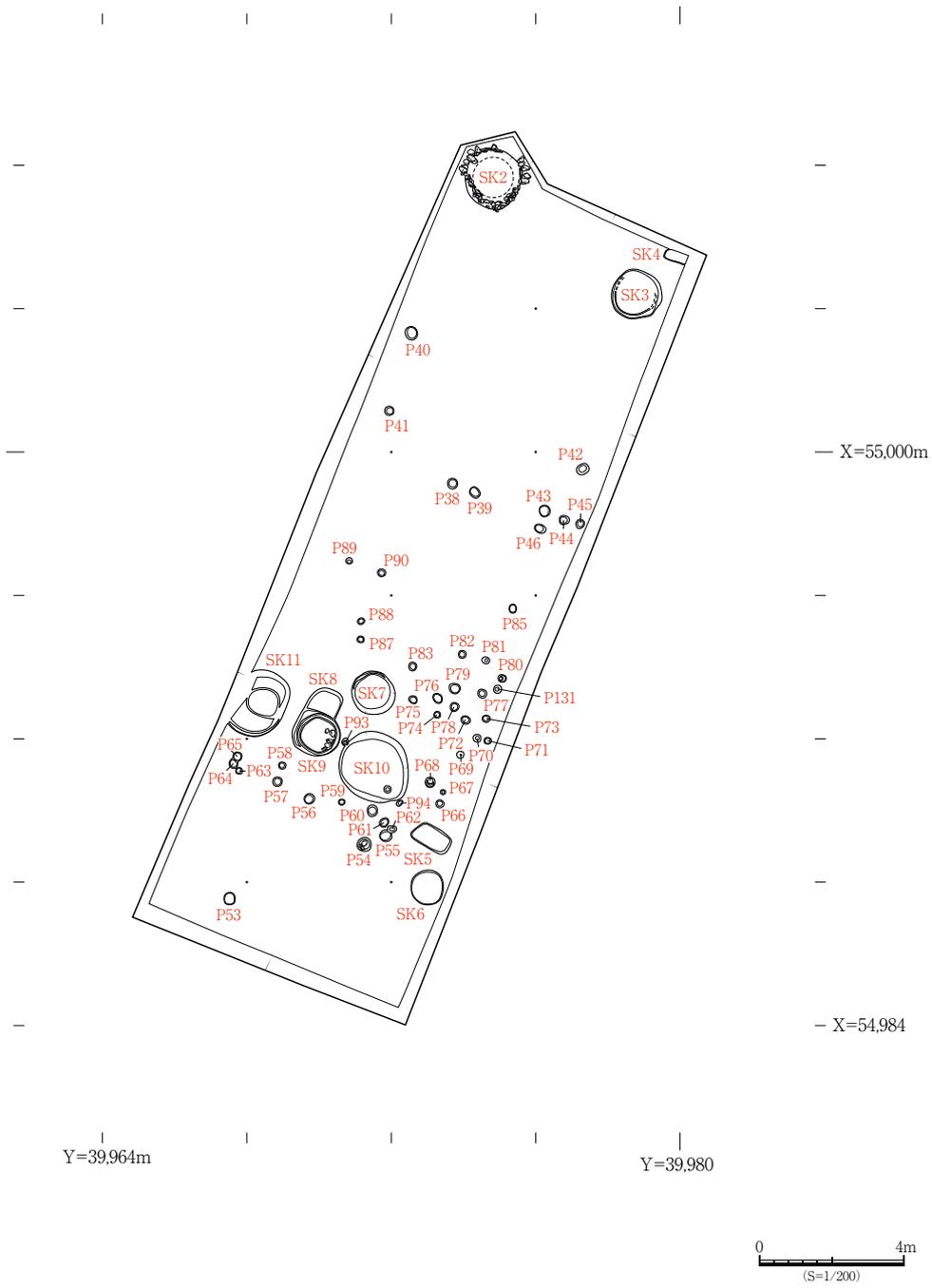
第13図 I区遺構外出土遺物実測図1



第14図 I区遺構外出土遺物実測図2

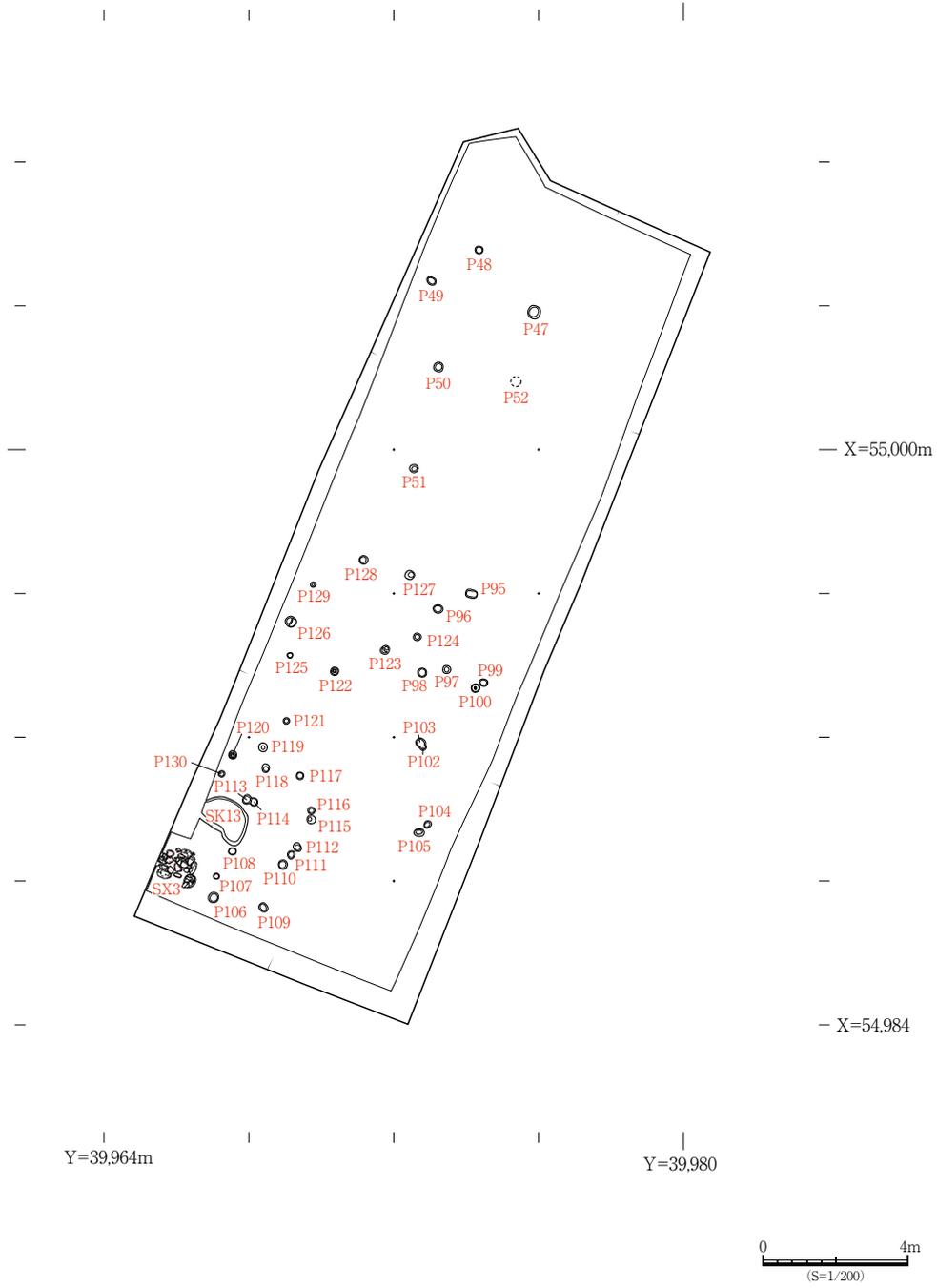
④ I 区遺構外出土遺物(第13・14図)

土師質土器, 土師器, 瓦器, 白磁, 青磁, 近世磁器, 須恵器, 瓦質土器, 土錘を図示した。18は土師質土器の皿である。回転ナデ調整である。底部の切り離しは回転糸切りである。19は土師質土器の皿である。回転ナデ調整であり, 内底面にはロクロ目が認められる。磨耗のため, 底部の切り離しは不明である。20・21は土師質土器の皿である。回転ナデ調整である。磨耗のため, 底部の切り離しは不明である。22は土師質土器の皿である。口縁部を外反させる。回転ナデ調整である。磨耗のため, 底部の切り離しは不明である。23～34は土師質土器の皿・杯の口縁部片である。26・33の色調は灰白色を呈する。35は瓦器の椀か。口縁部は内湾気味に立ち上がり, 口唇部は丸くおさめる。内面には横方向のミガキ調整を施す。36～64は土師質土器の杯・椀の底部である。40の外底面にはミガキ調整を施す。42・45・59～63の底部の切り離しは回転糸切りである。また, 42の外底面には簀子状圧痕が認められる。外面の色調は38・43はにぶい橙色, 42は浅黄色, 44は褐灰色, 46はにぶい黄橙色, 48・52・54・58・63は浅黄橙色, 49は灰白色を呈する。37・40・41・43・44・46・48・51～54・57・58は磨耗もあり観察が困難なものもあるが, 外底面にナデ調整を施す。64は土師質土器の椀である。断面長方形の高台を付す。磨耗のため, 調整等は不明である。灰白色を呈する。65～75は土師器の手づくね皿である。66～75は口縁部にヨコナデ調整を施し, 口唇部は尖らせ気味となる。ヨコナデ調整の強弱によって, 口縁部の外反度合いが異なる。外面の色調は浅黄橙色(66・68・69・71・73・74), にぶい黄橙色(65・67), 灰白色(70・72・75)を呈する。体部外面には指頭圧痕が認められるものが多い。76～81は瓦器の椀である。76～78は口縁部片である。外面にヨコナデ調整を施し, 口唇部は丸くおさめる。79～81は底部片である。外底面に高台を付す。79・80は炭素の吸着は認められない。82は端反りの白磁の皿である。83は同安窯系の青磁の皿である。見込みには花文とジグザグ文を施す。腰部に稜線が巡る。外底面は露胎である。84は同安窯系の青磁の椀である。口縁部付近で折れ, 口唇部は尖らせ気味におさめる。外面には縦方向の櫛目文, 内面には界線と花文を施す。外面の櫛目文に沿い故意に釉薬は削り取られ, 内面の花文の一部も線に沿って削り取られる。また, 口縁部も内外面とも削り取られる。85・86は龍泉窯系の青磁の椀である。85は線描きの蓮弁文, 86は片刃彫りの蓮弁文を施す。87の内面には陽刻の花文を施す。88の釉調は光沢の有るオリーブ黄色である。口縁部内面には2条の界線が巡る。89は口縁部を大きく外反させ, 口唇部は丸くおさめる。濃いオリーブ灰色の釉薬を施す。90・91は近世磁器である。91の見込みには角枠内に「全」を刻印する。92・93は東播系の須恵器の捏ね鉢である。93の口縁部は上方へ拡張させる。94は土師器の甕か。頸部から折れ, 口縁部は直立する。口唇部は丸くおさめる。磨耗のため調整等の観察は困難である。外面はハケメ調整か。95～100は土師質土器の羽釜である。95は上胴部から口縁部にかけて緩やかな「く」の字状を呈し, 口唇部は丸くおさめる。丸みを帯びた鏝を付す。体部外面には斜め方向の叩き目が認められる。口縁部および内面は回転ナデ調整である。96～99は口縁部である。99の上胴部から口縁部はほぼ直線的であり, 鏝は断面三角形を呈する。他のものとやや趣が異なる。100の鏝は断面が扁平な三角形である。煤の付着状況は, 鏝以下に付着するもの(95・97・98), 口縁部及び鏝以下に付着するもの(96), 煤の付着が認められないもの(99)に分類できる。101は瓦質土器の鍋である。口頸部の屈曲度合いは弱い。口唇部にはルーズな面取りを施す。内外面ともナデ調整である。102・103は管状土錘である。ともに被熱により変色する。102は中央部が膨らむ。103はストレートである。他に図示していないが, 常滑焼の可能性のある国産陶器片, 粘土塊が出土している。



第15図 II区上面遺構平面図

3. 検出遺構と出土遺物



第16図 II区下面遺構平面図

(2) II 区

① SK

SK2 (第17図)

SK2は石組みの円形の井戸跡である。直径約1.4mを測る。人頭大の川原石をつく。検出面から約60cm下がった位置から人頭大の川原石がまとまっていた。この深度を境に埋土が変わる。一気に埋めたと考えられる。検出面から約150cmの深さまで確認したが、それ以下は確認できなかった。

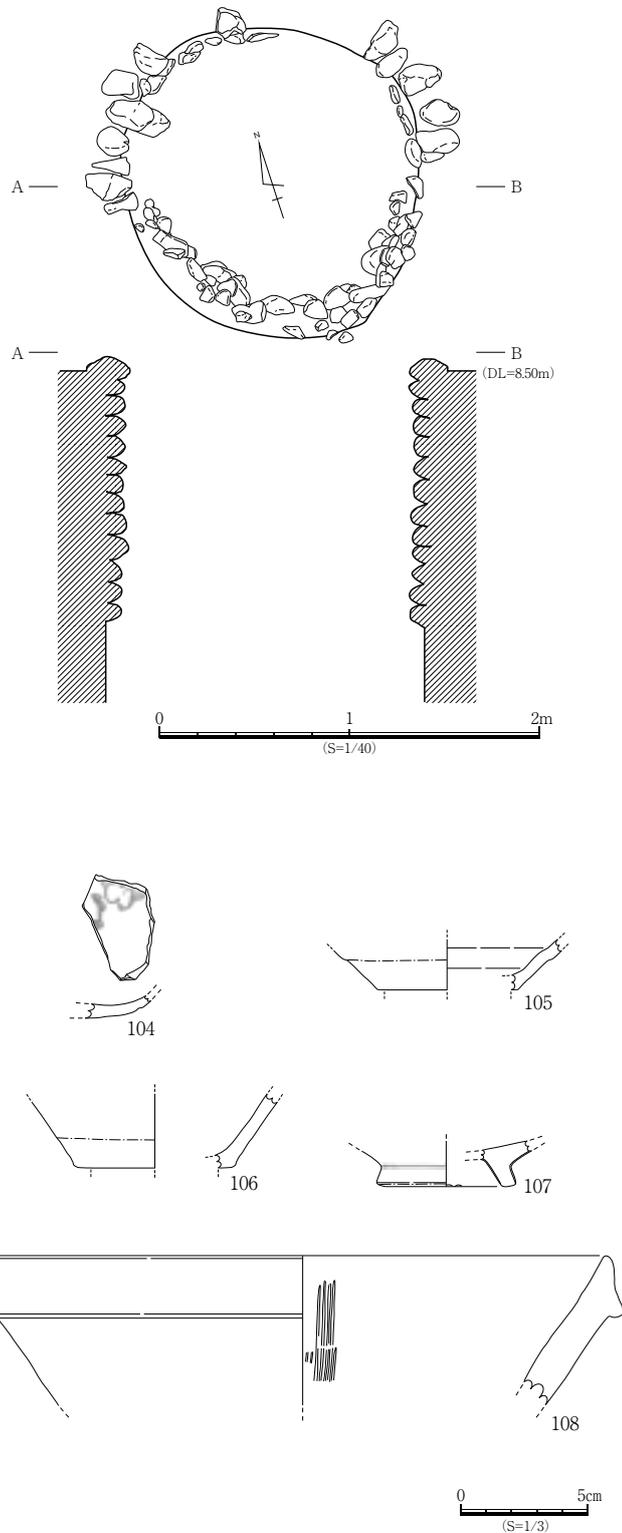
図示した出土遺物は、磁器の皿・碗、陶器の天目茶碗・播鉢である。105・106は天目茶碗である。釉調は黒褐色を呈する。外面腰部以下は露胎である。108は播鉢である。口縁部上端をつまみ上げ、口縁部を拡張させる。内面には9条1単位のスリメを施す。他に図示していないが、土師質土器片が11点・煮沸具片が2点、国産陶器片が3点、瓦質土器の鍋片が1点、水晶片が1点出土している。

SK3 (第18図)

SK3は直径約1.4mの円形の土坑である。検出面からの深さは25cmであり、埋土は黒褐色シルトである。図示していないが、土師質土器片が5点、土師器の手づくね皿片が1点、滓状のものが3点出土している。

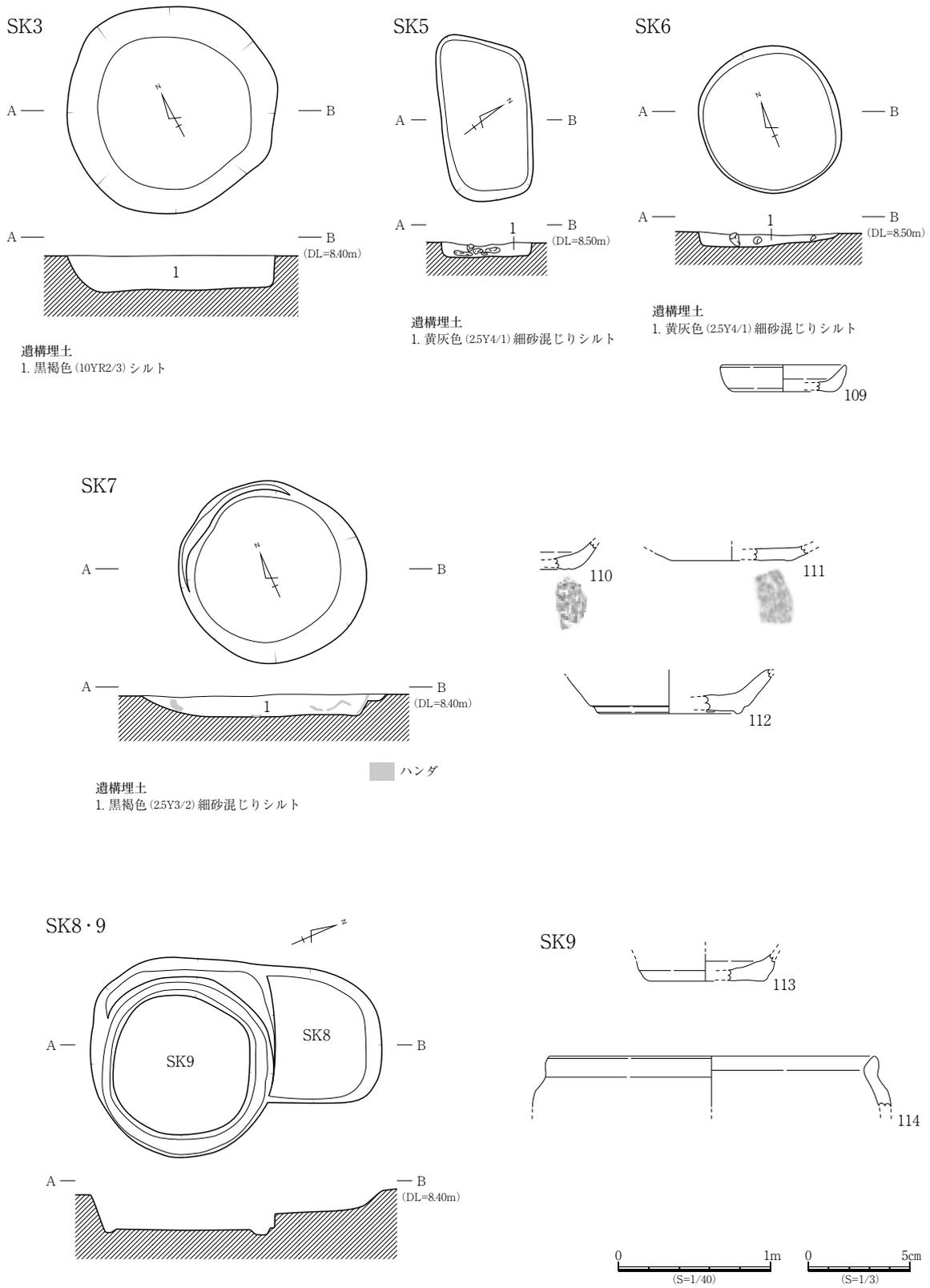
SK4

SK4は北東隅部で検出した土坑である。大部分は調査区外となり、平面形・規模等は不明である。検出面からの深さは5cmである。遺物は出土していない。

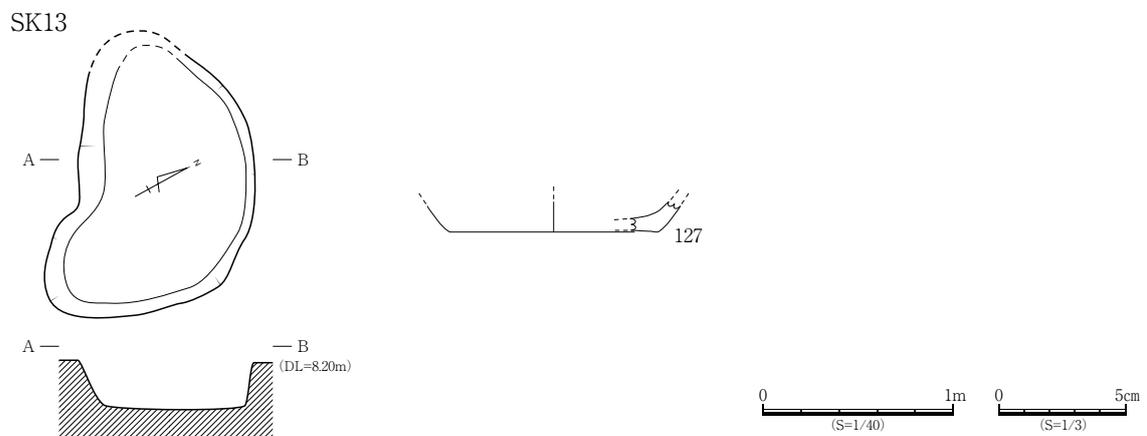
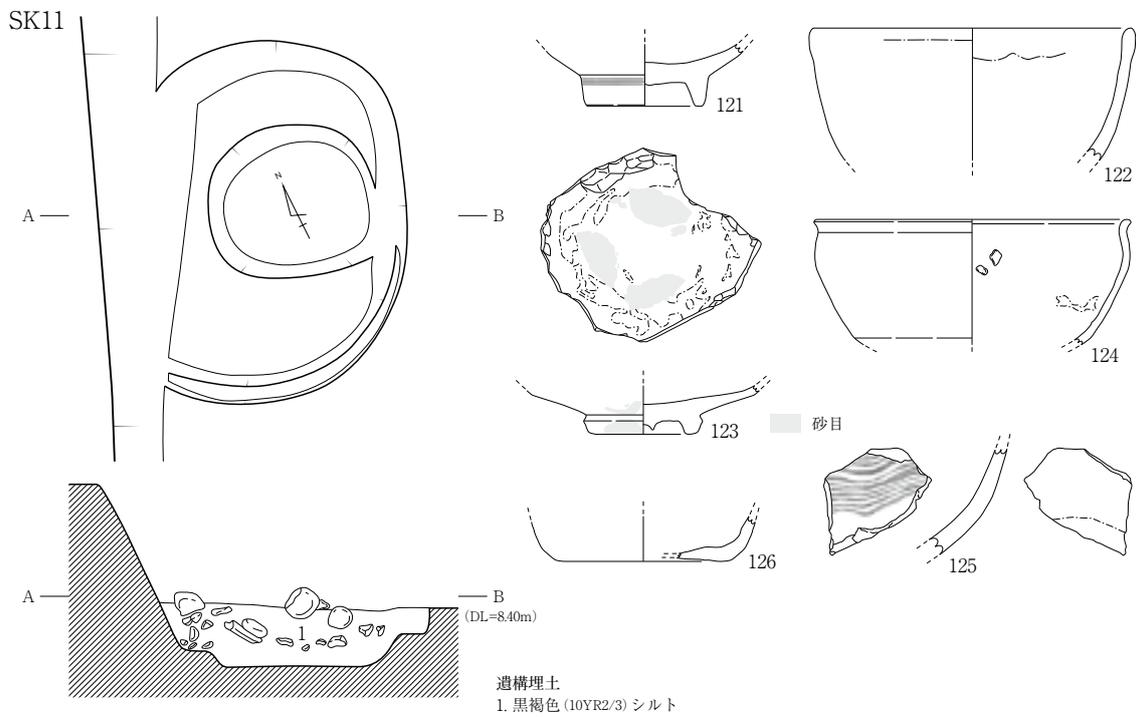
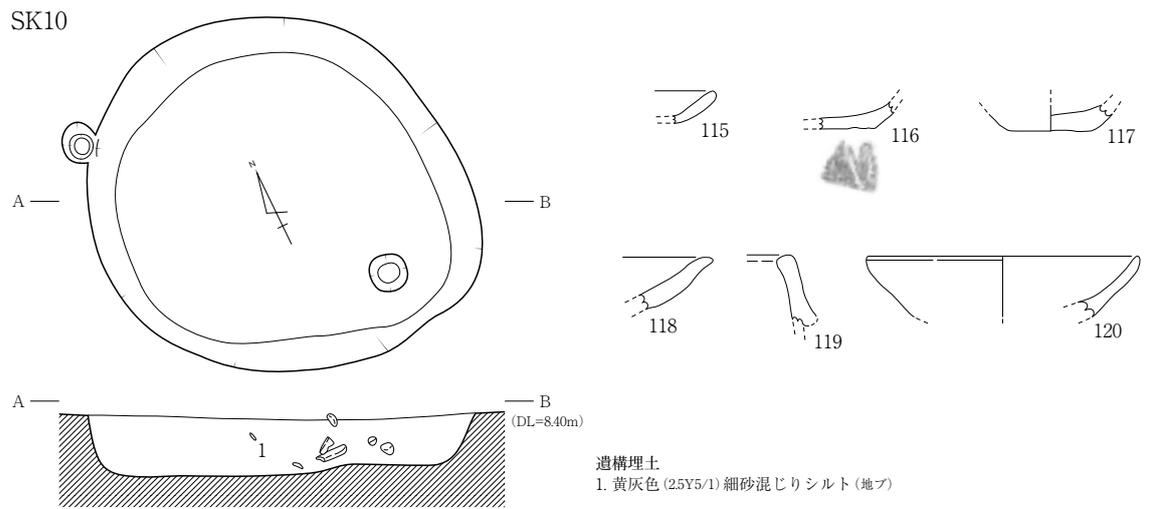


第17図 II区SK2平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

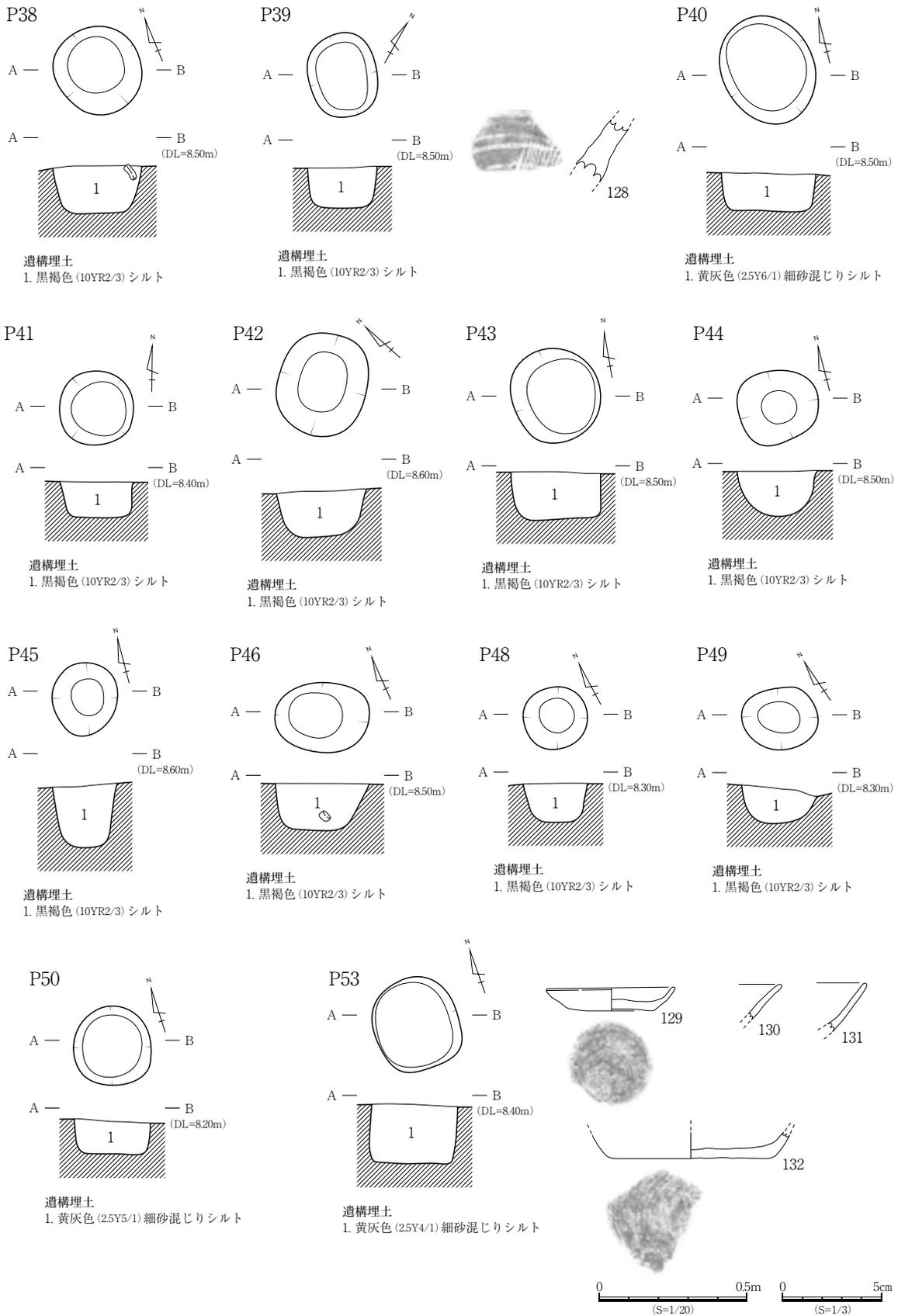


第18図 II区SK平面図・断面図・出土遺物実測図1

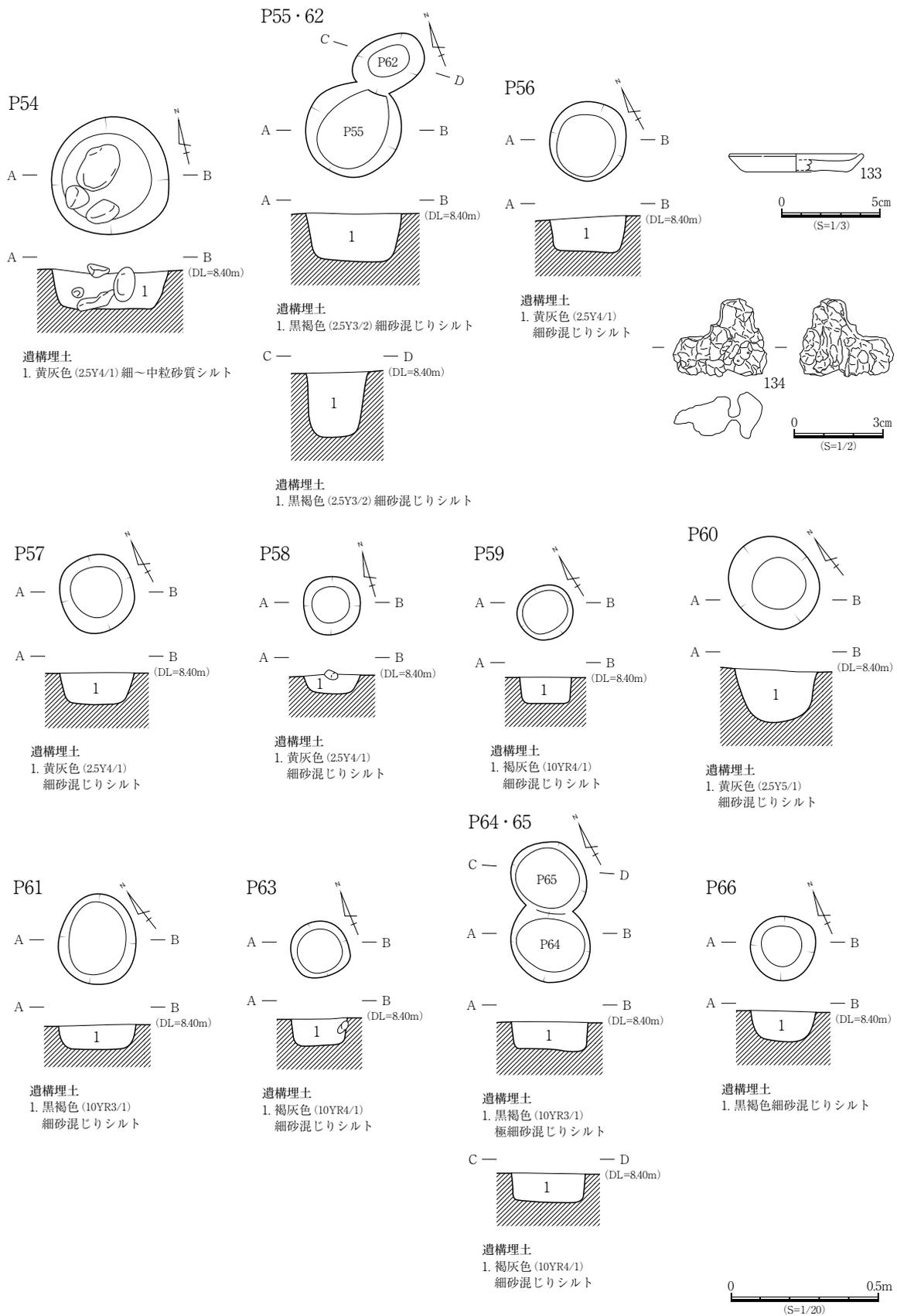


第19図 II区SK平面図・断面図・出土遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

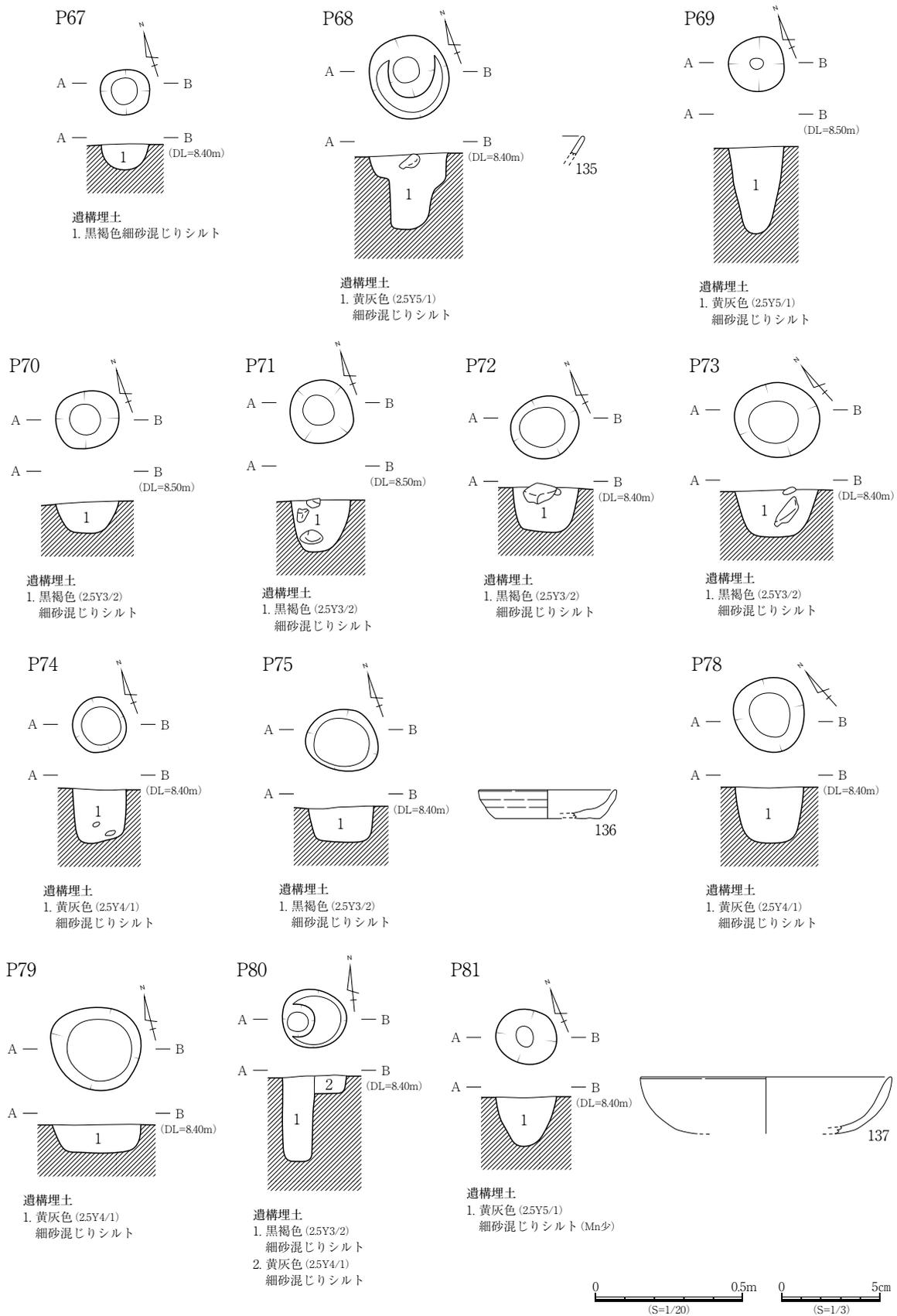


第20図 II区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図1

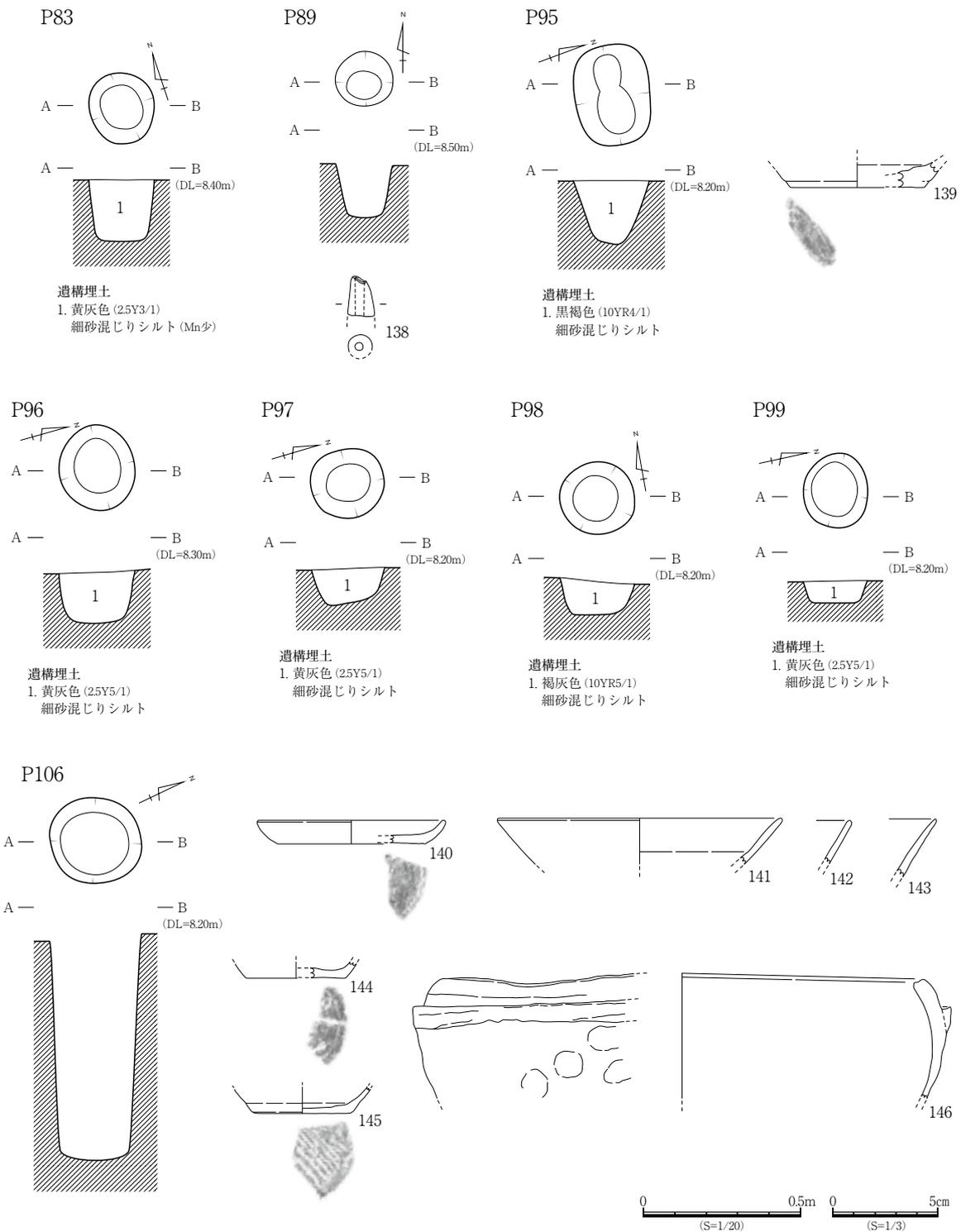


第21図 II区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

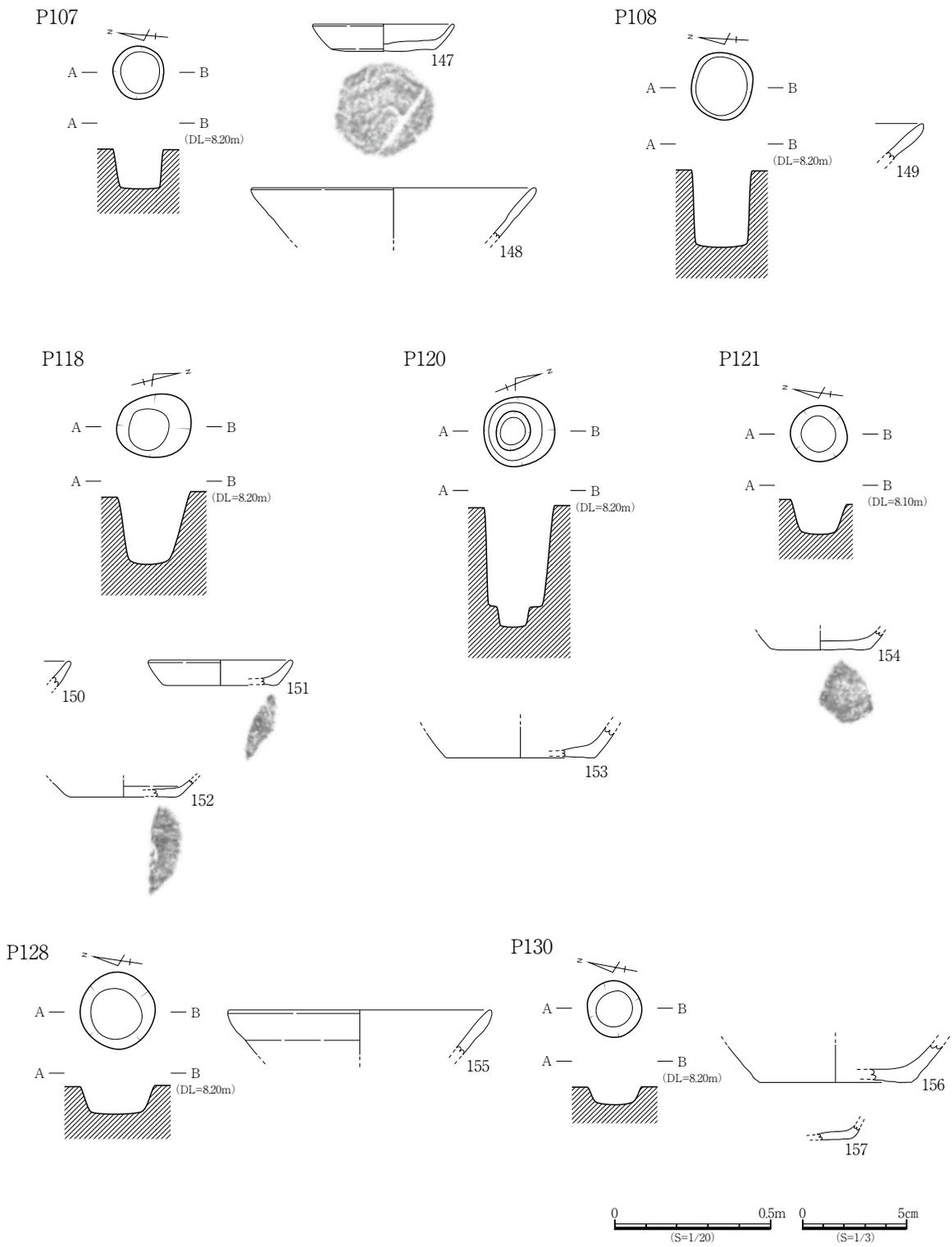


第22図 II区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図3



第23図 II区ピット平面図・断面図・出土遺物実測図4

3. 検出遺構と出土遺物



第24図 Ⅱ区ピット平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

SK5 (第18図)

SK5は長軸約1.0m, 短軸約0.6mの隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さは9cmであり, 埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示していないが, 土師質土器片が8点出土している。

SK6 (第18図)

SK6は直径約1.0mの円形の土坑である。検出面からの深さは8cmであり, 埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の小皿(109)である。磨耗しており, 調整等の観察は困難である。口縁部は短く立ち上がり, 口唇部は尖らせるが, 続く可能性がある。他に図示していないが, 土師質土器片が5点出土しており, このうちの1点は回転糸切り痕が認められる底部片である。

SK7 (第18図)

SK7は直径約1.2mの円形の土坑である。周囲に検出面で幅2cmのハンダ状のものが貼られていたが, 底面にはみられなかった。検出面からの深さは15cmであり, 埋土は黒褐色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(110・111), 陶器の皿(112)である。112は低い高台から内湾気味に立ち上がり, 端部付近で大きく外反する。見込みには釉はぎを施す。外面の釉薬が剥げる。他に図示していないが, 土師質土器片が30点, 国産陶器片が1点, 瓦質土器片が3点出土している。

SK8 (第18図)

SK8は長軸約1.9m, 短軸約0.8mの隅丸長方形を呈していた土坑であると推測される。断面観察でも立ち上がりは不明瞭であった。SK9を切ると考えられる。検出面からの深さは14cmであり, 埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示していないが, 土師質土器片が9点・煮沸具片が1点出土している。

SK9 (第18図)

SK9は直径約1.2mの円形の土坑である。SK8に切られる。検出面からの深さは24cmであり, 埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。底面には幅15cm, 底面からの深さ4cmの周溝が全周する。東部では人頭大の礫を数点検出した。図示した出土遺物は, 土師質土器の杯(113)・羽釜(114)である。113は回転ナデ調整である。内面にはロクロ目がみられる。底部の切り離しは磨耗のため不明である。114は口縁端部で屈曲させ, 口唇部は平坦面を成し, 内傾させる。内外面とも回転ナデ調整で仕上げる。他に図示していないが, 土師質土器片が44点・煮沸具片が3点出土している。

SK10 (第19図)

SK10は直径約1.9mの不整形を呈した土坑である。検出面からの深さは26cmであり, 埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は, 土師質土器の皿(115)・杯(116・117), 土師器の手づくね皿(118)・土師質土器の羽釜(119), 陶器の皿(120)である。118の口縁部にヨコナデ調整を施し, 口縁端部をわずかに外反させる。内外面ともナデ調整である。他に図示していないが, 土師質土器片が127点・煮沸具片が2点, 国産陶器片が3点, 瓦質土器片が5点, 磁器片が1点, 粘土塊が1点, 砥石片が1点出土している。

SK11 (第19図)

SK11は調査区西端部で検出した土坑であり, 調査区外へひろがる。長軸約1.9m, 短軸の検出長は約1.1mである。南端部にテラスを持つ。また, 土坑中央部で長軸約0.9m, 短軸約0.8mの楕円形の土坑を検出した。検出面からの深さは50cmである。埋土は黒褐色シルトであり, 人頭大～拳大の礫を多

3. 検出遺構と出土遺物

く含む。図示した出土遺物は、磁器の碗(121)、陶器の碗(122)・皿(123)・鉢(124・125)、土師質土器の杯(126)である。121は灰白色の釉薬を施す。豊付は釉はぎし、砂が付着する。高台に1条の圈線がみられる。122の釉調は灰白色であり、口縁部のみオリーブ灰色を呈する。123の高台は断面台形状を呈する。灰白色の釉薬を施す。内面は露胎部分もあり、ムラがある。豊付には釉はぎを施す。見込み・外面腰部・豊付には砂目がみられる。124は口縁端部を外反させる。釉調は透明感の有る灰オリーブ色である。125の内面に刷毛目を施す。外面下半部は露胎である。他に図示していないが、土師質土器片が61点、土師器の手づくね皿片が1点、土師質土器の煮沸具片が2点、国産陶器片が2点、瓦質土器片が1点、瓦とみられる破片が1点出土している。

SK13(第19図)

SK13は不整形の土坑である。長軸の検出長は約1.3m、短軸は約0.8mである。検出面からの深さは25cmであり、埋土は黄灰色細砂混じりシルトと浅黄色細砂混じりシルトが混ざる。図示した出土遺物は土師質土器の杯(127)である。磨耗のため、底部の切り離しは不明瞭であるが、回転糸切りと考えられる。他に図示していないが、土師質土器片が53点、瓦質土器片が3点出土している。

②P(ピット)

P39(第20図)

P39は楕円形のピットである。長軸32cm、短軸26cm、検出面からの深さは15cmである。埋土は黒褐色シルトである。図示した出土遺物は陶器の播鉢(128)である。内面に10条以上1単位のスリメを施す。他に図示していないが、土師質土器片が1点出土している。

P53(第20図)

P53は楕円形のピットである。長軸34cm、短軸31cm、検出面からの深さは20cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の皿(129)・杯(130～132)である。129は回転ナデ調整で仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りである。132の底部の切り離しは回転糸切りである。他に図示していないが、土師質土器片が15点、瓦質土器片が1点出土している。

P56(第21図)

P56は円形のピットである。直径30cm、検出面からの深さは12cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の皿(133)、スラグ(134)である。133は回転ナデ調整である。底部の切り離しは不明で外底面はナデ調整を施す。他に図示していないが、土師質土器片が4点出土している。

P68(第22図)

P68は直径29cmの円形のピットである。検出面からの深さは26cmであり、テラスを持つ。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は白磁の皿(135)である。口縁部の小破片である。灰白色の釉薬を施す。他に図示していないが、土師質土器片が1点出土している。

P75(第22図)

P75は楕円形のピットである。長軸24cm、短軸21cm、検出面からの深さは12cmである。埋土は黒褐色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の皿(136)である。回転ナデ調整で仕上げられる。底部の切り離しは回転糸切りである。また、外底面には簀子状圧痕が認められる。他に図示していないが、土師質土器片が1点出土している。

P81 (第22図)

P81は楕円形のピットである。長軸22cm, 短軸20cm, 検出面からの深さは18cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師器の手づくね皿(137)である。口縁部にヨコナデ調整を施し, 口唇部は尖らせ気味となる。色調は灰白色である。他に図示していないが, 土師質土器片が3点出土している。

P83 (第23図)

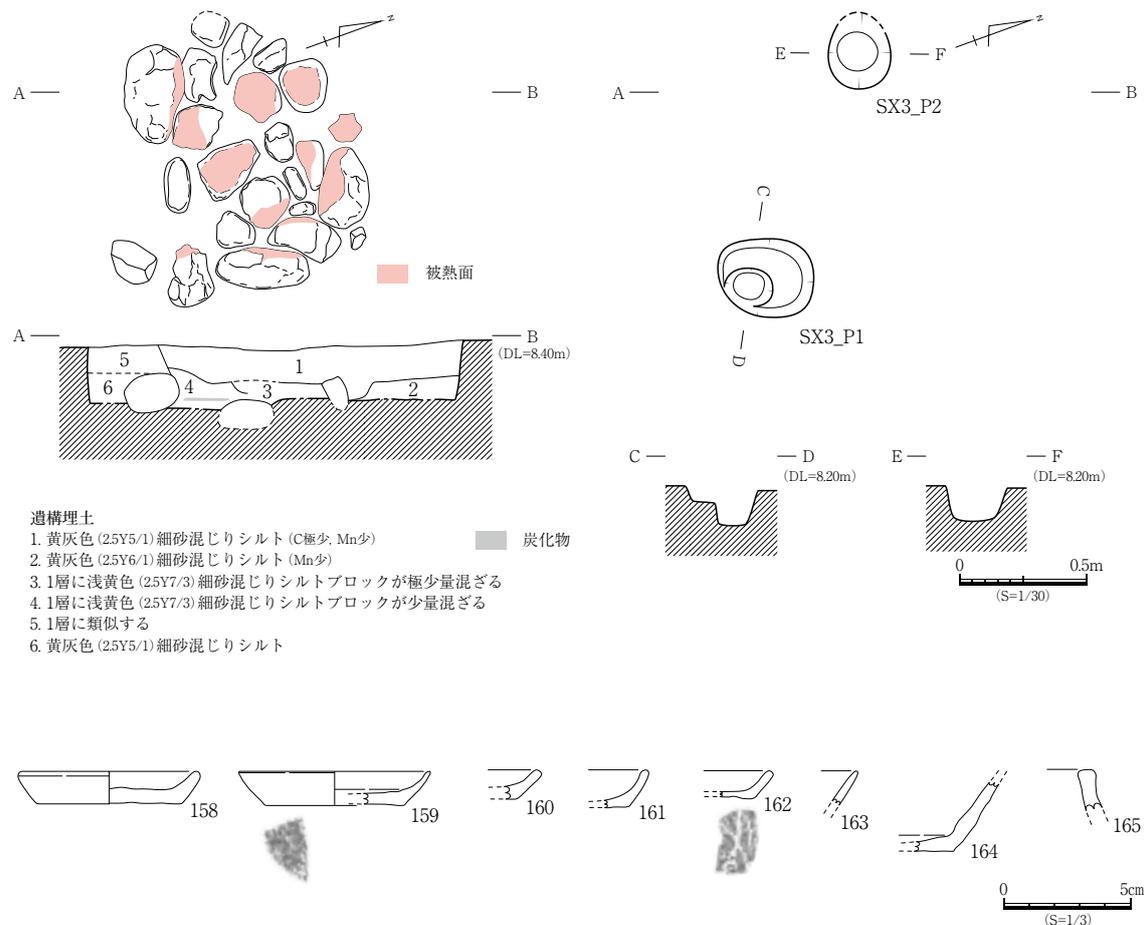
P83は楕円形のピットである。長軸24cm, 短軸21cm, 検出面からの深さは19cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示していないが, 土師質土器片が1点出土している。

P89 (第23図)

P89は円形のピットである。直径18cm, 検出面からの深さは17cmである。図示した出土遺物は管状土錘(138)である。中央部は膨らむ。被熱により変色する。他に図示していないが, 土師質土器片が1点出土している。

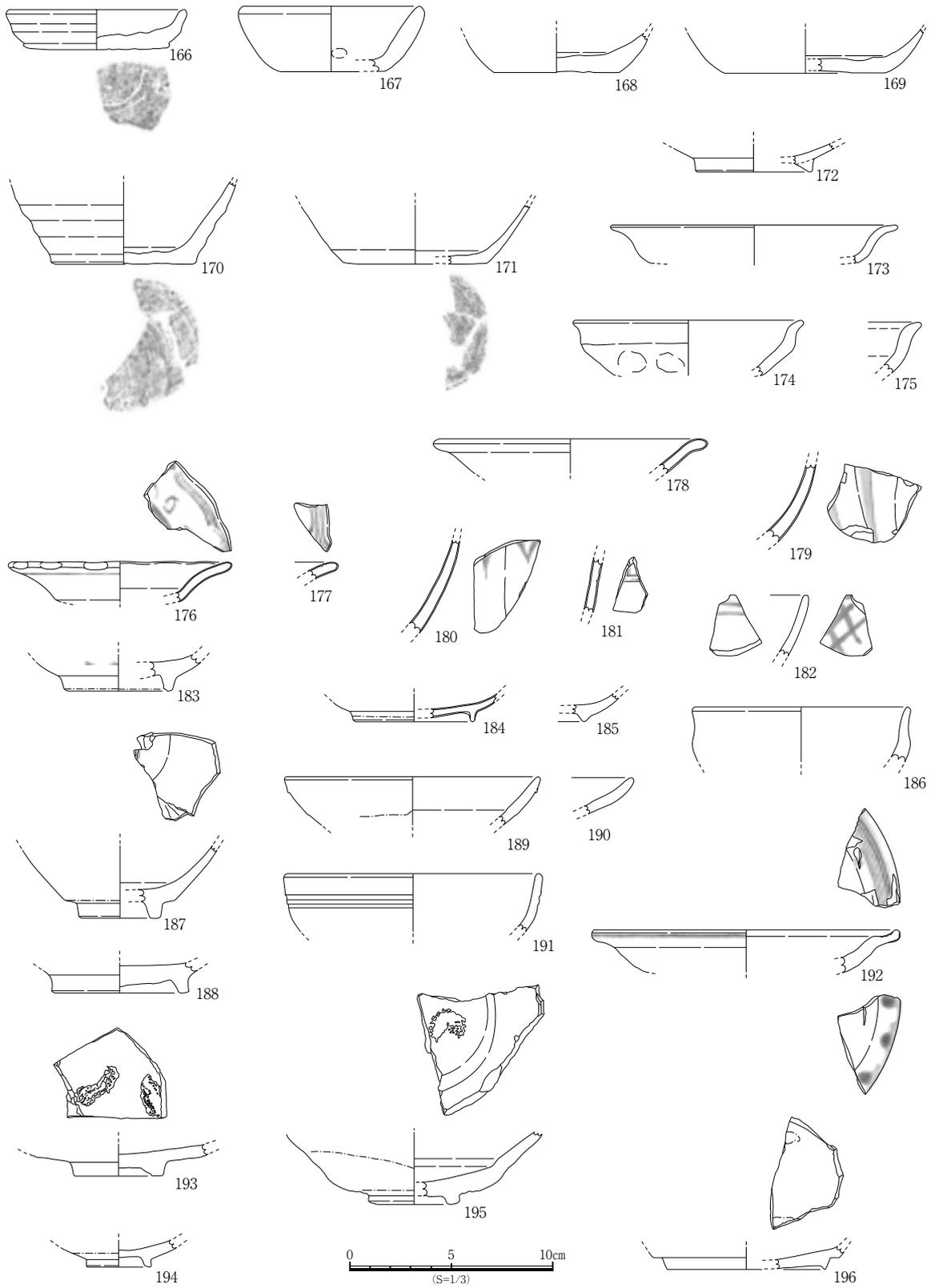
P95 (第23図)

P95は楕円形のピットである。長軸32cm, 短軸24cm, 検出面からの深さは20cmである。埋土は黒褐色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(139)である。回転ナデ調整で仕上



第25図 II区SX3平面図・断面図・出土遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物



第26図 II区遺構外出土遺物実測図1

げられ、内面にはロクロ目がみられる。底部の切り離しは回転糸切りである。他に図示していないが、土師質土器片が7点出土している。

P106 (第23図)

P106は円形のピットである。直径28cm、検出面からの深さは70cmである。図示した出土遺物は土師質土器の皿(140)・杯(141～145)、瓦質土器の羽釜(146)である。土師質土器の皿・杯は回転ナデ調整で仕上げられる。145は外底面に簀子状圧痕が認められる。146の口縁部は内湾する。口縁端部にはヨコナデ調整を施し、口唇部は凹面状を呈する。外面に低い鏝を付す。他に図示していないが、土師質土器片が16点出土している。

P107 (第24図)

P107は円形のピットである。直径17cm、検出面からの深さは13cmである。図示した出土遺物は土師質土器の皿(147)・杯(148)である。147は回転ナデ調整で仕上げられる。底部の切り離しは回転糸切りと考えられ、簀子状の圧痕がみられる。残存率は良好である。148は回転ナデ調整で仕上げられる。他に図示していないが、土師質土器片が4点出土している。

P108 (第24図)

P108は楕円形のピットである。長軸21cm、短軸19cm、検出面からの深さは25cmである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(149)である。回転ナデ調整で仕上げられる。他に図示していないが、土師質土器片が11点出土している。

P118 (第24図)

P118は楕円形のピットである。長軸24cm、短軸20cm、検出面からの深さは21cmである。図示した出土遺物は土師質土器の皿(150・151)・杯(152)である。151は回転ナデ調整で仕上げられ、底部の切り離しは回転糸切りである。磨耗のためか、色調は黄灰色を呈する。152の底部の切り離しは回転糸切りである。他に図示していないが、土師質土器片が2点出土している。

P120 (第24図)

P120は円形のピットである。直径24cm、検出面からの深さは39cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(153)である。回転ナデ調整で仕上げられ、外面には弱いロクロ目がみられる。底部の切り離しは磨耗のため不明である。他に図示していないが、土師質土器片が21点・煮沸具片が2点、粘土塊が1点出土している。

P121 (第24図)

P121は円形のピットである。直径18cm、検出面からの深さは9cmである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトと浅黄色細砂混じりシルトが混ざる。図示した出土遺物は土師質土器の杯(154)である。回転ナデで仕上げられ、内面には弱いロクロ目がみられる。底部の切り離しは回転糸切りである。他に図示していないが、土師質土器片が1点出土している。

P128 (第24図)

P128は円形のピットである。直径23cm、検出面からの深さは9cmである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(155)である。回転ナデで仕上げられる。他に図示していないが、土師質土器片が2点、粘土塊が1点出土している。

P130 (第24図)

P130は円形のピットである。直径18cm、検出面からの深さは6cmである。図示した出土遺物は土師

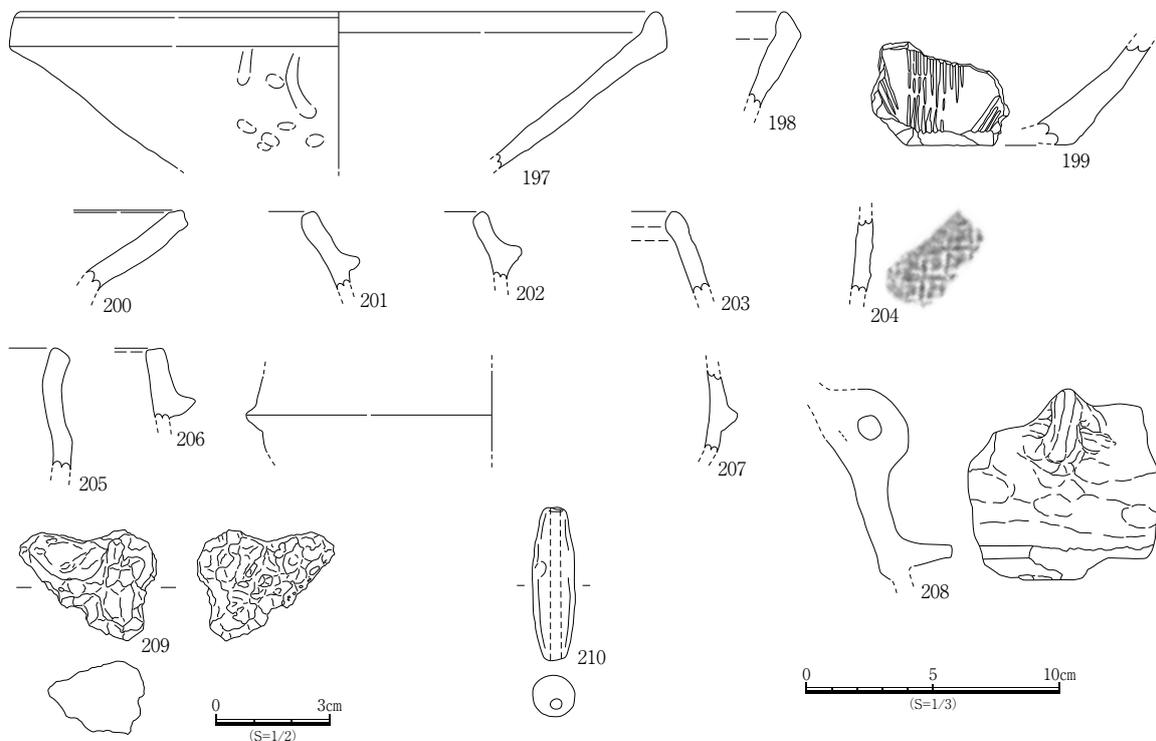
質土器の杯(156・157)である。回転ナデ調整で仕上げられる。磨耗のため底部の切り離しは不明である。他に図示していないが、土師質土器片が1点出土している。

③ SX

SX3 (第25図)

SX3は調査区南西隅部で検出した。調査区の一部を拡張したが西端は確認できなかった。調査区壁も精査し掘り込まれた面及び掘り方を精査したが確認できなかった。また、床に敷かれていた礫を除去すると地山であり、掘り方は無かった。以上のことから当時の地表面に礫を立てて押し込み壁とし、上面が平らとなるように上から礫を押し込み、床面を形成していたと考えられる。礫集中全体は長軸の検出長約1.2m、短軸約0.9mである。内法部分は長軸の検出長約1.0m、短軸約0.7mである。これらの礫の多くは被熱により赤色を呈し、床面の上には焼土ブロックが多く認められ、その上には焼土ブロックを含んだ炭化物が層を成していたことから、この場所で火を焚いていたことは確実である⁽¹⁾。礫を除去後、ピットを2基検出した。SX3_P1は楕円形のピットである。長軸38cm、短軸32cm、検出面からの深さは21cmを測る。埋土には炭化物が多量に含まれており、粒状滓・鍛造剥片を採取した。SX3_P1からは図示した土師質土器の皿(163)以外に土師質土器片が2点出土している。一方、SX3_P2は直径約25cm、検出面からの深さは14cmを測る。埋土に含まれる炭化物の量は少なく、SX3に伴わない可能性がある。SX3は鍛冶関連の遺構と考えられる。

図示した出土遺物は土師質土器の皿(158～163)・杯(164)、瓦質土器の鍋(165)である。図示した遺物は土師質土器の皿が多い。回転ナデ調整で仕上げられる。底部の切り離しは、159・162・164が回転



第27図 II区遺構外出土遺物実測図2

糸切りであり、158・160・161は磨耗のため不明である。165は口縁部の小破片である。内傾し、口唇部は丸みを帯びた平坦面を成す。上述のようにSX3は掘り込まれた遺構ではなく、これらの遺物は廃絶時の時期を厳密には示していない可能性がある。他に図示していないが、土師質土器片が70点、瓦質土器片が9点、粘土塊が1点出土している。また、埋土を洗浄し得られた炭化米の放射性炭素年代測定を実施し、1,258～1,295年の年代値を得ている(第Ⅳ章参照)。

④Ⅱ区遺構外出土遺物(第26・27図)

土師質土器、土師器、青磁、近世陶磁器、須恵器、瓦質土器、スラグ、土錘を図示した。

167は土師質土器の杯であり、口縁端部にタールが付着している。灯明皿として使用か。170は土師質土器の杯である。回転ナデ調整であり、内底面及び外面にはロクロ目が認められる。底部の切り離しは回転糸切りである。172は土師質土器の椀である。外底面に断面三角形の高台を貼付ける。内面はミガキ調整か。173～175は土師器の手づくね皿である。口縁部にはヨコナデ調整を施し、口縁端部を外反させる。176・177は青磁の稜花皿である。176は透明感の有るオリブ灰色の釉薬を施す。口縁部に3条の沈線が巡る。また、内面には文様の一部が認められる。177は口縁部に4条の沈線がみられる。178は青磁の碗である。口縁端部で外反させ、口唇部は丸くおさめる。179・180は鎬蓮弁文、181は雷文帯を施す。182・183は磁器の碗である。182の外面には1条の圏線と斜格子文、内面には2重の圏線を施す。183の畳付には釉はぎを施す。高台は断面逆台形を呈し、内面脇には砂が付着する。184・185は磁器の皿である。184の高台は断面三角形を呈し、畳付には釉はぎを施す。185は内外面に青磁釉を施す。高台は丸みを持った方形であり、畳付には釉はぎを施す。186・187は陶器の碗である。186は天目茶碗である。口縁端部を強くナデ、外反させる。内外面に飴色の釉薬を施す。187の高台は断面長方形を呈する。内面には灰白色の釉薬を施し、見込みには染付が認められる。外面の釉調は光沢のない灰色であり、高台は露胎である。188は陶器の碗である。高台は断面方形を呈する。内面には浅黄色の釉薬を施す。外面は露胎である。189～196は陶器の皿である。189・190は同タイプである。灰オリブ色の釉薬を施す。189の外面下半部は露胎である。191の口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。外面には2条の沈線を巡らせる。192は口縁部が水平近くまで外反し、口縁端部をつまみ上げる。口縁部内面には5条1単位の櫛描文を巡らせる。口縁部内面から口縁端部にかけて灰オリブ色の釉薬を施す。外面には釉だれがみられる。193の内外面ともに釉調は灰白色を呈し、畳付には釉はぎを施す。高台は低い断面逆台形状を呈する。見込み及び高台には砂目がみられる。194の高台は端面が内傾し外縁端部で接地する。釉調は光沢の有る灰白色であり、外面腰部以下は露胎である。195は見込みに段部がみられる。灰黄色の釉薬を施し、外面腰部以下は露胎である。見込みには砂目が認められる。196の高台は断面三角形を呈し、特徴的な形態である。内面には浅黄色の釉薬を施し、外面は露胎である。見込みには胎土目跡が認められる。197は須恵器の捏ね鉢である。口縁部は上方へ拡張する。内外面とも回転ナデ調整を施す。198は東播系の須恵器の捏ね鉢である。口縁部を上方へ拡張する。199は搦鉢である。内面には10条1単位のスリメを施す。内面は使用により平滑となる。200は土師器の甕である。口縁部を外反させ、口唇部は凹面～「M」字状を呈する。201～204は土師質土器の羽釜である。204の外面には格子状の叩き目がみられる。205は瓦質土器の鍋である。頸部から口縁部にかけて緩やかな「S」字状を呈する。口唇部は面取りされ、つまみ上げる。内外面ともナデ調整である。206・207は瓦質土器(土師質土器)の羽釜である。206の口唇部は平坦面

3. 検出遺構と出土遺物

を成し、内傾する。口縁部には断面三角形の鏝を付す。208 は土師質土器の茶釜である。断面長方形の鏝が付される。210 は管状土錘である。中央部が膨らむ。完存である。図示した以外に国産陶器片、近世以降の瓦片、水晶片が出土している。

註

(1) 徳王子広本遺跡で類似した遺構(Ⅱ区SK-1)が検出されている。

下村 裕・井上昌紀・小川博敏2014年『徳王子広本遺跡』高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

第IV章 岡遺跡の自然科学分析

1. はじめに

本報告では、被熱した石敷き遺構(SX3)埋土(SX3とSX3_P1)の微細物分析および放射性炭素年代測定、包含層から検出された金属遺物(図版番号209)の分析(顕微鏡観察、化学分析、EPMA分析)結果を報告する。

2. 微細物分析

(1) 試料

試料は、SX3、SX3_P1の埋土2点である。SX3_P1は、SX3基底部の礫敷を除去した底面で検出されたピット状の遺構である。本遺構埋土には、炭化物が多く含まれる。SX3では、礫敷直上において炭化物や焼土が多く検出されている。礫敷を覆う埋土には、炭化物や焼土があまり含まれない。

(2) 分析方法

① 水洗別方法

堆積物試料から炭化種実や金属製品等の遺物を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径4.0mm、2.0mm、1.0mmの篩に通してシャーレに移し、常温乾燥させる。乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や、主に2mm以上の炭化材、土器片等の遺物をピンセットで抽出する。抽出物は、一覧表(表2)に重量を示す。炭化材は最大径を併記し、炭化種実と土器片は個数と最大径を併記する。分析残渣は、砂礫主体と2mmの篩を通り抜けた炭化材主体に大きく分け、粒径別の重量を示す。

② 種実遺体同定

種実の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2000)、鈴木ほか(2012)等の図鑑類を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表(表2)で示す。

分析後は、イネの胚乳1個は放射性炭素年代測定対象とする。イネの穎、炭化材、土器片、分析残渣は容器に入れて保管する。

③ 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する(表3)。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

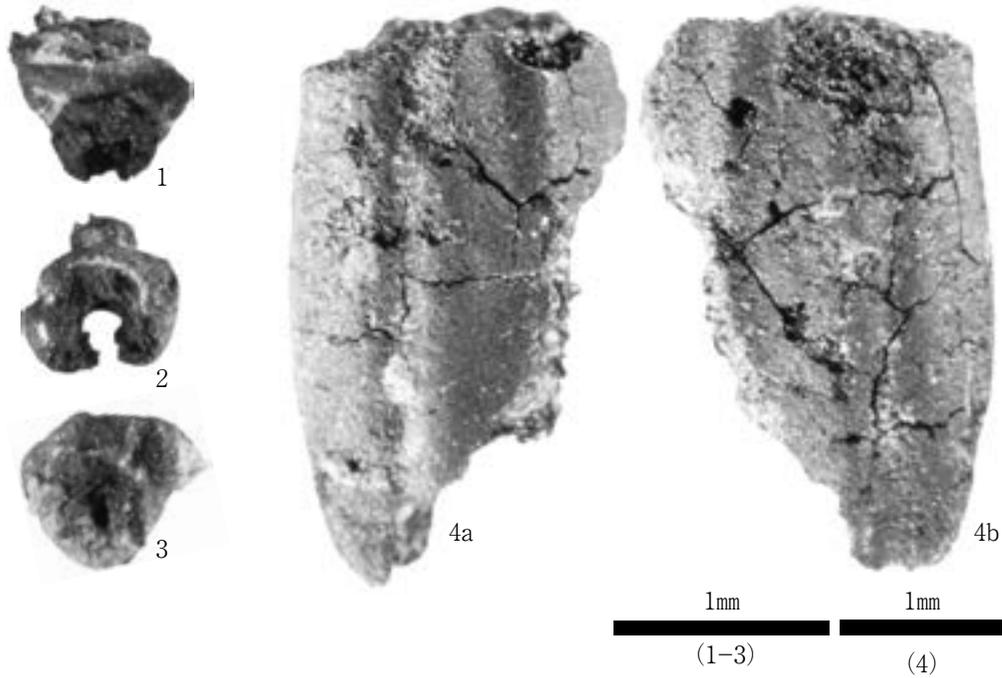
(3) 結果

結果を第28図と表2・3に示す。以下、結果の記載を試料毎に行う。

・SX3

試料400cc(776g)より、炭化した栽培種のイネの胚乳(炭化米)の破片が1個(0.01g;残存長3.7mm)と、炭化材が0.7g(最大14.5mm)、土器片が4個(6.2g;最大32.0mm)検出された。分析残渣は、炭化材主体が1.3g、砂礫主体が62.6g、炭化していない植物片(後代の混入の可能性)が0.01gであった。

2. 微細物分析



1. イネ 穎(基部) (SX3_P1) 2. イネ 穎(基部) (SX3_P1) 3. イネ 穎(基部) (SX3_P1) 4. イネ 胚乳(年代測定) (SX3)

第28図 種実遺体

表2 微細物分析(土壌洗い出し)・種実同定結果

分類群・部位	状態	15-1AO		備考
		SX3	SX3_P1	
炭化種実				
イネ胚乳	破片	1 0.01 3.7	- - -	(個), 年代測定対象 乾重(g) 残存長(mm)
イネ穎(基部)	破片	- - -	3 <0.001 0.8	(個) 乾重(g) 最大径(mm)
炭化材		14.5	9.6	最大径(mm)
	>4mm	0.6	0.4	乾重(g)
	4-2mm	0.1	0.3	乾重(g)
炭化材主体	2-1mm	0.3	0.4	乾重(g)
	1-0.5mm	1.0	0.7	乾重(g)
土器片		4 6.2 32.0	1 0.5 12.4	(個) 乾重(g) 最大径(mm)
砂礫主体		8.6 10.3 15.4 28.3	33.1 2.2 3.3 7.9	乾重(g) 乾重(g) 乾重(g) 乾重(g)
植物片主体		0.01	0.01	乾重(g)
分析量		400 776	200 367	容積(cc) 湿重(g)

・SX3_P1

試料 200cc (367g) より、炭化した栽培種のイネの穎(籾)の基部の破片が 3 個 (0.001g 未満; 最大 0.8 mm) と、炭化材が 0.7g (最大 9.6mm), 土器片が 1 個 (0.5g; 径 12.4mm) 検出された。分析残渣は、炭化材主体が 1.1g, 砂礫主体が 46.5g, 炭化していない植物片 (混入の可能性) が 0.01g で、約 7 割 (33.1g) が径 4mm の篩に残る中礫であった。

(4) 考察

① 種実遺体

SX3, SX3_P1 の土壌試料を洗い出した結果、金属製品等の微細遺物は確認されなかった。土器片は少量確認された。有機物としては、炭化した栽培種のイネの胚乳(炭化米)と穎(籾)、炭化材片が検出された。これらは、すべて炭化しており、未炭化のものは確認されなかった。イネについては、調査地内に食糧などとして持ち込まれ、なんらかの要因で火を受けたものとみなされる。炭化材および焼土とともに産出していることから、炭化したイネは、遺構内で燃焼された可能性が示唆される。ただし、現状では、被熱痕跡のある SX3 内(遺構底部の SX3_P1 部分含む)で火を受けたかどうかを確定することが難しい。

② 炭化材

炭化材は、針葉樹 3 分類群(マツ属複雑維管束亜属・モミ属・ヒノキ科)と広葉樹 4 分類群(クマシデ属イヌシデ節・クスノキ科・サクラ属・ネジキ)の合計 7 種類が認められた。上記のことから、これらの炭化材は、SX3 内(遺構底部の SX3_P1 部分含む)で燃焼された木材に由来する可能性がある。

各種類の材質等をみると、針葉樹のマツ属複雑維管束亜属は、針葉樹としてはやや重硬な部類に入り、強度と保存性が比較的高い。モミ属は、軽軟で強度と保存性は低い。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれる。木材は針葉樹としてはやや軽軟な部類に入るが、強度と保存性は比較的高い。広葉樹のイヌシデ節、サクラ属、ネジキは、比較的重硬で強度が高い。クスノキ科には、多くの種類が含まれ、やや重硬なものから軽軟な種類まで材質にも幅がある。

遺構別にみると、SX3 では、>4mm メッシュで 3 種類、4-2mm メッシュで 2 種類が認められる。>4mm メッシュでマツ属複雑維管束亜属が認められることを除けば、>4mm メッシュと 4-2mm メッシュで同じ樹種が認められる。本地点では、ヒノキ科を中心とした針葉樹の利用が目立つ傾向がある。一方、SX3_P1 は、>4mm メッシュと 4-2mm メッシュで各 3 種類が認められるが、SX3 と比較しても、マツ属複雑維管束亜属が重複する他は、異なる樹種が産出する。この SX3_P1 の種類構成を詳しくみると、>4mm メッシュと 4-2mm メッシュの両方でサクラ属が確認されたことを除けば、両メッシュで樹種構成が異なる。SX3_P1 の>4mm メッシュから検出された比較的大きい炭化材では、イヌシデ節、サクラ属、ネジキなどの硬い広葉樹材が多く、4-2mm メッシュではマツ属複雑維管束亜属やモミ属といった針葉樹の破片が多い。こうした違いは、各木材の燃焼性の違いに起因する可能性がある。すなわち、比較的燃

表3 樹種同定結果

種類\遺構	SX3		SX3_P1	
	>4mm	4-2mm	>4mm	4-2mm
針葉樹				
マツ属複雑維管束亜属	2			2
モミ属				2
ヒノキ科	2	4		
広葉樹				
クマシデ属イヌシデ節			2	
クスノキ科	1	1		
サクラ属			2	1
ネジキ			1	
合計	5	5	5	5

3.放射性炭素年代測定

焼性が高い針葉樹類は細かな破片になり、硬く燃えにくい広葉樹材は大きい破片として残った可能性がある。

3.放射性炭素年代測定

(1)試料

試料は、微細物分析の水洗別により取り上げられたSX3のイネの胚乳である。

(2)分析方法

試料の前処理については、木炭、炭質物、木材の試料へ土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをメス・ピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。

なお、AAA処理でのHClによる酸処理では、通常1mol/l(1M)を用いる。アルカリ処理でのNaOHは、0.001M～1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表記する。

腐植については、メス・ピンセットを使い石などの混入物を取り除き、残りの全試料をすりつぶす(Bulk)。酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/l(1M)のHClを用い、処理として「HCl」と表記する。

処理を終えた試料については、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じ切り、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

表4 放射性炭素年代測定結果

試料名	前処理 (種類)	補正年代 yrs BP	$\delta^{13}C$ (‰)	較正用 年代値	暦年較正年代(cal)			相対比	Code No.
					σ	cal AD 1,269 - cal AD 1,285	cal BP 681 - 665		
SX3埋土 出土炭化	AaA イネ炭化胚乳	720 ± 20	-25.15 ± 0.54	723 ± 24	σ	cal AD 1,269 - cal AD 1,285	cal BP 681 - 665	1.000	IAAA
					2 σ	cal AD 1,258 - cal AD 1,295	cal BP 692 - 655	1.000	-1500685

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1 (Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
- 5) 暦年計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 6) 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 7) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2 σ は95%である。
- 8) 相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。

暦年較正に用いるソフトウェアはCALIB var.7.1である。また、このソフトウェアで用いられる較正曲線はIntCal13 (Reimer et al,2015)である。

(3)結果

同位体効果による補正を行った結果は、 720 ± 20 yrs BPで、 2σ の暦年較正結果が1,258- 1,295 cal AD である(表4)。

4. 金属遺物の分析

(1)試料

分析試料は、17世紀代の遺構が検出された遺構確認面上面と、中世の遺構が検出された遺構確認面下面の間に存在する包含層から検出された金属遺物(図版番号209)である(表5)。

表5 供試材の履歴と調査項目

出土位置	遺物名称	計測値		メタル度	調査項目			
		大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	EPMA	化学分析
II区包含層	鍛冶滓	2.9 × 3.6 × 2.0	17.2	なし	○	○	○	○

(2)分析方法

①肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

②マクロ組織

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡組織よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

③顕微鏡組織

鋳滓の鋳物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

④EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子(株)製JXA-8800RL(波長分散型5チャンネル)にて含有元素の定性・定量分析を実施した。試料電流は 2.0×10^{-8} アンペア、ビーム径 $3\mu\text{m}$ 、補正法はZAFに従った。

反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また各元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

⑤化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

4. 金属遺物の分析

炭素(C), 硫黄(S) : 燃焼容量法, 燃焼赤外吸収法。

二酸化ケイ素(SiO_2), 酸化アルミニウム(Al_2O_3), 酸化カルシウム(CaO), 酸化マグネシウム(MgO), 酸化カリウム(K_2O), 酸化ナトリウム(Na_2O), 酸化マンガン(MnO), 二酸化チタン(TiO_2), 酸化クロム(Cr_2O_3), 五酸化リン(P_2O_5), バナジウム(V), 銅(Cu), 二酸化ジルコニウム(ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 結果

① 肉眼観察

ごく小形の鍛冶滓(17.2g)である。上面には一部淡橙色の被熱粘土を含む羽口先端溶融物(黒色ガラス質滓)が瘤状に付着する。滓の地の色調は灰褐色で、弱い弱磁性がある。下面側は細かい木炭痕による凹凸が目立つ。また側面1面は破面で、微細な気孔が散在する。

② マクロ組織

結果を第29図のPhoto.1①に示す。上側の暗色部は羽口先端の溶融物と推定される。素地は黒色ガラス質滓で、内部には炉材粘土に混和された石英などの砂粒が多数点在する。また下面側は鍛冶滓で、全体に淡灰色柱状結晶ファヤライト($\text{Fayalite} : 2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)が観察される。白色粒状結晶ウスタイト($\text{Wustite} : \text{FeO}$)の晶出は部分的である。

③ 顕微鏡組織

結果を第29図のPhoto.1②・③に示す。②は淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する箇所である。また滓中には微細な金属鉄粒(明白色部)が点在する。③は白色粒状結晶ウスタイトが晶出する箇所である。

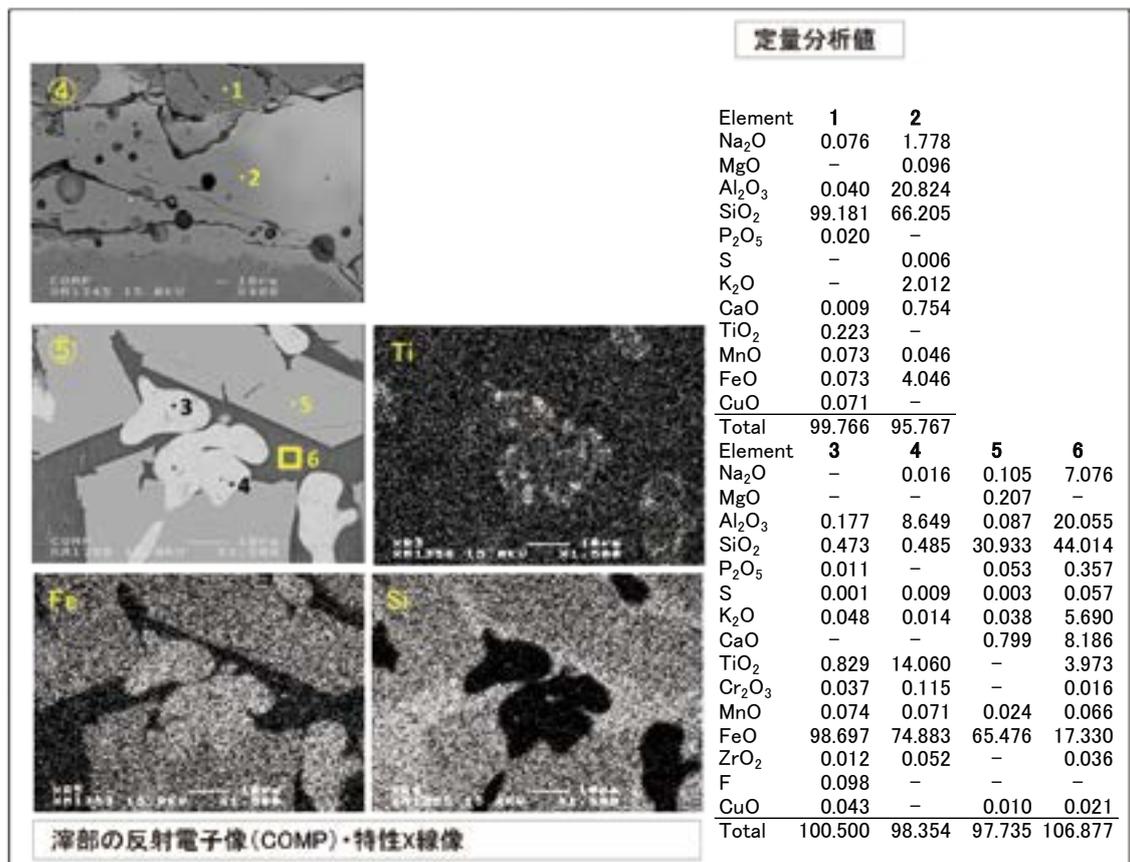
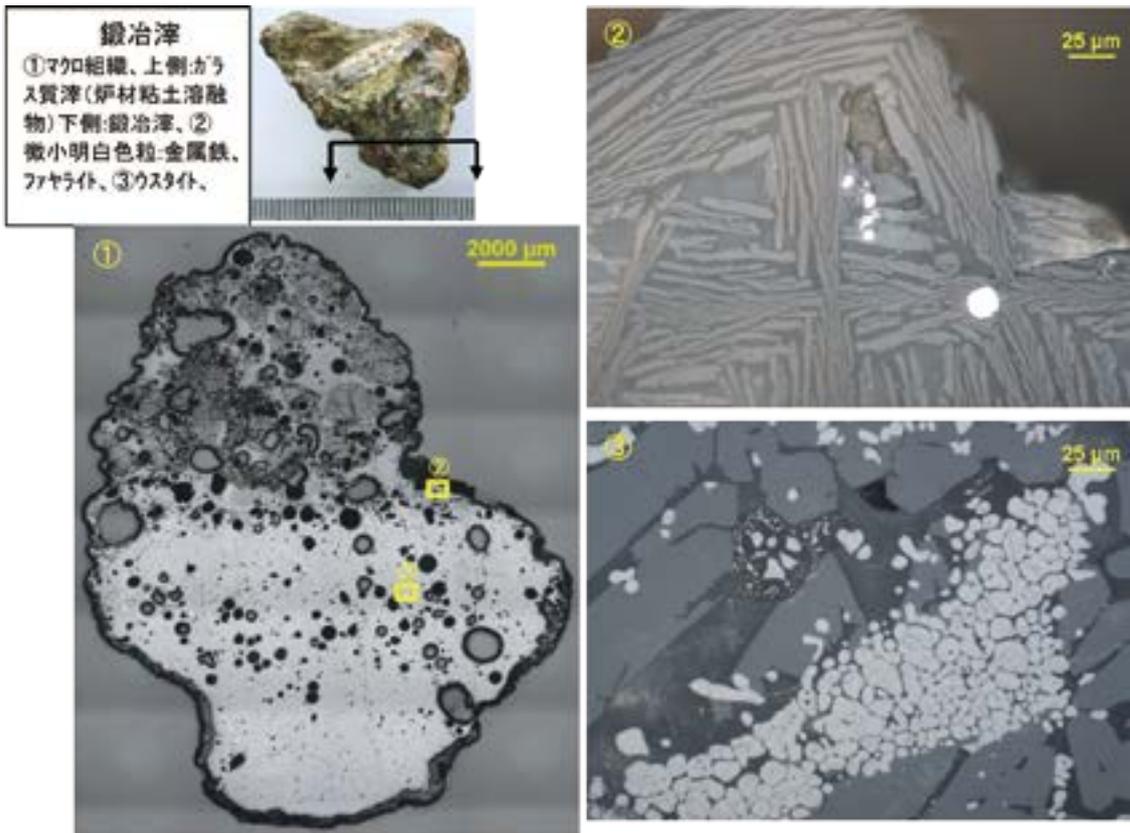
④ EPMA 調査

結果を第29図のPhoto.1④に上側のガラス質滓部分の反射電子像(COMP)を示す。写真上側の暗色鉄物の定量分析値は99.2% SiO_2 (分析点1)であった。石英($\text{Quartz} : \text{SiO}_2$)に同定される。また素地のガラス質滓の定量分析値は66.2% SiO_2 - 20.8% Al_2O_3 - 2.0% K_2O - 1.8% Na_2O - 4.0% FeO (分析点2)であった。

もう1視野、鍛冶滓部分の調査を実施した。結果を第29図のPhoto.1⑤に反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶の定量分析値は98.7% FeO (分析点3)であった。ウスタイト($\text{Wustite} : \text{FeO}$)と推定される。微細な灰褐色結晶の定量分析値は74.9% FeO - 14.1% TiO_2 - 8.6% Al_2O_3 (分析点4)であった。マグネタイト($\text{Magnetite} : \text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)とウルボスピネル($\text{Ulvöspinel} : 2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$), ヘルシナイト($\text{Hercynite} : \text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)を主な端成分とする固溶体と推定される(黒田・諏訪,1983)。また淡灰色柱状結晶の定量分析値は65.5% FeO - 30.9% SiO_2 (分析点5)であった。ファヤライト($\text{Fayalite} : 2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)に同定される。また素地のガラス質滓の定量分析値は44.0% SiO_2 - 20.1% Al_2O_3 - 8.2% CaO - 5.7% K_2O - 7.1% Na_2O - 17.3% FeO - 4.0% TiO_2 (分析点6)であった。

⑤ 化学組成分析

結果を表6に示す。全鉄分(Total Fe) 34.14%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.15%, 酸化第一鉄(FeO) 36.05%, 酸化第二鉄(Fe_2O_3) 8.52%の割合であった。造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は53.18%と高値であるが、塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)の割合は2.48%と低い。炉材粘土(SiO_2 , Al_2O_3)の影響によるものと考えられる。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO_2)は0.21%, バナジウム(V) < 0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.06%, 銅(Cu)も < 0.01%と低値である。



第29図 顕微鏡組織・EPMA 調査結果

4. 金属遺物の分析

表6 供試材の化学組成

全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第一鉄 (FeO)	酸化第二鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 ケイ素 (SiO ₂)	酸化 アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化 カルシウム (CaO)	酸化 マグネシウム (MgO)	酸化 カリウム (K ₂ O)	酸化 ナトリウム (Na ₂ O)	酸化 マンガン (MnO)
34.14	0.15	36.05	8.52	42.22*	5.38*	1.83*	0.65*	2.09*	1.01*	0.06
二酸化 チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化 ジルコニウム (ZrO ₂)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe
0.21	0.06	0.024	0.32	0.15	<0.01	<0.01	0.01	53.18	1.558	0.006

註) 造滓成分は、*の値の合計値である。

(4) 考察

分析調査を実施した鉄滓は、熱間での鉄器製作に伴う鍛錬鍛冶滓に分類される。

この鉄滓の上面には、羽口粘土溶融物(石英などの砂粒を含むガラス質滓)があり、下側の滓部もウスタイト(Wustite: FeO)の晶出は部分的で、全体に鉄酸化物の割合の低い滓であった。鉄材の酸化に伴う損失(吹き減り)が比較的少なく、比較的後工程の反応副成物と推測される。

また滓のチタン含有率は低減傾向が著しい(TiO₂: 0.21%)が、EPMAでの鉱物組成調査によってチタンを含む微細な淡褐色結晶(第29図 Photo.1 ⑤分析点4, TiO₂: 14.1%)が確認された。このため鉄素材の製鉄原料は砂鉄であった可能性が考えられる。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.

黒田吉益・諏訪兼位,1983,偏光顕微鏡と岩石鉱物 第2版. 共立出版,343p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会,678p.

Reimer J Paula et al,2013,Intcal13 and Marine13 Radiocarbon age Calibration curves 0 – 50,000 years cal BP. RADIOCARBON,55,1869 – 1887.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－. 誠文堂新光社,272p.

Stuiver Minze and Polach A Henry,1977,Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19,355-363.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第V章 まとめ

1.『長宗我部地検帳』からみた伊尾木村

(1)はじめに

伊尾木村の構造と様相について伊尾木村の地籍図と『長宗我部地検帳』をもとに地検帳段階の景観復元をしてみたいと思う。

(2)伊尾木村の検地(第30図)

①初日⁽¹⁾

地検帳では井尾喜ノ浜東ノハシから西へ向かって検地が始まり、エヒスノ西を境に東へ折り返して検地が行われている。井尾喜ノ浜東ノハシは地籍図で海岸線に位置する「伊尾木浜」⁽²⁾、あるいは丘陵地の麓に位置する「伊尾木東端」が該当すると考えられる。この日地検帳に記載されているホノギは井尾喜ノ浜東ノハシと折り返し地点にあたるエヒスノ西のみで、エヒスノ西は地籍図の小字と一致しない。そこで検地を始めた井尾喜ノ浜東ノハシから地検帳に記載されている面積を参考にして地籍図から追ってみると「伊尾木東端」の場合では「中村」、一方「伊尾木浜」の場合「沖代」に推定される。この日検地した区域の地目別面積は水田のほとんどが下田で12反7代4分、畠地は下・下々・山畠、下山畠で12反32代5分、荒地は6反34代4分⁽³⁾、全体の1/2を占める屋敷は下・下々屋敷で32反47代1分⁽⁴⁾を数える。船番匠の記載がみられ、なかでも水主の記載がみられる屋敷が8ヶ所認められる。

②3月12日

この日から検地は平地から丘陵地へ場所を移してハセヲリから西ノ内まで検地を行っている。ハセヲリは「走り下り」に比定でき、丘陵地の南部中央に位置する。井尾喜古城は地籍図の小字で「古城」に該当し地目別の面積は屋敷が下・下々屋敷で2反30代、水田は下田で24代、畠地は下・山畠で22代4分、荒地は31代5分である。検地は井尾喜古城を終えると上・中屋敷の記載がみられる□治ヤシキ⁽⁵⁾、シヤウシ屋敷、ハマフリノ上を検地しているが地籍図に一致する小字は認められない。ウチハラは「内原」で八幡の記載があり現在も地籍図と同じ場所に伊尾木神社が存在する。検地は次に丘陵地南東部へ進み、西側に突出する丘陵のイ□ノハナ⁽⁶⁾、イ□ノハナの南に隣接する西ノ内を検地してこの日を終えている。西ノ内はイ□ノハナから「コ」の字状にのびる丘陵に囲まれた谷地形に形成された集落の入り口にあたる。

③3月13日

前日に続いてニシノウチから始まり、谷の奥部まで進み、□□□□□キ、ノキノ下を検地すると丘陵地中央部に移動してチウシヤウヤシキ、南カウチ、宮ノ坂まで作業を行っている。□□□□□キ、ノキノ下は地籍図に一致する小字は認められないが、ニシノウチとともに谷部の集落を形成していたものと考えられ、地籍図の小字で「瀧ノ上」、⁽⁷⁾「瀧雲」に含まれると推測される。谷部のニシノウチ、□□□□□キ、ノキノ下の各地目別の面積はニシノウチの前日検地分を合計すると、屋敷が上屋敷から下屋敷までみられ9反4分、13ヶ所ある屋敷のうち10ヶ所がニシノウチに集中しているのが特徴で、畠地は下・山畠、下山畠、切畑で48代5分、水田は上田から下々田で7反2代、ニシノウチには水田はほぼみられずノキノ下は8ヶ所で等級上位である上田がみられる。次に丘陵地中央部に位置するチウシヤウヤシキは「中将」に比定できるが、この後検地している南カウチ、宮ノ坂は地籍図の

小字と一致しない。チウシヤウヤシキは地検帳での面積と地籍図での面積が一致しないが、チウシヤウヤシキ、南カウチ、宮ノ坂の地検帳に記載されている面積の合計と地籍図の「中将」の面積はほぼ一致することから、地籍図の段階では「中将」内に位置していたのではないかと考えられる。この区域では屋敷は認められず水田と畠地が全体を占めており、水田はほとんどが中・下田で9反13代2分、畠地は下・下々畠で6反11代3分、荒地もみられるが22代4分と少ない。

④3月14日

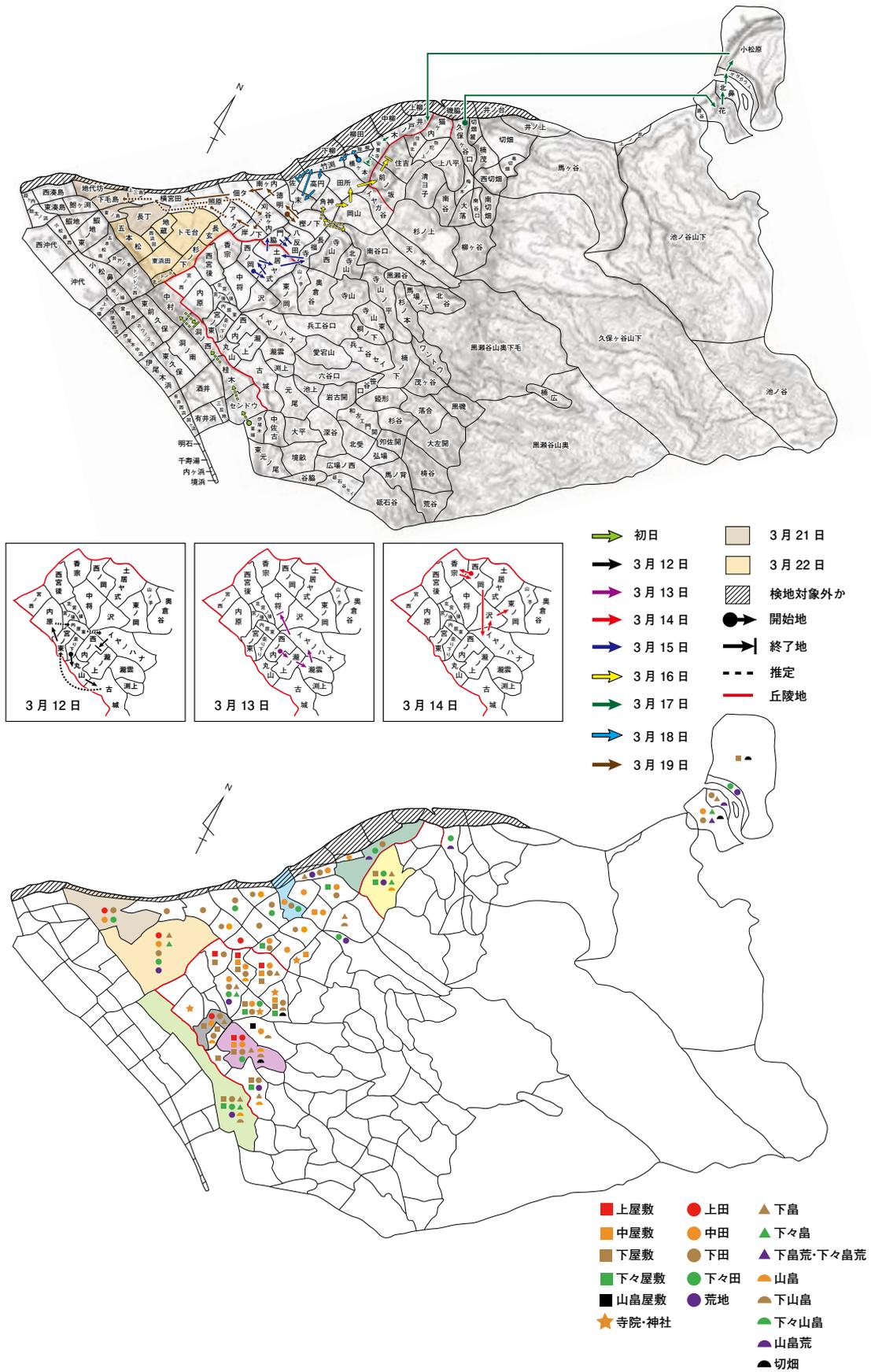
丘陵地北西部に位置する西ノ岡から□リワ東ノ依まで実施している。カウゾウは「香宗」、サワ西ノ依は「沢」に比定できるが、その他は比定できない場所が多い。西ノ岡は水田が3反44代4分で中田が多くみられ、畠地はなく屋敷は4反33代で等級上位の上・中屋敷が多くを占めている。隣接するカウゾウも畠地はみられず、水田は下田が1反8代、屋敷は上・下屋敷で2反39代3分である。この後検地は丘陵地東部の□ヤノハナ⁽⁷⁾、北クホ、サワ西ノ依を検地している。この区域の地目は、ほぼ水田で中田から下々田までみられ、合計15反11代2分である。次にウチハラノ岡、ウチハラを検地している。この区域はサワ西ノ依に隣接し、地籍図の小字で「東ノ岡」内に位置していたと考えられる。地目別面積をみると水田は下田が4代、畠は下山畠、切畑で4代4分と少なく、ほぼ全体を占める屋敷は下々屋敷が1ヶ所みられるが、その他は中・下屋敷で合計9反16代5分である。この場所は現在でも住宅地となっている。この日検地では東鏡寺寺中、多門院寺中の記載があり、地目はともに下々屋敷である。東鏡寺はサワ西ノ依内に、多門院はウチハラノ岡内にあつたのではないかと考えられる。

⑤3月15日

前日検地した西ノ岡から始まり丘陵地北部を中心に東有井土ゐヤシキ四方土禰三方ホリ、タンホン坊ヤシキ、チヤウフクシ、トクラクを検地し丘陵地での作業をすべて終わると平地へ場所を移し、丘陵地の北裾部に位置するカトワキから丘陵地の裾部に沿ってセンタノ木まで行っている。東有井土ゐヤシキ四方土禰三方ホリは「土居ヤ式」、チヤウフクシは「長福寺」に比定でき、東有井土ゐヤシキ四方土禰三方ホリは上屋敷、チヤウフクシは寺中の記載がある中屋敷でホノギと地籍図の小字でも確認ができる。タンホン坊ヤシキ、トクラクに比定できる小字はないが、トクラクは地検帳に記載されている順路をみると、地籍図の小字と一致するチヤウフクシからカトワキに進むまでの間で検地されている。このことから地籍図の小字で「土居ヤ式」に含まれる可能性があると考えられる。この日の丘陵地の各地目別面積は屋敷が上・中・下屋敷で15反4代1分、畠地は下・山畠で1反6代、水田は下田が1ヶ所だけみられるが、その他は中田で10反29代である。なかでも17ヶ所ある屋敷のうち9ヶ所が中屋敷で西ノ岡にみられ、東有井土ゐヤシキ四方土禰三方ホリ、カウゾウとともに丘陵地北部に等級上位の屋敷が集中している。水田は東有井土ゐヤシキ四方土禰三方ホリ、西ノ岡にはみられず、トクラクだけに認められる。次に丘陵地の北裾部に位置するカトワキは「門脇」、ハツタンタ道ノ西、ハツタンタ道ノヒカシは「八反田」に比定できるが、センタノ木は地籍図に一致する小字はない。裾部から平坦地が続くこの周辺の地目はほぼ水田で合計20反18代3分、下田の記載もみられるが中田が16反18代と多くを占めており、耕作に適した良好な土地だったことが分かる。

⑥3月16日

この日は谷口ヤシキから始まり宮タノ岡まで実施している。検地は丘陵地北東部の付け根から北へのびる山裾に沿って北上している。谷口ヤシキから宮タノ岡の手前まで検地されているこの範囲には屋敷は3ヶ所しかみられない。ほとんどが水田で中田は7ヶ所、下田が11ヶ所、下々田が1ヶ所



第30図 検地実施日復元図・地検帳地目内訳図

1.『長宗我部地検帳』からみた伊尾木村

の合計30反39代4分、畠地は下・下山畠が丘陵地の岡ヤマとその裾部と考えられるハヘノシタで見られ35代5分、荒地は1反35代1分である。カシノ下は「櫛ノ下」、岡ヤマは「岡山」、タトコロは「田所」に比定できる。この日は小字と一致する場所が少ないが、宮タノ岡は地籍図の「前ノ坂」、「住吉」の周辺一帯は現在「宮田岡」の地名で呼ばれていることから、この区域である可能性が考えられる。宮タノ岡では水田は下々田が22代2分と少なく、屋敷は下・下々屋敷で9反11代4分、畠地は下・下々・山畠で3反48代2分、これに対して荒地も合計3反12代4分と多くみられる。

⑦3月17日

この日はクホノ谷から伊尾木川に沿って北上し、伊尾木村の北端にあたる小松原を検地した後、宮タノ岡の西に隣接する□トノキから再開し、伊尾木川に沿って南下しながらトメウテン本五反地まで作業を行っている。クホノ谷は「久保ヶ谷口」に該当すると考えられ、山と山に挟まれた谷地形である。この谷部は山畠荒地がわずかにみられるが、その他は水田が占めており等級は低く下々田である。クホノ谷を過ぎると北東から南西に向けて流れる伊尾木川と北へのびる山裾が合流し、奥に向かって谷地形を形成している。伊尾木川から北東へ向けて蛇行しながらのびる支流のアカ松川の南岸にはアカ松、北岸には小松原が位置している。南岸にあたるアカ松は地籍図の小字で「花」にあたる場所にアカ松村が存在していたという地元の方の伝承による証言もあり、比定することができると考えられる。このことからアカ松から川を渡る前に検地している小川ノ谷は「北鼻」、アカ松川ノ北は「ヤタガライ」に比定することができる。伊尾木村北端にあたる小松原、アカ松周辺の地目をみると下屋敷が1ヶ所小松原に認められるのみでアカ松、小川ノ谷、アカ松川ノ北では屋敷は認められない。水田は中田が1ヶ所みられるがその他はほぼ下田で10反22代2分、畠地は下・下々畠、切畑が3反27代でそのうち3反10代が切畑、荒地は1反29代みられる。次に検地が再開される□トノキは「井戸ノ木」に該当すると考えられるがトメウテン本五反地は地籍図に一致する小字が見当たらない。伊尾木川に沿って位置するこの区域の地目別の面積は□トノキで山畠荒地が1ヶ所認められるのみで、屋敷の記載は全くみられず、水田は下・下々田が合計32反33代を数える水田地である。

⑧3月18日

前日検地したトメウテン本五反地から始まり、この日も川沿いに南下しながらカウエ□、竹フ□、ホリノウチ、ナカムラまで実施している。カウエ□は「高円」、竹フ□は「竹測」に比定できるのみで他は小字と一致しないが、地籍図の小字で「佐ノ末」は「竹測」と次の19日の検地開始地の「徳明」に挟まれる場所に位置しているがホノギの記載が認められない。地検帳で竹フ□の次に検地をしているホリノウチ、ナカムラの記載されている面積を合計すると地籍図の「佐ノ末」とほぼ一致する。このことからホリノウチ、ナカムラは「佐ノ末」内にあった可能性が推測される。この区域の検地面積合計は42反33代3分である。地目では屋敷はみられず、竹フ□で畠地が15代2分、荒地が19代2分認められるのみで他は水田である。水田はほぼ中・下田でなかでも中田が28反38代2分と多くみられるのが特徴で、下々田の記載もみられるが1ヶ所のみで良質な水田域がひろがっていたことが窺える。

⑨3月19日

トクメイからシモ島まで実施している。トクメイは「徳明」、南カウチは「南ヶ内」、アイタは「アイダ」に比定でき、□□タ川成は「佃タ」、□宮タ西依は「横宮田」、□ノシタは「岸ノ下」に該当すると考えられる。この日は検地を始めてから最も多い121反36代5分を実施している。この区域もほとんどが水田で□ノシタで上田、南カウチとアイタとカキタ本壺反十代地で中田がみられるが、その他は

下田が8割以上を占めている。

⑩3月21日⁽⁸⁾

19日に実施したシモ島から□ユクチまで検地している。地籍図の小字で「地蔵」,「西浜田」から伊尾木川に向かってひろがる水田域と推測される。この日はチ□□坊が「地代坊」に該当すると考えられるが,その他は地籍図の小字と一致するホノギがなく比定は困難である。地目別の面積は屋敷・畠地は全く認められず,水田が26反39代3分である。上田から下々田まで認められ,なかでも中田が占める割合が多いのが特徴で,13反22代1分,全体の1/2を占めている。

⑪3月22日

□□窪から南五本松まで実施している。杉ノシタは「杉ノ下」,ハマタ・浜タは「東・西浜田」,地蔵ノモトは「地蔵」に比定でき,検地を始めている□□窪はシモ窪と考えられるが小字との比定はできない。杉ノシタは丘陵地の西裾部に位置しており,今回発掘調査したⅡ区にあたる場所で,下田が36代と記載されているが地籍図での面積と一致しない。地検帳では次にハマタに進んでいることから杉ノシタの前に検地を行っている大ツミ,□□チウケンは「杉ノ下」に含まれていた可能性が考えられる。この日,検地した区域も水田域で合計71反30代4分,上・中田が多く認められ全体の1/2以上を占めており,その他はほぼ下田である。

(3)考察

以上のことから次のことが明らかになった。

- ・屋敷は多くが丘陵地上に分布し,地検帳記載の西ノ内,西ノ岡,ウチハラ,宮タノ岡を中心とする屋敷群がみられ,等級上位である上・中屋敷は西ノ内,西ノ岡,ウチハラで多くみられる。現在の地籍図で西ノ内は「西ノ内」,西ノ岡は「西ノ岡」,ウチハラは「東ノ岡」,宮タノ岡は「前ノ坂」・「住吉」の地点に所在していた。
- ・水主の屋敷群が海岸線で現在の地籍図の「中村」の地点で多くみられる。
- ・水田は低地部に多く分布し,等級上位である上・中田は丘陵地裾部に沿って多くみられる。
- ・畠地は丘陵地に多くみられる。

註

- (1) 初日は日付の記載がない。
- (2) 地籍図の字名は「 」で記した。以下,同じ。
- (3) 本文中の荒地には下畠荒・荒などの他に屋敷・田・畠などの内訳として記載されている荒・アレを含んでいる。
- (4) 欠字部分の面積は含まれない。
- (5) 欠字は□で表した。以下,同じ。
- (6) イヤノハナと考えられる。以下,同じ。
- (7) イヤノハナと考えられる。
- (8) 3月20日は検地を実施していない。

2.まとめ

調査では古代末～近代まで断続的に遺構・遺物を検出した。小規模な面積の発掘調査ではあるが、調査例が少ない地域であり、考古学的な資料が得られたことは当地域の歴史を復元していくうえで重要である。

12～13世紀段階では同安窯の青磁、瓦器の椀がⅠ区で出土している。調査区北側の大谷川には注意を払っておきたい。また、Ⅱ区で検出した石敷き遺構(SX3)の埋土から採取した炭化米の放射性炭素年代測定を行った結果では13世紀後半～末の年代を得ている。SX3の埋土からは鍛造剥片、SX3_P1の埋土からは粒状滓・鍛造剥片を採取したことから、SX3は鍛冶関連の遺構と考えられる。14～15世紀段階はⅠ・Ⅱ区ともに遺物が出土している。確実な出土遺物がない16世紀段階は『長宗我部地検帳』と地籍図の小字をもとにした前節での復元案が参考となる。それによるとⅠ区は「長玄」、Ⅱ区は「杉ノ下」に該当する。地検帳段階には丘陵下の平野部に屋敷地はほとんどみられず、水田や畠で占められている。水田に伴う遺構は検出していないが、出土遺物がない状況は『長宗我部地検帳』の記載と整合的である。17世紀段階ではⅡ区において屋敷地を構成すると推測される井戸跡と土坑群を検出した。井戸跡と土坑群の間には遺構の希薄な空間を挟む。土坑群の周辺でピットを検出しているが上屋構造の復元には至っていない。これら土坑群(SK9～11)の並びの方向、ピット列(P55～57・65)の並びの方向は概ね現在の道路・畦の方向に一致しており、遅くとも17世紀以降の地割りを踏襲している。長宗我部氏が支配する時代から山内氏が支配する時代になり、土地利用の転換がみられ中世的な景観から近世的な景観へ変化したと考えられる。

以上、調査区内の遺構・遺物の消長に『長宗我部地検帳』の記載を合わせて述べてきた。12～13世紀段階はⅠ区を中心に分布がみられ、14～15世紀段階にはⅠ・Ⅱ区に分布がひろがる。『長宗我部地検帳』の記載から16世紀は生産域として利用され、17世紀段階にはⅡ区に屋敷地が形成される。第Ⅱ章でも述べたように安定した平野部が拡大されていくなかで平野部へ進出していった様子を遺跡分布から窺うことができるが、安芸市域の集落遺跡は安芸平野を囲む丘陵上部にみられる傾向が強い。このような特徴から調査区の上段の丘陵部に集落が営まれていたと推測される。岡遺跡として周知されている丘陵上では遺物が表採され、集落遺跡の存在が示唆される。また、『長宗我部地検帳』でも屋敷地が集中していることが記されている。現在でも住宅地となっており、集落の立地は継承されている。そのような傾向のなかで丘陵下の平野部において屋敷地が検出された17世紀前半は画期である。旧街道沿いと丘陵上に住宅地が集中する現在の風景は近世以降の村落景観を濃厚に残していると考えられる。

ピット計測表

ピット計測表

凡例

長軸・短軸・深さの単位はcmである。

底面標高の単位はmである。

1cm以上のものを1点とカウントした。

1cm未満のものしか出土していないものは1点とした。

()内は検出長を示している。

遺物点数には実測図掲載遺物を含む。

遺構名	調査区	検出面	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高	出土遺物	備考
P1	I区	上面	楕円形	25	22	22	8.63	土師質土器片 3点	
P2	〃	〃	〃	27	21	20	8.61	土師質土器片 3点	
P3	〃	〃	〃	25	20	10	8.79	出土遺物なし	
P4	〃	〃	〃	19	16	10	8.72	出土遺物なし	
P5	〃	〃	〃	27	23	23	8.58	土師質土器片 4点	
P6	〃	〃	〃	33	26	19	8.62	土師質土器片 4点・土師質土器煮沸具片 1点・砥石 1点	
P7	〃	〃	円形	20	-	21	8.63	土師質土器片 3点	
P8	〃	〃	〃	22	-	18	8.62	出土遺物なし	
P9	〃	〃	〃	30	-	28	8.52	出土遺物なし	
P10	〃	〃	楕円形	36	33	39	8.43	土師質土器片 6点	
P11	〃	〃	円形	30	-	23	8.64	青磁片 3点 土師質土器片 4点	
P12	〃	〃	楕円形	30	24	15	8.67	土師質土器片 2点	
P13	〃	〃	〃	51	35	30	8.53	青磁片 1点 土師質土器片 14点	P30と同位置
P14	〃	〃	円形	20	-	23	8.59	土師質土器片 1点 水晶片 1点	
P15	〃	〃	〃	25	-	21	8.60	土師質土器片 1点	
P16	〃	〃	楕円形	31	27	38	8.43	土師質土器片 4点 瓦器片 1点	
P17	〃	〃	〃	25	21	24	8.52	土師質土器片 2点 瓦器片 1点	
P18	〃	〃	円形	13	-	20	8.62	土師質土器片 1点	
P19	〃	〃	〃	27	-	29	8.47	土師質土器片 6点 鉄滓か 1点	
P20	〃	〃	楕円形	37	35	8	8.59	土師質土器片 3点 土師質土器煮沸具片 1点	
P21	〃	〃	円形	25	-	27	8.51	陶器片 1点 土師質土器片 2点	
P22	〃	〃	楕円形	28	19	9	8.75	出土遺物なし	
P23	〃	〃	〃	34	23	15	8.51	土師質土器片 1点 瓦器片 1点	
P24	〃	〃	〃	43	26	8	8.72	土師質土器片 1点 土師質土器煮沸具片 1点	
P25	〃	〃	〃	31	(20)	8	8.73	出土遺物なし	

ピット計測表

遺構名	調査区	検出面	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高	出土遺物	備考
P26	I 区	上面	円形	18	-	10	8.56	土師質土器片 1 点	
P27	〃	〃	不整形	17	15	23	8.45	出土遺物なし	
P28	〃	下面	円形	23	-	-	-	出土遺物なし	
P29	〃	〃	〃	26	-	46	8.35	土師質土器片 3 点	
P30	-	-	-	-	-	-	-	-	P13 と同位置
P31	I 区	下面	楕円形	30	(22)	11	8.48	出土遺物なし	
P32	〃	〃	円形	15	-	23	8.36	土師質土器片 1 点	
P33	〃	〃	〃	20	-	23	8.36	出土遺物なし	
P34	〃	〃	〃	25	-	21	8.39	土師質土器片 2 点	
P35	〃	〃	〃	18	-	9	8.51	出土遺物なし	
P36	〃	〃	楕円形	27	(8)	23	8.36	出土遺物なし	
P37	〃	〃	円形	19	-	15	8.45	土師質土器片 1 点	
P38	II 区	上面	〃	28	-	15	8.24	瓦質土器片 1 点	
P39	〃	〃	楕円形	32	26	15	8.25	陶器片 1 点 土師質土器片 1 点	
P40	〃	〃	〃	38	34	11	8.28	土師質土器片 1 点	
P41	〃	〃	円形	25	-	11	8.22	土師質土器片 4 点	
P42	〃	〃	楕円形	35	29	16	8.32	土師器片 1 点	
P43	〃	〃	円形	32	-	17	8.30	出土遺物なし	
P44	〃	〃	楕円形	28	25	17	8.31	土師質土器片 2 点	
P45	〃	〃	円形	25	-	30	8.20	土師質土器片 1 点	
P46	〃	〃	楕円形	33	24	14	8.32	土師質土器片 2 点	
P47	〃	下面	円形	35	-	8	8.17	出土遺物なし	
P48	〃	〃	〃	22	-	13	8.12	出土遺物なし	
P49	〃	〃	楕円形	26	21	11	8.13	土師質土器煮沸具片 1 点	
P50	〃	〃	円形	27	-	11	8.03	出土遺物なし	

遺構名	調査区	検出面	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高	出土遺物	備考
P51	Ⅱ区	下面	円形	24	-	13	8.04	出土遺物なし	
P52	〃	〃	-	-	-	-	-	出土遺物なし	
P53	〃	上面	楕円形	34	31	20	8.16	土師質土器片 19点 瓦質土器片 1点	
P54	〃	〃	円形	38	-	22	8.13	土師質土器片 6点	
P55	〃	〃	〃	33	-	19	8.16	土師質土器片 4点 瓦質土器片 1点	
P56	〃	〃	楕円形	30	27	12	8.22	土師質土器片 5点 スラグ 1点	
P57	〃	〃	円形	26	-	12	8.21	土師質土器片 5点	
P58	〃	〃	〃	21	-	10	8.22	土師質土器片 1点	
P59	〃	〃	〃	18	-	10	8.23	土師質土器片 4点	
P60	〃	〃	楕円形	33	29	24	8.09	土師質土器片 3点	
P61	〃	〃	〃	29	23	9	8.25	出土遺物なし	
P62	〃	〃	〃	46	19	33	8.01	出土遺物なし	
P63	〃	〃	円形	19	-	9	8.24	土師質土器片 1点	
P64	〃	〃	〃	25	-	7	8.25	土師質土器片 3点	P120 と同位置
P65	〃	〃	〃	25	-	8	8.25	土師質土器片 1点	
P66	〃	〃	〃	22	-	11	8.26	土師質土器片 1点	
P67	〃	〃	〃	15	-	8	8.28	土師質土器片 1点	
P68	〃	〃	〃	29	-	26	8.09	白磁片 1点 土師質土器片 1点	
P69	〃	〃	〃	20	-	31	8.07	土師質土器片 3点	P101 と同位置
P70	〃	〃	〃	22	-	17	8.19	土師質土器片 2点	
P71	〃	〃	〃	20	-	12	8.26	出土遺物なし	
P72	〃	〃	楕円形	22	19	17	8.21	土師質土器片 1点	
P73	〃	〃	〃	26	24	15	8.22	土師質土器片 2点	
P74	〃	〃	円形	18	-	17	8.18	土師質土器片 5点	
P75	〃	〃	楕円形	24	21	12	8.22	土師質土器片 2点	

ピット計測表

遺構名	調査区	検出面	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高	出土遺物	備考
P76	Ⅱ区	上面	楕円形	30	24	6	8.30	土師質土器片 6点 瓦質土器片 2点	
P77	〃	〃	円形	25	-	11	8.25	土師質土器片 2点	P99と同位置
P78	〃	〃	楕円形	26	22	19	8.17	土師質土器片 2点	
P79	〃	〃	円形	31	-	9	8.26	土師質土器片 4点	
P80	〃	〃	楕円形	23	21	30	8.08	出土遺物なし	
P81	〃	〃	〃	22	20	18	8.18	土師質土器片 3点 土師器片 1点	
P82	〃	〃	円形	21	-	9	8.25	土師質土器片 2点	
P83	〃	〃	楕円形	24	21	19	8.16	土師質土器片 1点	
P84	-	-	-	-	-	-	-	-	シミ
P85	Ⅱ区	上面	楕円形	25	20	5	8.34	-	
P86	-	-	-	-	-	-	-	土師質土器片 1点 瓦質土器片 1点	シミ
P87	Ⅱ区	上面	円形	20	-	11	8.26	土師質土器片 2点	
P88	〃	〃	楕円形	20	18	6	8.30	土師質土器片 2点	
P89	〃	〃	円形	18	-	17	8.21	土師質土器片 1点 土錘片 1点	
P90	〃	〃	〃	22	-	9	8.28	土師質土器片 1点	
P91	-	-	-	-	-	-	-	-	シミ
P92	-	-	-	-	-	-	-	-	シミ
P93	Ⅱ区	上面	楕円形	(20)	17	11	8.20	土師質土器片 1点	
P94	〃	〃	〃	20	14	12	8.21	土師質土器片 1点	
P95	〃	下面	〃	32	24	20	7.94	土師質土器片 8点	
P96	〃	〃	〃	28	24	16	8.03	出土遺物なし	
P97	〃	〃	円形	22	-	15	7.96	土師質土器片 1点	
P98	〃	〃	〃	25	-	7	8.03	土師質土器片 4点	
P99	〃	〃	楕円形	23	20	9	8.02	土師質土器片 2点 土師質土器煮沸具片 1点	P77と同位置
P100	〃	〃	円形	25	-	11	8.02	出土遺物なし	

遺構名	調査区	検出面	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高	出土遺物	備考
P101	Ⅱ区	下面	円形	16	-	5	8.02	土師質土器片 1点	P69 と同位置
P102	〃	〃	〃	19	-	11	7.95	土師質土器片 1点	
P103	〃	〃	楕円形	25	18	8	7.99	出土遺物なし	
P104	〃	〃	〃	22	19	6	8.03	土師質土器片 4点	
P105	〃	〃	〃	28	22	10	8.00	出土遺物なし	
P106	〃	〃	円形	28	-	70	7.38	瓦質土器片 1点 土師質土器片 22点	
P107	〃	〃	〃	17	-	13	7.98	土師質土器片 6点	
P108	〃	〃	楕円形	21	19	25	7.86	土師質土器片 12点	
P109	〃	〃	〃	26	22	9	7.99	土師質土器片 3点	
P110	〃	〃	円形	26	-	6	8.04	出土遺物なし	
P111	〃	〃	楕円形	23	21	10	8.00	国産陶器片 1点	
P112	〃	〃	〃	26	20	18	7.94	土師質土器片 1点	
P113	〃	〃	〃	26	23	17	7.93	出土遺物なし	
P114	〃	〃	円形	22	-	6	8.03	出土遺物なし	
P115	〃	〃	〃	24	-	20	7.80	土師質土器片 2点	
P116	〃	〃	〃	20	-	7	8.02	出土遺物なし	
P117	〃	〃	〃	20	-	12	8.01	土師質土器片 1点	
P118	〃	〃	楕円形	24	20	21	7.93	土師質土器片 5点	
P119	〃	〃	円形	24	-	32	7.85	土師質土器片 6点 瓦質土器片 1点	
P120	〃	〃	〃	24	-	39	7.75	土師質土器片 22点・土師質土器煮沸具片 2点・粘土塊 1点	P64 と同位置
P121	〃	〃	〃	18	-	9	7.94	土師質土器片 2点	
P122	〃	〃	〃	21	-	9	8.04	出土遺物なし	
P123	〃	〃	楕円形	25	22	29	7.86	土師質土器片 2点	
P124	〃	〃	円形	21	-	5	8.11	出土遺物なし	
P125	〃	〃	〃	16	-	4	8.05	土師質土器片 1点	

ピット計測表

遺構名	調査区	検出面	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高	出土遺物	備考
P126	Ⅱ区	下面	円形	30	-	31	7.84	土師質土器片 7点 瓦質土器片 1点	
P127	〃	〃	〃	21	-	17	7.98	土師質土器片 6点	
P128	〃	〃	〃	23	-	9	8.06	土師質土器片 3点 粘土塊 1点	
P129	〃	〃	〃	15	-	3	8.14	土師質土器片 1点	
P130	〃	〃	〃	18	-	6	8.05	土師質土器片 3点	
P131	〃	上面	〃	22	-	15	8.21	出土遺物なし	

遺物觀察表

遺物観察表

凡例

法量：単位はcm, gである。

()内は復元値

色調：記号を併記しているものは標準土色帖を使用した。

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第8図	1	I区	SK1	土師器	皿	-	(24)	-	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	手づくね皿。口縁部, ヨコナデ。外面, 指頭圧痕。やや磨耗。
第9図	2	〃	P2	土師質 土器	椀	-	(28)	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	灰黄色 2.5Y7/2	外面, ロクロ目顕著。
第10図	4	〃	P13	〃	杯	-	(15)	-	橙色 5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。口唇部, 丸くおさめる。
〃	5	〃	〃	青磁	稜花 皿	11.4	(15)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	オリーブ灰色の釉薬。外面, 文様か。
〃	6	〃	P14	土師質 土器	杯	-	(12)	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ。口唇部, 丸くおさめる。
〃	7	〃	P16	〃	〃	-	(11)	-	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/3	回転ナデ。回転糸切りか。被熱変色。
〃	8	〃	〃	瓦器	椀	-	(16)	-	灰色 10Y6/1	灰色 10Y4/1	口縁部外面, ヨコナデ。やや磨耗。
〃	9	〃	P21	陶器	播鉢	27.0	(7.4)	-	灰褐色	橙色	備前焼。口縁部, 上方へ拡張。内外面, 回転ナデ。内面, 5 条以上1単位のスリメ。
第11図	10	〃	P29	土師質 土器	杯	13.1	3.7	6.4	橙色 2.5YR6/6	橙色 2.5YR6/6	回転ナデ。内底面, 工具ナデ。回転糸切り。残存率, 良好。 やや磨耗。
〃	11	〃	P32	〃	〃	-	(16)	9.4	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい黄橙色 10YR6/3	回転ナデ。内底面, ロクロ目。回転糸切り。やや磨耗。
〃	12	〃	SX1	〃	皿	-	(19)	-	にぶい黄橙色 10YR6/4	にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁部, 折り曲げる。回転ナデ。
〃	13	〃	〃	瓦器	椀	-	(23)	-	灰色 N6/0	灰色 N6/0	口縁部, ヨコナデ。外面, 弱い指頭圧痕。内面, ミガキ。 やや磨耗。
〃	14	〃	〃	須恵器	片口 鉢	-	(48)	-	灰色 N5/0	灰色 N6/0	回転ナデ。口唇部, 尖らせる。口縁部下端, 突帯状。小さ な注口。
〃	15	〃	〃	土師質 土器	鍋	20.4	(3.3)	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	口唇部, 面取り。回転ナデ。煤, 付着。
〃	16	〃	〃	〃	羽釜	31.4	(3.0)	-	黄灰色 2.5Y4/1	黄灰色 2.5Y4/1	口縁部, 内湾。断面長方形の鑊を付す。内面, ハケメ。外面, ナデ。被熱変色。
第12図	17	〃	SX2	青磁	碗	-	(28)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	残存部位には文様は無い。
第13図	18	〃	包含層	土師質 土器	皿	5.6	1.3	3.9	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	回転ナデ。回転糸切り。
〃	19	〃	〃	〃	〃	7.6	1.9	5.3	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	柱状高台。磨耗。回転ナデ。内面, ロクロ目。切り離し, 不明。
〃	20	〃	〃	〃	〃	7.5	1.6	4.6	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	磨耗。回転ナデ。切り離し, 不明。
〃	21	〃	〃	〃	〃	8.0	1.8	5.2	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	磨耗。回転ナデ。切り離し, 不明。
〃	22	〃	試掘トレンチ T5	〃	〃	8.8	1.7	5.0	橙色 5YR7/8	橙色 5YR7/6	口縁部, 外反。磨耗。回転ナデ。切り離し, 不明。
〃	23	〃	包含層	〃	〃	-	(15)	-	橙色 7.5YR7/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	磨耗。調整等, 不明。手づくね皿か。
〃	24	〃	〃	〃	杯	-	(13)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。
〃	25	〃	〃	〃	〃	-	(13)	-	橙色 2.5YR6/6	橙色 2.5YR6/6	口縁部, わずかに外反。回転ナデ。外面, 弱いロクロ目。
〃	26	〃	〃	〃	〃	-	(18)	-	灰白色 10YR8/2	灰白色 2.5Y8/2	口縁部, 外反。回転ナデ。口縁部外面, 指頭圧痕。

遺物観察表

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第13図	27	I区	包含層	土師質 土器	杯	9.0	(2.1)	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ。指頭圧痕。
〃	28	〃	〃	〃	〃	13.1	(1.8)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。タール、付着。灯明皿。
〃	29	〃	〃	〃	〃	14.8	(1.5)	-	橙色 5YR6/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。磨耗。
〃	30	〃	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	橙色 2.5YR6/6	橙色 2.5YR6/6	回転ナデ。磨耗。
〃	31	〃	〃	〃	〃	-	(2.4)	-	橙色 5YR6/8	橙色 5YR6/8	回転ナデ。外面、ロクロ目。やや磨耗。
〃	32	〃	〃	〃	〃	-	(2.3)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。外面、ロクロ目。磨耗。
〃	33	〃	〃	〃	〃	-	(3.1)	-	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	口縁部、外反。手づくねか。
〃	34	〃	〃	〃	〃	-	(2.9)	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ。磨耗。
〃	35	〃	〃	〃	〃	-	(2.3)	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	外面、指頭圧痕。内面、ミガキ。瓦器碗か。
〃	36	〃	〃	〃	〃	-	(1.1)	4.4	橙色 7.5YR7/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。切り離し、不明。磨耗。
〃	37	〃	〃	〃	〃	-	(1.6)	-	橙色 5YR6/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。内面、ロクロ目。切り離し、不明。磨耗。
〃	38	〃	〃	〃	〃	-	(1.4)	-	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。回転糸切り。外底面、キズ有り。磨耗。
〃	39	〃	〃	〃	〃	-	(0.9)	-	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	回転ナデ。切り離し、不明。磨耗。
〃	40	〃	〃	〃	〃	-	(1.3)	-	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。外底面、ミガキ。磨耗。
〃	41	〃	〃	〃	〃	-	(1.4)	-	橙色 2.5YR7/8	橙色 7.5YR7/6	回転ナデ。内底面、ロクロ目。切り離し、不明。磨耗。
〃	42	〃	試掘トレンチ T5	〃	〃	-	(1.1)	-	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄色 2.5Y8/3	内底面、凹む。回転ナデ。回転糸切り。外底面、箕子状圧痕。
〃	43	〃	包含層	〃	〃	-	(1.5)	-	浅黄橙色 7.5YR8/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。回転糸切りか。磨耗。
〃	44	〃	TR1	〃	〃	-	(1.9)	-	灰黄褐色 10YR6/2	褐灰色 10YR6/1	回転ナデ。外底面、ナデ。磨耗。
〃	45	〃	包含層	〃	〃	-	(1.4)	-	橙色 2.5YR6/6	橙色 2.5YR6/6	回転ナデ。内底面、ロクロ目。回転糸切り。磨耗。
〃	46	〃	〃	〃	〃	-	(0.9)	6.8	浅黄橙色 10YR8/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ。外底面、ナデ。
〃	47	〃	〃	〃	〃	-	(1.1)	6.2	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。内底面、ロクロ目。切り離し、不明。磨耗。
〃	48	〃	〃	〃	〃	-	(1.8)	5.8	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。内底面、ロクロ目。切り離し、不明、ナデか。磨耗。
〃	49	〃	〃	〃	〃	-	(1.4)	8.0	灰白色 10YR8/2	灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ。切り離し、不明。磨耗。
〃	50	〃	〃	〃	〃	-	(1.9)	6.3	橙色 2.5YR6/6	橙色 5YR6/6	回転ナデ。内底面、ロクロ目。切り離し、不明。磨耗。
〃	51	〃	〃	〃	〃	-	(1.1)	6.9	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	回転ナデ。外底面、ナデ。

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第13図	52	I区	包含層	土師質 土器	杯	-	(1.1)	7.2	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデか。切り離し、不明。磨耗。
〃	53	〃	〃	〃	〃	-	(1.2)	7.7	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。外底面、ナデ。やや磨耗。
〃	54	〃	〃	〃	〃	-	(1.3)	7.7	浅黄橙色 7.5YR8/6	浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ。内底面、ロクロ目。切り離し、不明、ナデか。磨耗。
〃	55	〃	〃	〃	〃	-	(1.6)	7.2	橙色 5YR7/8	橙色 5YR7/8	回転ナデか。切り離し、不明。磨耗。
〃	56	〃	試掘トレンチ T5	〃	〃	-	(1.7)	6.7	橙色 7.5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。内面、ロクロ目。切り離し、不明。磨耗。
〃	57	〃	包含層	〃	〃	-	(1.4)	9.1	橙色 5YR7/6	橙色 7YR7/6	回転ナデ。外底面、ナデ。やや磨耗。
〃	58	〃	〃	〃	〃	-	(2.5)	5.8	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。切り離し、不明、ナデか。やや磨耗。
〃	59	〃	〃	〃	〃	-	(0.9)	5.4	にぶい橙色 5YR6/4	橙色 5YR6/6	回転ナデ。回転糸切りか。
〃	60	〃	〃	〃	〃	-	(2.0)	6.9	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。内面、ロクロ目。回転糸切り後、ナデ。
〃	61	〃	〃	〃	〃	-	(1.7)	7.8	にぶい橙色 2.5YR5/4	にぶい橙色 2.5YR5/4	回転ナデ。内外面、ロクロ目。回転糸切り。
〃	62	〃	〃	〃	〃	-	(1.2)	7.3	橙色 2.5YR6/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。内面、ロクロ目。回転糸切り後、ナデ。
〃	63	〃	〃	〃	〃	-	(1.2)	7.7	浅黄橙色 10YR8/4	浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ。回転糸切り。やや磨耗。
〃	64	〃	〃	〃	椀	-	(2.5)	-	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	断面長方形の高台。磨耗。
第14図	65	〃	〃	土師器	皿	8.2	(1.3)	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 7.5YR7/4	手づくね皿。内外面、ナデ。口縁部、煤付着。
〃	66	〃	〃	〃	〃	9.6	(2.3)	-	浅黄橙色 10YR8/4	浅黄橙色 10YR8/3	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。外面、指頭圧痕。
〃	67	〃	〃	〃	〃	12.7	3.1	6.6	浅黄橙色 10YR8/3	にぶい黄橙色 10YR7/4	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。底部、平ら。
〃	68	〃	〃	〃	〃	12.8	(3.4)	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。外面、指頭圧痕。
〃	69	〃	〃	〃	〃	14.6	(2.3)	-	橙色 7.5YR7/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。煤、付着。 やや磨耗。
〃	70	〃	試掘トレンチ T4	〃	〃	-	(2.1)	-	灰白色 10YR8/2	灰白色 7.5YR8/2	手づくね皿。口縁部、強いヨコナデ。外反度、強い。体部、 ナデ。磨耗。
〃	71	〃	包含層	〃	〃	-	(1.5)	-	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	手づくね皿。口縁部、強いヨコナデ。外反度、強い。体部、 ナデ。
〃	72	〃	〃	〃	〃	-	(2.5)	-	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。やや磨耗。
〃	73	〃	〃	〃	〃	-	(1.7)	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。体部、ナデ。
〃	74	〃	〃	〃	〃	-	(2.6)	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。外面、指頭圧痕。
〃	75	〃	試掘トレンチ T4	〃	〃	-	(3.1)	-	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	手づくね皿。口縁部、ヨコナデ。外反度、弱い。外面、指 頭圧痕。
〃	76	〃	包含層	瓦器	椀	-	(1.5)	-	黄灰色 2.5Y4/1	黄灰色 2.5Y4/1	口縁部、ヨコナデ。口唇部、丸くおさめる。やや磨耗。

遺物観察表

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第14図	77	I区	包含層	瓦器	椀	-	(14)	-	にぶい黄橙色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	口縁部, ヨコナデ。口唇部, 丸くおさめる。内面, ミガキ。 やや磨耗。
〃	78	〃	〃	〃	〃	-	(13)	-	灰色 7.5Y4/1	灰色 7.5Y4/1	口縁部, ヨコナデ。口唇部, 丸くおさめる。やや磨耗。
〃	79	〃	〃	〃	〃	-	(06)	-	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	底部, 扁平な高台。炭素の吸着は認められない。やや磨耗。
〃	80	〃	〃	〃	〃	-	(14)	5.0	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	底部, 高台。炭素の吸着は認められない。内面, ミガキか。 やや磨耗。
〃	81	〃	〃	〃	〃	-	(08)	3.6	灰色 N5/0	灰色 N5/0	底部, 高台。内面, 疎らなミガキ。
〃	82	〃	〃	白磁	皿	-	(16)	-	灰白色	灰白色	端反り。灰白色の釉薬。
〃	83	〃	〃	青磁	〃	-	(10)	4.8	オリーブ灰色	オリーブ灰色	見込み, 花文・ジグザグ文。外底面, 露胎。
〃	84	〃	〃	〃	碗	15.1	(3.2)	-	オリーブ黄色	オリーブ黄色	外面, やや粗い櫛目文。内面, 界線・花文。口縁部及び内外面, 文様に沿って釉薬を故意に削り取る。
〃	85	〃	〃	〃	〃	14.2	(3.1)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	外面, 幅広の蓮弁文。
〃	86	〃	〃	〃	〃	-	(3.4)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	外面, 蓮弁文。釉薬, 厚め。
〃	87	〃	試掘トレンチ T4	〃	〃	-	(26)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	内面, 陽刻の花文。
〃	88	〃	包含層	〃	〃	13.4	(3.0)	-	オリーブ黄色	オリーブ黄色	口縁部, わずかに外反。口縁部内面, 2条の界線。
〃	89	〃	〃	〃	〃	11.1	(2.2)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	口縁部, 外反。無文。釉薬, 厚め。
〃	90	〃	〃	磁器	皿	11.0	(1.7)	-	明オリーブ 灰色	明オリーブ 灰色	口禿げ。
〃	91	〃	〃	〃	碗	-	(1.9)	4.8	灰オリーブ色	灰オリーブ色	断面方形の削り出し高台。外底面, 露胎。見込み, 刻印。 枠内に「全」か。
〃	92	〃	〃	須恵器	鉢	27.2	(2.1)	-	灰白色 7.5Y7/1	灰白色 N7/0	東播系捏ね鉢。口唇部, わずかに肥厚させ, 平坦面を成す。 内外面, 回転ナデ。
〃	93	〃	〃	〃	〃	26.7	(4.0)	-	灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y7/1	東播系捏ね鉢。口縁部, 上方へ拡張。口唇部, 平坦面を 成す。内外面, 回転ナデ。
〃	94	〃	〃	土師器	甕か	-	(3.9)	-	橙色 7.5Y6/6	橙色 7.5Y7/6	外面, ハケメか。内面, ナデ。磨耗。搬入品。
〃	95	〃	〃	土師質 土器	羽釜	17.8	(4.7)	-	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 10YR5/3	口唇部, 内傾。口縁部に鏝を付す。体部, 叩き。口縁部・内面, ナデ。煤, 付着。
〃	96	〃	〃	〃	〃	-	(2.7)	-	橙色 7.5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR5/3	口唇部, 内傾。口縁部に鏝を付す。口縁部, ナデ。煤, 付着。 搬入品。
〃	97	〃	〃	〃	〃	-	(2.7)	-	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	口唇部, 内傾。口縁部に鏝を付す。口縁部, ナデ。煤, 付着。
〃	98	〃	〃	〃	〃	-	(3.5)	-	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	口唇部, 内傾。口縁部に鏝を付す。口縁部外面, 沈線。口縁部, ナデ。煤, 付着。
〃	99	〃	TR1	〃	〃	-	(4.2)	-	橙色 5YR7/6	にぶい橙色 5YR6/4	口唇部, 内傾。口縁部に断面三角形の鏝を付す。口縁部, ナデ。
〃	100	〃	試掘トレンチ T5/包含層	〃	羽釜 か	-	(2.8)	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	断面扁平な三角形の鏝を付す。内外面, ナデ。
〃	101	〃	包含層	瓦質 土器	鍋	-	(3.8)	-	灰白色 7.5Y7/1	灰白色 5Y7/1	口頸部の屈曲, 弱い。口唇部, ルーズな面取り。内外面, ナデ。 やや磨耗。

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第17図	104	II区	SK2	磁器	皿	-	(0.9)	-	灰白色	灰白色	内面, 染付。
〃	105	〃	〃	陶器	碗	-	(2.1)	-	黒色	黒色・灰白色	天目茶碗。黒褐色釉。腰部以下, 露胎。
〃	106	〃	〃	〃	〃	-	(3.0)	-	黒褐色	オリーブ黒色	天目茶碗。黒褐色釉。腰部以下, 露胎。
〃	107	〃	SK2・ 包含層	磁器	〃	-	(1.9)	5.5	灰白色	灰白色	高台, 1条の圏線。畳付, 釉はぎ。高台内, 砂付着。
〃	108	〃	SK2	陶器	播鉢	24.0	(6.0)	-	褐灰色	褐灰色	備前焼。口縁端部, つまみ上げ。内面, 9条1単位のスリメ。
第18図	109	〃	SK6	土師質 土器	小皿	6.1	1.3	5.0	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ。切り離し, 不明。磨耗。
〃	110	〃	SK7	〃	杯	-	(1.4)	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ。回転糸切り。磨耗。
〃	111	〃	〃	〃	〃	-	(0.7)	6.0	浅黄橙色 10YR8/3	灰白色 10YR8/2	回転ナデ。回転糸切り。
〃	112	〃	〃	陶器	皿	-	(2.2)	7.0	浅黄色	浅黄色	見込み, 釉はぎ。外面, 釉薬が剥げる。外底面, 付着物有り。
〃	113	〃	SK9	土師質 土器	杯	-	(1.3)	5.7	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ。内面, ロクロ目。切り離し, 不明。やや磨耗。
〃	114	〃	〃	〃	羽釜	16.1	(2.6)	-	黄橙色 7.5YR7/8	明褐色 7.5YR5/6	口縁端部, 外反。端面, 内傾。回転ナデ。煤, 付着。
第19図	115	〃	SK10	〃	皿	-	(1.3)	-	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	回転ナデ。やや磨耗。
〃	116	〃	〃	〃	杯	-	(1.1)	-	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ。回転糸切り。
〃	117	〃	〃	〃	〃	-	(1.1)	3.4	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。切り離し, 不明。ナデか。やや磨耗。
〃	118	〃	〃	土師器	皿	-	(2.1)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 10YR7/3	手づくね皿。口縁部, ヨコナデ。体部, ナデか。やや磨耗。
〃	119	〃	〃	土師質 土器	羽釜	-	(2.8)	-	にぶい黄褐色 10YR4/3	暗灰黄色 2.5Y4/2	口唇部, 面取り, 内傾。内外面, ナデか。やや磨耗。
〃	120	〃	〃	陶器	皿	10.6	(2.5)	-	オリーブ黄色	灰白色	回転ナデ。光沢の有る灰釉。
〃	121	〃	SK11	磁器	碗	-	(2.5)	4.5	灰白色	灰白色	高台, 1条の圏線。畳付, 釉はぎ。
〃	122	〃	〃	陶器	〃	12.5	(5.3)	-	灰白色	灰白色	内外面, 灰白色の釉薬。口縁部のみ, オリーブ灰色の釉薬。
〃	123	〃	〃	〃	皿	-	(2.0)	4.3	灰白色	灰白色	灰白色の釉薬, 内面はムラが有る。見込み, 畳付け, 腰部に砂目。肥前系。
〃	124	〃	〃	〃	鉢	12.3	(5.0)	-	灰オリーブ色	灰白色	口縁部, 外反。端部, 丸くおさめる。透明感の有る灰オリーブ色の釉薬。碗か。内面, 付着物有り。
〃	125	〃	〃	〃	〃	-	(4.2)	-	灰色	灰黄褐色	内面, 刷毛目。外面下半部, 露胎。肥前系。
〃	126	〃	〃	土師質 土器	杯	-	(1.8)	6.8	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。内面, ロクロ目。切り離し, 不明瞭。回転糸切りか。
〃	127	〃	SK13	〃	〃	-	(1.3)	8.2	浅黄橙色 7.5YR8/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。切り離し, 不明瞭。回転糸切りか。やや磨耗。
第20図	128	〃	P39	陶器	播鉢	-	(3.2)	-	灰色	灰色	回転ナデ。内面, 10条以上1単位のスリメ。

遺物観察表

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第20図	129	Ⅱ区	P53	土師質 土器	皿	6.4	1.2	4.3	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。回転糸切り。残存率, 良好。やや磨耗。
〃	130	〃	〃	〃	杯	-	(1.8)	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ。
〃	131	〃	〃	〃	〃	-	(2.5)	-	にぶい橙色 5YR7/4	にぶい橙色 5YR7/4	回転ナデ。
〃	132	〃	〃	〃	〃	-	(1.3)	8.3	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ。回転糸切り。
第21図	133	〃	P56	〃	皿	6.6	1.0	5.2	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。切り離し, 不明。外底面, ナデ。
第22図	135	〃	P68	白磁	〃	-	(1.0)	-	灰白色	灰白色	灰白色の釉薬。
〃	136	〃	P75	土師質 土器	〃	6.9	1.5	5.3	橙色 7.5YR7/6	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。回転糸切り。外底面, 簀子状圧痕。
〃	137	〃	P81	土師器	〃	12.6	(3.0)	-	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	手づくね皿。口縁部, ヨコナデ。体部, ナデ。
第23図	139	〃	P95	土師質 土器	杯	-	(1.2)	6.4	橙色 2.5YR7/6	橙色 2.5YR7/6	回転ナデ。内面, ロクロ目。回転糸切り。
〃	140	〃	P106	〃	皿	8.7	1.2	7.0	浅黄橙色 7.5YR8/3	浅黄橙色 7.5YR8/3	回転ナデ。回転糸切り。
〃	141	〃	〃	〃	杯	13.4	(2.3)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。
〃	142	〃	〃	〃	〃	-	(2.1)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。
〃	143	〃	〃	〃	〃	-	(2.8)	-	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/3	回転ナデ。外面, 弱いロクロ目。
〃	144	〃	〃	〃	〃	-	(0.8)	4.6	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。ヘラ切りか。
〃	145	〃	〃	〃	〃	-	(1.3)	4.5	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	回転ナデ。回転糸切り。外底面, 簀子状圧痕。
〃	146	〃	〃	瓦質 土器	羽釜	23.0	(5.8)	-	灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y7/1	口縁部, 内湾。口唇部, 凹面状。低い鑊を付す。やや磨耗。
第24図	147	〃	P107	土師質 土器	皿	6.8	1.4	5.0	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。回転糸切り。外底面, 簀子状圧痕。残存率, 良好。やや磨耗。
〃	148	〃	〃	〃	杯	13.6	(2.5)	-	浅黄橙色 10YR8/4	浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ。
〃	149	〃	P108	〃	〃	-	(1.7)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。
〃	150	〃	P118	〃	皿	-	(1.3)	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ。
〃	151	〃	〃	〃	〃	6.8	1.3	5.4	黄灰色 2.5Y5/1	黄灰色 2.5Y5/1	回転ナデ。回転糸切り。やや磨耗。
〃	152	〃	〃	〃	杯	-	(0.9)	5.4	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR6/3	回転ナデ。回転糸切り。被熱変色。
〃	153	〃	P120	〃	〃	-	(1.5)	7.2	橙色 2.5YR6/6	橙色 2.5YR6/6	回転ナデ。外面, 弱いロクロ目。切り離し, 不明。
〃	154	〃	P121	〃	〃	-	(1.0)	4.8	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。内面, 弱いロクロ目。回転糸切り。
〃	155	〃	P128	〃	〃	12.6	(2.2)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第24図	156	II区	P130	土師質 土器	杯	-	(1.9)	7.3	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/3	回転ナデ。切り離し、不明。やや磨耗。
〃	157	〃	〃	〃	〃	-	(0.7)	-	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。切り離し、不明。やや磨耗。
第25図	158	〃	SX3	〃	皿	7.0	1.3	5.6	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。切り離し、不明。磨耗。
〃	159	〃	〃	〃	〃	7.5	1.4	5.5	浅黄橙色 10YR8/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。回転糸切り。やや磨耗。
〃	160	〃	〃	〃	〃	-	1.2	-	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。切り離し、不明。やや磨耗。
〃	161	〃	〃	〃	〃	-	1.5	-	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	回転ナデ。切り離し、不明。磨耗。
〃	162	〃	〃	〃	〃	-	1.1	-	浅黄橙色 7.5YR8/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。回転糸切り。やや磨耗。
〃	163	〃	SX3_P1	〃	〃	-	(1.4)	-	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	回転ナデ。
〃	164	〃	SX3	〃	杯	-	(2.8)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ。内外面、ロクロ目。回転糸切り。
〃	165	〃	〃	瓦質 土器	鍋	-	(1.5)	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	口縁部、内傾。口唇部、丸みを持った面取り。
第26図	166	〃	包含層	土師質 土器	皿	8.7	(2.0)	7.1	黄灰色 2.5Y5/1	灰白色 10YR8/2	回転ナデ。内面、ロクロ目。回転糸切り。口縁部、破断面か。
〃	167	〃	〃	〃	杯	8.8	3.3	5.0	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	回転ナデ。器壁、厚い。タール付着。灯明皿か。
〃	168	〃	〃	〃	〃	-	(2.0)	6.2	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	回転ナデ。切り離し、不明。磨耗。
〃	169	〃	〃	〃	〃	-	(2.2)	8.0	にぶい橙色 7.5YR7/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ。切り離し、不明。磨耗。
〃	170	〃	〃	〃	〃	-	(4.1)	7.0	浅黄橙色 10YR8/3	にぶい黄橙色 10YR7/2	回転ナデ。内底面・外面、ロクロ目。回転糸切り。被熱変色。
〃	171	〃	〃	〃	〃	-	(2.9)	7.1	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ。回転糸切り。やや磨耗。
〃	172	〃	〃	〃	椀	-	(1.4)	5.7	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	内面、ミガキか。断面三角形の高台。煤、付着。磨耗。
〃	173	〃	〃	土師器	皿	14.0	(1.9)	-	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	手づくね皿。口縁部、強いヨコナデ。煤、付着。
〃	174	〃	〃	〃	〃	11.2	(2.8)	-	灰白色 10YR8/2	浅黄橙色 10YR8/3	口縁部、ヨコナデ。外面、指頭圧痕。内面、ナデ。
〃	175	〃	〃	〃	〃	-	(2.6)	-	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	口縁部、ヨコナデ。
〃	176	〃	〃	青磁	稜花 皿	10.7	(2.0)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	口縁部、3条の沈線文。内面に文様有り。
〃	177	〃	〃	〃	〃	-	(0.8)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	口縁部、4条の沈線文。
〃	178	〃	〃	〃	碗	12.9	(1.7)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	口縁部、外反。口唇部、丸くおさめる。
〃	179	〃	〃	〃	〃	-	(3.8)	-	灰オリーブ色	灰オリーブ色	鎗蓮弁文。
〃	180	〃	〃	〃	〃	-	(4.6)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	鎗蓮弁文。

遺物観察表

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第26図	181	Ⅱ区	包含層	青磁	碗	-	(2.8)	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	雷文帯。
〃	182	〃	〃	磁器	〃	-	(3.1)	-	灰白色	灰白色	外面、圏線・斜格子文。内面、2重圏線。
〃	183	〃	〃	〃	〃	-	(1.8)	5.0	灰白色	灰白色	疊付、釉はぎ。高台内面、砂付着。外面、染付。
〃	184	〃	〃	〃	皿	-	(1.4)	5.8	灰白色	灰白色	疊付、釉はぎ。
〃	185	〃	〃	〃	〃	-	(1.4)	-	緑灰色	緑灰色	内外面、青磁釉。疊付、釉はぎ。
〃	186	〃	〃	陶器	碗	10.4	(2.7)	-	極暗褐色	極暗褐色	天目茶碗。釉調、鉛色。瀬戸産。
〃	187	〃	〃	〃	〃	-	(3.6)	3.8	灰白色	黄灰色	高台、露胎。外面の釉調、光沢の無い灰色。見込み、染付。
〃	188	〃	〃	〃	〃	-	(1.5)	6.8	浅黄色	灰白色	内面、浅黄色の釉薬。外面、露胎。
〃	189	〃	〃	〃	皿	12.4	(2.4)	-	灰オリーブ色	灰オリーブ色	灰オリーブ色の釉薬。外面下半部、露胎。
〃	190	〃	〃	〃	〃	-	(1.8)	-	灰色	灰オリーブ色	灰オリーブ色の釉薬。
〃	191	〃	〃	〃	〃	12.4	(2.9)	-	灰褐色	灰褐色	外面、2条の沈線。鉄釉。
〃	192	〃	〃	〃	〃	14.9	(2.1)	-	灰黄色	灰黄色	口縁部、屈曲。口縁部内面、柳描文。口縁部内面・口唇部、灰オリーブ色の釉薬。
〃	193	〃	〃	〃	〃	-	(1.6)	4.4	灰白色	灰白色	疊付、釉はぎ。見込み・高台、砂目。
〃	194	〃	〃	〃	〃	-	(1.4)	3.1	灰白色	灰白色	灰白色の釉薬。外面腰部以下、露胎。見込み、目跡か。
〃	195	〃	〃	〃	〃	-	(3.6)	3.6	灰黄色	にぶい橙色	灰黄色の釉薬。外面腰部以下、露胎。見込み、砂目。
〃	196	〃	〃	〃	〃	-	(1.2)	7.8	浅黄色	灰白色	特徴的な削り出し高台。内面、浅黄色の釉薬。外面、露胎。見込み、胎土目跡。
第27図	197	〃	〃	須恵器	捏ね鉢	25.0	(6.2)	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	口縁部、上方へ拡張。回転ナデ。被熱変色。やや磨耗。
〃	198	〃	〃	〃	〃	-	(3.4)	-	灰色 N7/0	灰色 N7/0	東播系。口縁部、上方へ拡張。回転ナデ。
〃	199	〃	〃	陶器	搦鉢	-	(4.0)	-	にぶい橙色	橙色	回転ナデ。10条1単位のスリメ。使用感有り。
〃	200	〃	〃	土師器	甕	-	(3.3)	-	褐色 7.5YR4/4	褐色 7.5YR4/4	口縁部、外反。口唇部、凹面状。内外面、ナデ。
〃	201	〃	〃	土師質 土器	羽釜	-	(3.3)	-	にぶい黄橙色 10YR7/2	にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁部に鏝を付す。やや磨耗。
〃	202	〃	〃	〃	〃	-	(2.8)	-	橙色 7.5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	口唇部、内傾。口縁部に鏝を付す。内外面、ナデ。煤、付着。
〃	203	〃	〃	〃	〃	-	(3.2)	-	黄橙色 7.5YR7/8	にぶい黄橙色 10YR7/4	口唇部、内傾。内外面、ナデ。
〃	204	〃	〃	〃	〃	-	-	-	橙色 7.5YR6/6	褐灰色 10YR4/1	格子目叩き。煤、付着。
〃	205	〃	〃	瓦質 土器	鍋	-	(4.6)	-	灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	口唇部、外傾。内外面、ナデ。

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	器形	法量			色調		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	
第27図	206	Ⅱ区	包含層	瓦質 土器	羽釜	-	(2.8)	-	灰白色 5Y8/1	灰色 7.5Y4/1	口唇部, 面取り。断面三角形の鑊を付す。ナデ。やや磨耗。
〃	207	〃	試掘トレンチ T2	〃	〃	-	(3.2)	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	鑊を付す。ナデ。やや磨耗。
〃	208	〃	〃	土師質 土器	茶釜	-	(7.6)	-	灰白色 2.5Y8/2	にぶい黄褐色 10YR5/3	把手, 断面長方形の鑊を付す。内外面, ナデ。煤, 付着。

石製品

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	器種	石材	法量				特徴
						全長	全幅	全厚	重量	
第9図	3	Ⅰ区	P6	砥石	砂岩	(19.4)	(11.9)	(3.3)	(1.127)	2面残存。使用により凹む。被熱変色。欠損。根石として使用。

スラグ

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	法量				特徴
				全長	全幅	全厚	重量	
第21図	134	Ⅱ区	P56	2.7	3.2	1.6	7.3	鍛錬鍛冶滓。
第27図	209	〃	包含層	2.9	3.6	2.0	17.2	鍛錬鍛冶滓。

土錘

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土遺構/ 層序	法量				色調		特徴
				全長	全幅	全厚	重量	内面	外面	
第14図	102	Ⅰ区	包含層	4.1	1.8	1.5	8.7	-	にぶい橙色 7.5YR6/4	管状土錘。中央部, 膨らむ。孔径0.5cm。被熱変色。完存。やや磨耗。
〃	103	〃	〃	4.0	1.4	1.4	(6.6)	赤橙色 10R6/6	赤橙色 10R6/6	管状土錘。孔径0.5cm。被熱変色。欠損。
第23図	138	Ⅱ区	P89	(1.9)	(1.4)	(1.2)	(1.8)	灰赤色 2.5YR6/2	淡赤橙色 2.5YR7/4	孔径0.4cm。管状土錘。中央部が膨らむ。大部分, 欠損。被熱変色。
第27図	210	〃	包含層	6.1	1.7	1.7	15.0	赤褐色 10R5/3	赤褐色 10R5/3	孔径0.4cm。管状土錘。中央部が膨らむ。ナデ。完存。被熱変色。

写真図版



安芸平野遠景



I区調査前風景

図版2



Ⅱ区調査前風景



Ⅰ区南半部完掘状況



Ⅱ区北半部上面完掘状況



Ⅱ区南半部上面完掘状況

图版4



II区南半部西半下面完掘状况



I区北半部西壁断面



II区北半部東壁断面



SK2断面

図版6



SK7 ~ 11 完掘状況



SX3 礫検出状況1



SX3 礫検出状況2



SX3 断面



SK2掘削状況



SK2壁面状況



SK3完掘状況



SK7断面



SK9完掘状況



SK10完掘状況



SK11完掘状況



SK11断面



P1 断面



P2 断面



P4 断面



P5 断面



P6 砥石出土状况



P8 断面



P9 断面



P13 断面



P15 断面



P16 断面



P20 断面



P38 完掘状况



P42 完掘状况



P42 断面



P54 石出土状况



P54 断面



P71 断面



P72 断面



P73 断面



P74 断面



P106 瓦質土器羽釜出土狀況



包含層青磁碗出土狀況



SX3_P1 完掘狀況



SX3_P2 完掘狀況

図版12



手づくね皿



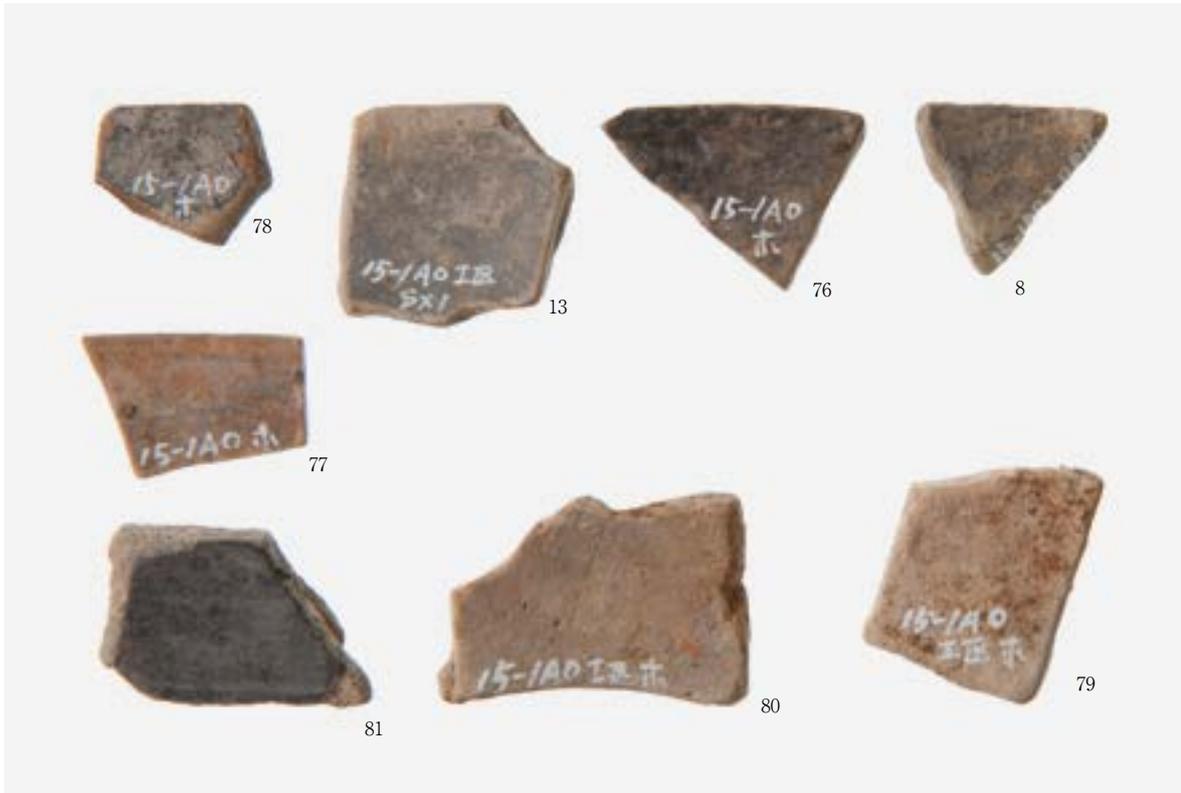
瓦質土器



青磁内面



同上外面



瓦器内面



同上外面



土師質土器羽釜内面



同上外面



須恵器片口鉢, 陶器播鉢・碗



122



192



195





砥石，土師器皿，土錘，土師質土器茶釜



土師質土器杯・皿，磁器碗・皿，陶器皿・碗



磁器碗，陶器鉢，土師質土器皿，スラグ，土師質土器羽釜

報告書抄録

ふりがな	おかいせき							
書名	岡遺跡							
副書名	県道大久保伊尾木線道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第149集							
編著者名	久家隆芳, 坂本憲彦, パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2016年3月4日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかいせき 岡遺跡	〒784-0045 高知県 安芸市 伊尾木	39203	30057	32° 29' 46"	133° 55' 50"	2015. 4. 23 ～ 2015. 5. 27	460㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岡遺跡	集落跡	古代 中世 近世	井戸跡 土坑 性格不明遺構 ピット	1基 12基 3基 131基	土師器 須恵器 土師質土器 瓦器 瓦質土器 国産陶器 貿易陶磁器 近世陶磁器 石製品 スラグ			
要約	<p>調査では古代末から近代まで断続的に遺構・遺物を検出した。</p> <p>12～13世紀段階のものでは同安窯の青磁, 瓦器の椀が出土し, I区を中心に分布している。II区の石敷き遺構(SX3)の埋土で得られた炭化米の放射性炭素年代測定を行った結果では13世紀後半の年代が得られている。SX3は鍛冶関連の遺構と考えられる。</p> <p>14～15世紀段階はI・II区ともに遺物が出土している。瓦質土器の鍋, 土師質土器の羽釜が出土している。『長宗我部地検帳』ではI区は「長玄」, II区は「杉ノ下」に該当し地目は水田や畑で占められている。今次調査では確実にこの段階に属する遺物は出土しておらず, 『長宗我部地検帳』の記載と整合的である。</p> <p>17世紀段階はII区において, 石組みの井戸跡, 土坑群を検出し, 屋敷地を構成するものと推測される。土坑群の軸方向及び土坑群周辺で検出したピットの並びの方向は概ね現在の道路・畦の方位に一致し, 遅くとも17世紀以降の地割りを踏襲している。14～15世紀段階にはI・II区に分布がひろがる。16世紀段階は生産域として利用され, 17世紀段階にはII区に屋敷地が形成される。安芸市域の遺跡は安芸平野周囲の丘陵端部にみられる傾向が強く, 調査区に隣接する丘陵上に集落が営まれていたと推測される。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第149集

岡遺跡

県道大久保伊尾木線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

2016年3月4日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社

